

日本行動計量学会35年記念誌

行動計量学会



The Behaviormetric
Society of Japan

2008年9月

目 次

はじめに - 記念誌刊行の経緯.....	柳井 晴夫	1
記念誌刊行によせて.....	飽戸 弘	2
日本行動計量学会年表.....		3
[第1部] 日本行動計量学会の35周年を祝って		
日本行動計量学会35周年を祝う.....	山本 俊一	5
日本の計量心理学者は世界におけるビジブル マイノリティではない ...	西里 静彦	6
行動計量学会35周年を祝う.....	高根 芳雄	7
The influence of the Behaviormetric Society stretches far beyond the boundaries of Japan	Michael W. Browne	8
日本行動計量学会35周年を祝う.....	猪口 孝	9
[第2部] 日本行動計量学会の設立まで		
日本行動計量学会立ち上げの経緯.....	丸山久美子	11
行動計量学シンポジウムについて.....	柳井 晴夫	13
行動計量学の名称に対する私の思い.....	池田 央	15
行動計量学という名前.....	繁樹 算男	16
日本行動計量学会と柳井さんのこと.....	柏木 繁男	17
師友に恵まれて35年.....	後藤 昌司	18
学際研究と学際偏見.....	安田 三郎	19
サイバネティックスから行動計量学へ.....	井上 通敏	20
日本行動計量学会の発足にあたって.....	林 知己夫	21
[第3部] 創成期における学会活動		
和文誌編集幹事となって.....	野元 菊雄	23
欧文誌第1号刊行にあたって.....	印東 太郎	24
第2代欧文誌編集委員長を担当して.....	松原 望	25
行動計量学会でお世話になった人々.....	宮原 英夫	26
行動計量学会と私.....	上笹 恒	27
水野欽司先生と日本行動計量学会事務局.....	岩坪 秀一	28
行動計量学シリーズ刊行をめざして.....	青山博次郎	29
「データ解析」随想.....	奥野 忠一	30
林知己夫先生の師縁に感謝して.....	宮原 守男	31
初代理事長林知己夫先生の思い出.....	肥田野 直	32

[第4部] 発展期における学会活動

縦書きを横書きに～会報～	杉山 明子	33
「事務局」1985-1988の思い出	岡太 彬訓	34
1980年代の役割と期待	河口 至商	35
計量医学の要	駒澤 勉	36
村落研究と計量社会的アプローチ	西田 春彦	37
日本行動計量学会での活動	狩野 裕	38
日本行動計量学会との関わり	佐井 至道	40
日本行動計量学会第24回大会のこと	宮埜 壽夫	41
「行動計量学会誌」編集委員長時代の思い出	久保 武士	42
日本行動計量学会35周年に寄せて	林 文	43
運営委員会活動と行動計量学会	山岡 和枝	44
運営委員・広報委員などとして活動して	前田 忠彦	45
「同じ釜の飯を食う」春の合宿セミナー	大森 拓哉	46
「シンポジウム担当」運営委員として	松本 正生	47
会報の編集を担当するようになって	西川 浩昭	48
いくつかのお手伝いを通じて - 私と日本行動計量学会 -	森 裕一	49
日本行動計量学会35年記念誌の編集に携わって	森本 栄一	50
事務局から見た行動計量学会今昔	馬場 康維	51
『林知己夫著作集』の刊行	村上 征勝	52

[第5部] 行動計量学との関わり

隣り付きの記	丘本 正	53
文化の行動計量	三隅二不二	54
パソコン雑感	藤田 広一	55
非対称性の解析と行動計量学とのかかわり	千野 直仁	56
「行動計量学」 - 実践の学問 -	吉野 諒三	57
独学にも行動計量学会という師匠あり	足立 浩平	58
行動計量学、Behaviormetrika への掲載論文	岩崎 学	59
若い研究者がイキイキ活動できる学会	富山 慶典	60
マーケティングの実学的性格	朝野 熙彦	61
行動計量学に学ぶ	岸野 洋久	62
行動計量学と大学入試	倉元 直樹	63
私の研究と行動計量学との関わり - 森林から人間へ	鄭 躍軍	64
本物の調査者との出会い	松田 映二	65
電話調査と行動計量学	城川 美佳	66
行動計量学会との関わりと今後	広田すみれ	67
日本行動計量学会の良き動きとともに	若山 大樹	68
多元データの計量化	中山 厚穂	69
日本行動計量学会に参加して	竹内 光悦	70
日本行動計量学会35周年に寄せて	藤井 聡	71

[第6部] これからの行動計量学会に望む

今、“行動計量”に欲しいもの	水野 欽司	73
行動計量学と多変量時系列解析.....	脇本 和昌	74
日本行動計量学会への感謝.....	村上 隆	75
行動計量学の日本のマーケティングへの貢献.....	柳原 良造	76
日本行動計量学会の魅力をいかに伝えるか.....	木村 邦博	77
行動計量学会への期待.....	安田 裕司	78
データ解析について思うこと.....	豊田 秀樹	79
行動計量学と行動科学.....	岡本 安晴	80
これからの行動計量学会に思うこと.....	今泉 忠	81
行動計量学でどんな研究ができるか？.....	大津 起夫	82
お料理教室としての行動計量学会.....	木下 冨雄	83
行動計量学とオペレーショナリズム - 対比較の数量化と POSA	飽戸 弘	84
論文 - その世俗的な話し -	林 知己夫	85

[資料編]

1 歴代役員.....		87
2 学会大会.....		88
3 学会賞受賞者.....		89
4 学会誌の特集.....		91
5 学会活動.....		93
5 - 1 月例シンポジウム・行動計量シンポジウム・講習会.....		93
5 - 2 春の合宿セミナー.....		97
5 - 3 研究部会.....		98
6 出版活動.....		99
7 会報巻頭言.....		100
8 会員数の変遷.....		103

編集後記.....		104
-----------	--	-----

協賛企業一覧

広告

表紙題字：林知己夫
 ロゴデザイン：佐藤敬之輔

はじめに - 記念誌刊行の経緯

柳 井 晴 夫

日本行動計量学会35年記念誌編集委員会委員長

1973年9月に日本行動計量学会が発足し、昨年の2007年大会（同志社大学）で第35周年を迎えた。林知己夫初代理事長（1973年9月～88年3月）、肥田野直2代目理事長（1988年4月～91年3月）、水野欽司第3代目理事長（1991年4月～94年3月）の跡をついで、4代目理事長（1994年4月～2000年3月）の重責を果たすことが出来た。この後理事長に就任された、杉山明子氏（2000年4月～2006年3月）、および飽戸弘氏（現理事長）（2006年4月～）から、日本行動計量学会史編纂担当委員（責任者）を委嘱されていたにも拘らず、これまで、責任を果たすことができなかった。今回、昨年の大会が35周年を迎えたことがひとつの契機となり、現理事会に、学会史編纂担当委員を35年記念誌編集委員会に昇格させていただくことになった。このような経由で、現理事会において認められた日本行動計量学会35年記念誌編集委員会は以下のメンバーである。

委員長：柳井 晴夫

副委員長：杉山 明子

委員：岩坪 秀一・西川 浩昭・馬場 康維・丸山 久美子・松原 望
森本 栄一・森 裕一・吉野 諒三

これらの委員による委員会を2008年の1月に開催し、上記の委員のうち、西川浩昭・森裕一・森本栄一と柳井の4名で編集の仕事を開始した。

まず、巻頭言は飽戸弘理事長に依頼した。その後、行動計量学会年表を作成したが、それらの年表の内容を補足する意味で、過去に、理事、編集委員、運営委員、学会賞受賞者などに、「日本行動計量学会35周年を祝う（仮題）」を執筆いただいた。執筆を快諾して頂いた61名の会員の方々にこの場を借りて謝意を表したい。

なお、林知己夫元理事長はじめ鬼籍に入られた先生方については過去にご執筆いただいた会報の巻頭言を原文のまま掲載させて頂いた。さらに、巻末には資料集をつけた。これらの内容を盛り込んだ日本行動計量学会35年誌は、本学会員にとって貴重な財産になりうるものである。

記念誌刊行によせて

飽 戸 弘
日本行動計量学会理事長

行動計量学会の設立第1回大会に参加したのが、もう35年前とのこと、感慨を禁じえない。

当時、通常の学会は2日間というのが常識であったが、本学会は4日間、連日、発表と真剣な議論が交わされ、すっかり度肝を抜かれたことだった。若い研究者の熱気が伝わってきたものだ。

この「若い」研究者というのは、年齢が若いということだけではない。なぜならそこには、今日われわれの学会の中心で活躍している、当時まさに若かった皆さんも参加していたが、それだけでなく、政治学、文化人類学、社会学、医学、統計学、心理学などの中堅、長老たちも、多数出席しておられた。重要なことはそれらすべての人たちが、新しい研究分野に、新しい研究方法に、新しい分析手法に、積極果敢に挑戦しているものばかり、と言う点が共通点であったから「若い！」学問の結集、と言う印象が強烈に残ったのだろう。

発表論文は、今から思うと玉石混交だったように思う。そうか、こんなことが計量できるのかと、でも、こんな分析をして良いのだろうか、時には感心し、時にはあきれ、しかしいずれも新しいチャレンジと言う点で、衝撃をうけたことだった。いままであまり計量分析や統計解析などを用いた研究の少なかった分野に、はじめて本格的計量・統計分析が適用された研究、それは高度な解析ではないが、それだけで画期的だったのだ。そして、上述のような実にさまざまな分野の研究者が、さまざまな主題を取り上げ、研究している、その多様さも、目を見張るものであった。こんな分野でこんな研究をしている人がいる！という新鮮な驚きの連続であった。

一言で言えば、あらゆる分野の研究者が、計量研究、統計解析、という共通項で結集した「マルティディスプレイナリー」な学会、というのが、私の第一印象であり、強烈な感動をもったものだ。

そして新しい現象の解析には、新しい調査方法、解析方法が、どんどん提案されて行った。数量化理論、多次元尺度解析、さまざまなシミュレーション分析など、レディメードの分析手法をただ適用するのではなく、「オーダーメイドの分析手法」が、次々に開発されていった。特に、一対比較の数量化、MDA-OR、MDA-URなどは、最初の応用データを収集することができ、最初の解析結果を見ることができたのは、今も貴重な思い出である。

今日の行動計量学会は、研究分野も限られ少なくなった。一つ一つの研究のレベルは当時から比べたら大きく進歩しているのだろうが、小さくまとまっていて、安全運転ばかりで、どうも面白くない。かつてのあのやや野蛮なまでの活力が懐かしい。若い研究者諸君に、無理難題に挑戦し、玉砕寸前で、なんとか踏みとどまった、そんな元気の良い研究を見せてもらいたいものである。

日本行動計量学会年表

年	月	事 項
1969	8	第1回行動計量学シンポジウム開催（学会館本郷分館）
1970	8	第2回行動計量学シンポジウム開催（8/24 - 26）（学会館本郷分館・国立教育会館第9研究室、発表数 = 18）
1971	8	第3回行動計量学シンポジウム開催（8/25 - 28）（学会館本館、発表数 = 42）
1972	8	第4回行動計量学シンポジウム開催（8/30 - 9/2）（統計数理研究所、発表数 = 49）
	9	行動計量学会発足準備委員会設立
1973	9	日本行動計量学会発足（第1回大会：統計数理研究所、大会長 = 林知己夫、発表数 = 61）、参加者数300名を越える。 林知己夫理事が初代理事長となる 東京大学医学部疫学教室に事務局が置かれる（初代事務局長：柳井晴夫理事）
	12	会報第1号が発行される（巻頭言：林知己夫）
1974	1	第1回月例会開催（行動計量学の諸問題、統計数理研究所）（後に「月例会シンポジウム」、「行動計量シンポジウム」に改称）
	2	数理科学（第12巻2号）発行、特集「行動計量」（会員に無料で配布）
	3	行動計量学（第1巻1号）刊行、特集「行動計量学の課題」（編集委員長：野元菊雄理事）
	4	会員名簿発行（正会員420名、準会員67名、賛助会員25社）
	9	Behaviormetrika（No.1）刊行、6論文が掲載される（編集委員長：印東太郎理事）
1976	2	会員名簿発行
	4	林知己夫理事が理事長に再選
1977	4	統計数理研究所に事務局が移転（事務局長：水野欽司理事）
1979	4	林知己夫理事が理事長に再選
1980	7	Behaviormetrika、年2冊刊行となる
1982	4	林知己夫理事が理事長に再選 大学入試センターに事務局が移転（事務局長：岩坪秀一理事）
	8	10周年記念大会が開催される（国立国語研究所） 記念公開講演「日本人論と行動計量学」（林知己夫）、「言語行動の国際比較」（林大）
1983	8	会員数が1,000人を越える
1984	3	会員名簿発行
	8	日本学術会議登録団体となる

年	月	事 項
1985	4	林知己夫理事が理事長に再選 立教大学に事務局が移転（事務局長：岡太彬訓理事）
1986	9	学会賞設立 [功績賞（第1回受賞者：高根芳雄会員）、優秀賞（第1回受賞者：富山慶典会員・永岡慶三会員）]
1988	4	肥田野直理事が第2代理事長となる 国立国語研究所に事務局が移転（事務局長：江川清理事）
1989	12	会員名簿発行
1991	4	水野欽司理事が第3代理事長となる 東京工業大学に事務局が移転（事務局長：繁榊算男理事）
1993	9	山本俊一元理事が名誉会員（第1号）となる
	11	行動計量学シリーズの刊行が開始される
1994	4	柳井晴夫理事が第4代理事長となる 統計数理研究所に事務局が移転する（事務局長：村上征勝理事）
	7	会員名簿発行
1996	9	第24回大会を日本統計学会と共催（宮埜壽夫・大会実行委員長、幕張メッセ）
1997	3	第1回春のセミナー合宿を開催（東京大学検見川セミナーハウス）
	4	柳井晴夫理事が理事長に再選
1998	8	会員名簿発行
	7	Behaviormetrika（Vol.25より）とPsychometrika（Vol.63, No.3より）が掲載論文の目次交換を開始
1999	9	学会賞（奨励賞）設立（第1回授賞者：土屋隆裕会員）
2000	4	杉山明子理事が第5代理事長となる
	12	会員名簿発行
2002	9	学会賞（功績賞・優秀賞）が林知己夫賞（功績賞・優秀賞）に、学会賞（奨励賞）が肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）に改称される
2003	4	杉山明子理事が理事長に再選 事務局長：馬場康維理事（統計数理研究所）
	11	日本社会学会、日本教育社会学会、日本行動計量学会の3学会が相互の連携協力のもと、社会調査士資格認定機構を発足させた
2005	3	会員名簿発行
2006	4	飽戸弘理事が第6代理事長となる 事務局長：吉野諒三理事（統計数理研究所）
2007	12	会員名簿発行

第 1 部

日本行動計量学会の
35周年を祝って

日本行動計量学会35周年を祝う

山本俊一
東京大学名誉教授

日本の大部分の学会は、同じ専門分野の研究者が集まって、互いに研修し批判するいわゆる「縦割り学会」である。その方法論を共有するからといって、多くの異質の専門分野からの研究者を集めて、その方法論を論ずるという「横割り学会」は少ない。

日本行動計量学会発足当時の会員の多くは、「このような形式の学会は、日本の社会には適さないため成立しないのではないか？ また、たとえ成立したとしても、それが長続きするかどうか？」と心配した。しかし、現実には、この学会はその後発展し、ここに35周年を迎えた。めでたい限りである。また、これは如何に行動計量学が各分野で方法論として役立っているか、の証拠であろう。

[名誉会員、元編集委員長]

日本の計量心理学者は世界におけるビジブル マイノリティではない

西里 静彦

トロント大学名誉教授・関西学院大学

1965年9月アメリカ留学から帰国した晩秋のこと恩師故戸田正直教授の推薦で箱根小湧園で北川敏男、国沢清典、森口繁一先生指揮下に開催された日科技連の会合に出席した。テーマは因子分析。それから43年、いまでも吉沢正、奥野忠一、竹内啓先生などの講演、それに続いた素晴らしい質疑応答が強く印象に残っている。討論の雰囲気素晴らしかった。若輩、浅学の自分でも当たり前にはばかりず討論に参加するグループダイナミクスがあった。それは留学前には思いもよらない学際的な会合で日本の学界の新しい夜明けを告げているように思われた。それまで心理学を専攻しながら統計学部、バイオメトリクスの公衆衛生学部のセミナーに自由に出席できたノースカロライナ大学の学際的環境が日本にもあればと考えて帰国したが、その様な環境が既に生まれていたのである。

1966年には就職難の日本を発ちカナダへ、そして1967年マギル大学からトロント大学に移ったが、私の所属した学部には心理学、統計学、物理学、数学、教育心理学の専門家がいた。その多彩な背景は当時の北米の大学の良いところのひとつで、様々な領域のコンサルタントの集まりのようであった。しかし皆は専らそれぞれの専門領域の学会にだけ出席するという実情があった。現在の北米では、多くの学会で関連領域の人々の参加が増えているが、統計学会であれば統計学の専門家が全体を牛耳っているというのが実情である。

それに比べ、行動計量学会は様々な領域の第一線で活躍している研究者が集まって構成したバランスの取れた学際的学会である。35年前に発足した学会は世界でも非常にユニークな存在であった。このように考えると、行動計量学会の構想を練り発足させた人々のビジョン、学会を支え学会の発展に貢献してきた多くの人々の尽力は非常に高く評価されるべきであろう。これは行動計量学会会員全ての誇りである。

行動計量学会の学際性は多くの人々に学界での活躍の場を与え、様々な考えの存在を体験させ、どのような専門領域でどのような知識を持っていても各自の妥当な問題意識が存在し、それが正当な研究につながっていることを教えてくれた。

私の専門領域は計量心理学であるが、計量心理学には例えば統計の専門家には見えないかもしれない問題があると思って自分なりの研究に従事してきた。

1960年代の日本の計量心理学の研究者の数はごく僅かで、国際的貢献も限られていた。現在はどうかであろう。日本の多くの計量心理学者が世界に向かって羽ばたいた。もはや日本の計量心理学者は世界におけるビジブル マイノリティではない。この背後には行動計量学会の大きな貢献があったからで、大いに感謝している。行動計量学会の更なる健全な発展を祈りたい。

[2001年度 (第16回) 功績賞受賞]

I understand that the Behaviormetric Society of Japan is thirty five years old. This period almost perfectly coincides with my career as a quantitative psychologist. I came to North America as a graduate student at the psychometric Lab at the University of North Carolina (UNC) in 1972, and it's been 36 years since then. It means that the Society was officially born one year after I moved to North America, although preliminary movement toward the creation of a new academic society was already apparent with Professor Yanai spearheading the movement.

In 1977, I got my Ph.D at UNC and moved to Canada. My record indicate that I attended ten annual meetings of the Society (8 th at Keio, 10th at Kokuritsu Kokugo Kenkyujo, 11th in Kyoto, 13th at Hokudai, 14th at Todai, 16th at Chibadai, 17th in Okayama, 19th at Nagoya, 21st at Handai, and 22nd at Tsukuba). The last one I attended was in 1994, and it's been more than ten years since then. This is partly because a new school year used to start after the Labor Day (the first Monday in September) in North America, but recently it often starts earlier (sometimes at the end of August) to finish the fall semester before Christmas. This has made it difficult for me to attend the meeting, which is usually held in mid-September. In 1986, I received the first Scientific Contribution Award (now renamed Hayashi-sho) from the Society. I recall that I advocated the development of “ cognitive statistics ” and statistical expert systems at that time, but so far this has not materialized to a satisfactory degree.

[1986年度 (第 1 回) 功績賞授賞]

The influence of the Behaviormetric Society stretches far beyond the boundaries of Japan

Michael W. Browne
The Ohio State University

The Behaviormetric Society of Japan is an influential and productive society of about 1000 members. I find it laudable that it facilitates cooperation between producers of mathematical and statistical methodology and the social scientists who apply it in their research. Approximately half its members are mathematically skilled developers of sophisticated methodology and the other half are applied scientists from various disciplines who make use of the most modern statistical methodology in the execution of their research projects.

The society is predominantly Japanese but maintains strong international ties. It produces one journal in Japanese, the Japanese Journal of Behaviormetrics, and an international journal, Behaviormetrika, with articles published predominantly in English but with occasional contributions in other languages. The contributors to Behaviormetrika include many internationally renowned scientists, and the regular invited contributions on important topics by acknowledged experts are of special interest. It is worth noting that reprints of Behaviormetrika articles are available without charge on the Internet at <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/bhmk/>. A number of members of the Behaviormetric Society are also members of the Psychometric Society and some have served on the Board of Trustees of the Psychometric Society or as Associate Editors of Psychometrika. There is a reciprocal arrangement between Behaviormetrika and Psychometrika in which each journal publishes the table of contents of the other.

In summary, the Behaviormetric Society of Japan is a flourishing society devoted to the quantitative analysis of behavior and its influence stretches far beyond the boundaries of Japan.

[Associate editor of Behaviormetrika]

日本行動計量学会35周年を祝う

猪 口 孝

中央大学法学部・東京大学名誉教授

行動計量学会の35周年記念に際して祝賀の気持ちをお伝えいたします。実は行動計量学会に至るまでは、何回も学習会、研究会のようなものに参加していました。当時は大学院時代の終わり頃でした。柳井晴夫教授が当時から指導者でした。私は政治学・国際関係論の分野で、計量的な方法を用いて奮闘していました。具体的には、国際関係の動きを政治指導者の手紙のやりとりから分析していました。大量の外国語の新聞を読むことがひとつの難関、もうひとつの難関は言葉をどう分析するかでした。後者は多変量解析に落ちつきました。多変量解析といってもはじめからやるのですから、結構大変でした。

まず、当時、フォートランでしかも自分でプログラムをかけたということで、私も数量化理論第Ⅲ類と第Ⅳ類のフォートラン・プログラムを東京大学大型計算機センターのライブラリーに寄付しました。それから計算してもらおう仕組みになっていたのですが、いちいちバンチカードを打ちにいたり、計算結果を取りにいたりで大変というか、呑気な時代だったなあと思います。それだけ懐かしい気もします。行動計量学会へと向かう過程のただなかで米国留学に行きました。帰ってきたら学会は出来ていました。改めて当時の柳井教授はじめ、繁樹教授などのイニシアティブの偉大さを感じました。

留学から帰ってしばらくして日本行動計量学会の仲間と本郷の近くで食事をしたことがありました。そのときなんでそこだけよく覚えているのかわかりませんが、スパゲッティを頼もうとしたら、メニューの名前がわかりません。挽き肉トマト・ソースのがナポレタンとはてんで知りませんでした。誰だったかが、米国にいてもナポレタンも知らないみたいと驚いていました。それらしいものは米国でも賞味はしていましたが、名前にはこだわらず、食べるだけでまったく無知でした。そんな穏やかな時代でした。その後、行動計量学会もほんのたまにしか参加できず、当時から忸怩たるものがありました。でも何かで偶然遭遇することがありました。

柳井教授に駒場東大前駅ですれ違ったこともあります。繁樹教授には大学院生の支援を求めたこともありました。もっと最近では2007年夏のサイコメトリカの東京大会に参加しました。行動計量学会報で知った35周年記念の行事にも参加させてもらおうかなあと思っています。この数年、アジア29カ国で「普通の人々の日常生活」について世論調査を行っております。行動計量学に再接近していることをひしひしと感じます。多変量解析でもその他の計量的方法についても進歩が激しく、とまどうこともあります。牧歌的時代に育ったものには当然でしょう。驚異的な躍進をとげた行動計量学会の35周年にあらためて祝意を表明いたします。

[元編集委員、元運営委員]

第2部

日本行動計量学会の 設立まで

日本行動計量学会立ち上げの経緯

丸山 久美子
聖学院大学人間福祉学部

日本行動計量学会が誕生した今から35年前の風景を思い描いて見ると、学生運動たけなわの光景が目につく。学園紛争が本格化した1969年、私は青山学院大学文学部の助手であり、大学が全共闘によって封鎖されていたので、心理学実験もデータ解析も全く出来ない不穏な状況にあった。私は当時統計数理研究所の研究部長だった林知己夫先生の研究室に机を運び、朝から夜まで先生のそばで勉強していた。その頃、本郷の学士会館でイリノイ大学のタッカーの元で勉強して帰国し、立教大学社会学部に奉職した後の俊英であった池田央先生を中心にして「多変量解析シンポジウム」と題する勉強会が開かれていた。メンバーは計量社会学の安田三郎先生、柳井晴夫氏、丸山久美子、時折、様子を見に顔を出した中谷和夫氏、まだ学生であった高根芳雄氏、猪口孝氏の少人数で、タッカーの分厚い本を読んだ。タッカーの弟子であった池田央先生にとっては面目躍如の活気ある勉強会であった。その折、柳井氏がこの会を2000名規模の学会にしたいと言い出した。誰も反対する人はいなかったが、学会にするとすれば知名度の高い大物の理事長が必要である。印東太郎先生、肥田野直先生などの大物の名前が浮上したが、最も説得力があり、社会的に知名度の抜群に高い人物として林知己夫先生にお願いすることになった。たまたま私が林先生の部屋で勉強していたので話は比較的簡単に進んだかに見えた。林先生に学会立ち上げの要点を話し、理事長就任のお願いをするために先鞭を切ったのは柳井氏であった。彼は林先生と会見するために、意気込んで統計数理研究所の門をくぐった。しかし、口を利くのもままならない偉大な先生が相手であったから、その時の柳井氏の様子は極めて小心翼翼の内気な学生風情で、ほとんど私が柳井氏の話しの内容を通訳するような形で林先生との話し合いが行われた。この種の話や肥田野先生に持ちかけても、おそらくは一笑に付されたであろう。しかし、林先生には事前に熱烈にこの話を伝えていたので、話は迅速に進んだ。早速、先生は信頼できる優れた教え子であった東京大学教育学部の助教であった芝祐順先生に相談した（林先生は少しの間、東京大学教育学部で統計学の非常勤講師をしていた）。すると、芝先生は「この話は時期早尚であり、計画が甘すぎる」と言ったが、若い人達がこんなに熱心に学会設立を希望するのであれば、暫時様子を見て決断することが賢明であると林先生に助言した。この話を林先生から聞いた柳井氏は悄然として部屋を出たが、私は部屋を飛び出して、終日、広尾界隈をさ迷い歩いた。口さがない友人は「流産ですか」と笑い、私は「もう一度必ず生んで見せる」と息巻いた。これはまさに「女の意地」にも等しい覚悟であった。学会が立ち上がったのは1973年である。その間、三度笠を被り、草鞋をはいて、学会立ち上げに貢献してくれそうな理事を探して全国隈なく歩き回った。学園紛争の最中であったから、大学の先生と会うことは極めて困難であったが、さまざまな先生とお会いして学会設立の意向を伝え、理事の承諾を得た。さらに学会員を募るために多くの人々を勧誘しなければならない。事務局を作る必要もある。柳井氏と私の2人ではどうにも覚束ない。そこで、私は、当時電気試験所（現電子技術総合研究所）の技官であった岩坪秀一氏と会った。電気試験所には多くの若手の研究者が存在したが、この話に乗ったのは岩坪氏だけである。それ以降、柳井、丸山、岩坪の3人組

は運命共同体のように初期の学会運営に尽力した。当時、東京大学医学部保健学科疫学研究室の助手であった柳井氏の研究室を学会事務局に設定して、第1代事務局長に柳井晴夫氏が就任した。仕事が立て込んできたので事務局には、更に統計数理研究所の松原望氏、国立教育研究所の梶田叡一氏に加わってもらった。5人の事務局員が決まり、林理事長を筆頭に、東大法学部の碧海純一先生、京極純一先生、医学部の山本俊一先生、工学部の奥野忠一先生、教育学部の肥田野直先生、九州大学文学部心理学の三隅不二夫先生、国立国語研究所の野元菊雄先生、慶応大学の印東太郎先生など忽忽たるメンバーが理事となった。後に、これらのメンバーに加わるのは当時名古屋大学に奉職していた水野欽司先生、立教大学の岡太彬訓氏である。その後、第2代事務局長になったのは名古屋大学から統計数理研究所に移動した水野欽司先生で、先生はエネルギーの全てをこの学会に注ぎ、学会を磐石なものにした。

学会立ち上げ当初の其々のメンバーの思い出は尽きることがないが、その半数は既に物故している。歳月は人を待たない。時の流れは星の瞬きでしかなく、今後行動計量学会がどのような流れに沿って歩むのか知るべくもない。当初の理念は人間の行動を科学哲学的視点から外れることなく、実際のデータを地道に積み上げて、実践の場に還元することである。こうした初期の方針が混沌とした21世紀の社会に、どのように生かされてゆくのは興味ある課題である。

[理事、第34回大会実行委員長]

行動計量学シンポジウムについて

柳井晴夫

聖路加看護大学・大学入試センター名誉教授

日本行動計量学会第1回総会は1973年9月に開催され、本年の大会(2008年9月)で第36回大会を迎えることになった。第1回から今回まで継続して理事を務め、さらに、1994年4月から2000年3月までの6年間、理事長として学会の運営に携わってきたものとして、その感慨もひとしおである。

ここでは、日本行動計量学会の設立に直結した、「行動計量学シンポジウム」について紹介させていただきたい。

行動計量学シンポジウムは以下の4回にわたって開催された。第1回：1969年(記録無し：8月に本郷学士会館分館で開催された。なお、第2回のシンポジウム案内の文面には「第1回大会では、因子分析の諸問題(最尤法、共通性、因子得点、非線形問題)、分散分析と回帰分析、相関関数分析、テストの情報伝達度、尺度解析、最小次元解析、などの多変量解析を中心としたシンポジウムを行ないました(発表数推定9)」という記録がある。この時、筆者自身は、東大教育心理専門課程博士課程3年で、「評価研究室(仮称)」の中心メンバーであったため、この時のメンバーであった、塗師斌・繁榎算男・牧田亮・高根芳雄(当時文学部心理学教室)(以下敬称略)と協力して、第1回行動計量学シンポジウムを開催したものと推測している。第2回の行動計量シンポジウムは1970年8月24日～26日(3日間)(発表数=18) 学士会館本郷分館、および国立教育会館で開催された。つづいて、第3回は1971年8月25日～28日(4日間)(発表数=42) 学士会館本館、第4回：1972年8月30日～9月2日(4日間)(発表数=41、統計数理研究所)で開催された。

第2回行動計量学シンポジウムの案内文には、発起人代表として柏木繁男(国鉄労働科学研究所)、その他の発起人として、芝祐順(当時成蹊大学)、池田央(当時立教大学)と筆者の計4名の名前が記載されていた。第2回のシンポジウムの演題数は18で、第一著者の名前を発表順にならべると、柏木繁男(2演題)・芝祐順・後藤昌司・池田央・丸山久美子・三觜武・柳井晴夫・高根芳雄・塗師斌・繁榎算男・福原文雄・安本美典・佐藤隆博・牧田亨・高橋丈司・肥田野直となる。これら16氏の多くは計量心理学を専門とされていた。第3回になると、発表数は18から42に増加。第2回シンポジウムに発表されず、第3回に発表された方のお名前を挙げさせて頂くと、竹内啓・生沢雅夫・増山英太郎・豊川裕之・大崎紘一・丘本正・加納克巳・久保武士・柳本武美・浦昭二・中山剛・白崎和夫・内藤雅子・関寛治・山下恒夫・中谷和夫・岩坪秀一・林知己夫・西村春夫・田中靖政・前田俊郎・廣瀬弘忠・平山政市・池田一貞・松本浩太郎。その頃から著名であった統計学者の林知己夫、丘本正、竹内啓らが発表者名に名をつらねている。さらには、医学系の研究者が多く含まれている。第4回になって新たに発表された方、および指定討論者のお名前は、杉山高一・佐藤創・岡太彬訓・上笹恒・小川秀光・馬渡鎮夫・野元菊雄・川島武宜・井上通敏・山本幹夫・小室直樹・西村博・伊藤高司・伊藤志摩子・塩見弘・西川泰夫・松木悠紀夫・根岸龍雄・飽戸弘・西平重樹・富永健一・加藤淳一・宮原秀夫・山本俊一・印東太郎・安田三郎・齋藤陽一・西村熙彦・鈴木達三・吉田光雄・大川信明となる。これら諸氏の多くは、著書等で周知であろう。このように、シンポジウムも第3回、第4回と進むにつれ、

行動計量学シンポジウムは心理学の分野だけでなく、法律学、経済学、社会学、言語学、工学、医学・健康科学（保健学）および統計学の領域に浸透した。1972年に第4回までの行動計量学シンポジウムで発表頂いた多数の方々に行動計量学会設立準備委員会に加わって頂き、1973年になって、行動計量シンポジウムにかわって、行動計量学会が設立されたことになる。

なお、行動計量学シンポジウム発足時には、筆者は東京大学教育心理学教室の博士課程に所属していたが、1970年5月より、同じ大学の医学部保健学科疫学教室の山本俊一教授のお招きにより、当教室の助手に就任させて頂いた。それがひとつの契機となって、設立された日本行動計量学会の事務局長に筆者が就任し、事務局も医学部保健学科疫学教室におかれることになった。この時、疫学教室に日本行動計量学会事務局の設置を許可いただいた山本俊一教授および初代理事長に快く就任して頂いた林知己夫氏の英断、さらに丸山久美子・岩坪秀一・松原望・梶田叡一の4氏が事務局員となり、私を含めた5名が機会あるごとに集まって林知己夫氏を補佐したことが、今日の日本行動計量学会の発展の礎となったと思う。なおこれら事務局メンバーが雑誌「数理科学」に以下のような原稿を著していることを明記しておく。

文献：柳井晴夫・丸山久美子・岩坪秀一・松原望・梶田叡一（1974）行動計量学の動向、数理科学、第12巻2号（No.128）、サイエンス社

謝辞：本稿の執筆にあたり、後藤昌司氏よりお送りいただいた第2回行動計量シンポジウムプログラム、および、お知らせ文を利用させて頂いた。記して深謝の意を表したい

[理事、第4代理事長、1987年度（第2回）功績賞受賞]

行動計量学の名称に対する私の想い

池田 央
教育測定研究所・立教大学名誉教授

行動計量学会が設立されて、はや35年が過ぎた。設立当初から学会のメンバーとして、行動計量学の進歩と歩みをともしてきた一人として、ひとしお感慨深いものがある。ここでは設立当初の時代背景も踏まえながら、私が行動計量学になぜ参加し、あきもせずここまで続けてこられたのか、その原点を思い出しながら、わずかなスペースを利用してこれをしたためている。

私が大学生、大学院生だった1950年代は、人文・社会科学において、計量的、数理的方法はまだわずかであり、その大半はそれとは無縁な世界であったといえよう（いまでもそう思っている学生は多いかも知れないが）。経済学ですら全共闘の嵐が過ぎ去る頃までは、そのような意識がまだ多くの学生の間にはあったように思われる。それでも私の所属する心理学は、少数ではあるが優れた先達によって、統計学を中心とする数理的アプローチの重要性が認識されつつあった。

しかし、外国から入ってくる専門雑誌や図書からは、(私に言わせれば) はじめて科学的方法論を取り入れた新しい学問の世界が、新鮮な響きとともに飛び込んできていた。最近では珍しくなくなったせいか、あまり耳にしないが、行動科学 (behavioral sciences) という呼び名もそのひとつである (単数形で呼ぶのと複数形で呼ぶのと枠組みが少し違うのだが)。伝統的な人文・社会・自然科学という分類名称とは別に、行動科学は異なった切り口からの視点を与えてくれた。

そのひとつの特徴は学際的 (interdisciplinary) アプローチである。そこでは研究対象として、生物も含めた人間個人の、あるいは集団としての動き方、行動の研究に直接的間接的にでも焦点が当てられていれば、心理学、社会学、文化人類学をはじめ、言語学、教育学、経営学、法学、政治学等々、その専攻領域を問わないでだれでも入れる寛容さがある。

では、そこでの研究方法はどうか。そこには、なにか共通のアプローチはあり得るのか？それは思弁的でなく、経験的データを集め、そこから情報を取り入れ、解析すること、つまり基本は測定 (measurement) から始まるということである。当時のわれわれの憧れの的は、一歩いや何歩も先を進んでいた専門誌、生物では *Biometrika* (1901創刊)、経済では *Econometrica* (1933創刊)、心理では *Psychometrika* (1936創刊) などがひとつのモデルであった。それに匹敵するものは出来ないものか。誰が言い出したかはよく覚えていないが、こうして行動と計量をあわせた「行動計量学」会が生まれ (1973)、欧文誌として「*Behaviormetrika*」も誕生した (1974創刊)。「行動計量学」は明らかにわれわれの造語であって、ほかに (たぶん) 見られないだろう。その特徴は形が変わることはあっても、上記の精神はいつまでも続くものと思っているし、そうありたいと願っている。

[名誉会員、第6回・第26回大会実行委員長、1992年度 (第7回) 功績賞受賞]

行動計量学という名前

繁 榎 算 男

東京大学大学院総合文化研究科

われわれ学会の会員には行動計量学という名前はおなじみのものであるが、実は、造語である。行動計量学会ができるまでは、このようなタイトルの学問や大学の講座はなかったはずである。行動計量学会は、ご存知のように林知己夫先生の下に結集した力が学会誕生の元を築いたが、そのモーメンタムとなったのは、柳井晴夫先生の情熱であったように思う。当時、柳井先生が中心的に運営されていた研究会でも学会の構想を情熱をこめて語られていた。そのようなときに、学会の名称の話があって、わたしが「行動計量学」というのはどうですかね、と言ったことを覚えている。実際に、この学会の名前を決めた経緯はわからないが、私には、行動計量学という名前に個人的な思い入れがある。

いずれにしても、行動計量学という看板は、なかなかよくできている。行動というからには、まずは、人間の行動を思い浮かべる。行動計量学は、人間、人間の集団、組織、あるいは、さらに、類人猿などの動物などの行動を知的探求の対象とする。行動計量学の対象は無限に広く、また、その対象に迫る学問の切り口は、既成の学問の区分けに影響されない。行動計量学には学際的、融合的な響きがある。

行動計量学は、文字通り、行動を計量するだけが仕事ではない。計量した数値を記述し、整理することによって、知見を引き出す。この知見は、本来そのデータだけに適用できるものであるが、普通は、一般化したい。この一般化において、直感的な推論を避けるためには、数理モデル（あるいは、統計分布に従う項を加えた統計モデル）を作り、モデルをかすがいとして、いまだ観測されないデータ全般に一般化する。心理学という（既成の）領域で言えば、行動という観測可能な事象を数値に変換する理論と技法を研究する計量心理学、数値的データのモデル化について、研究する数理心理学、数値データから、母集団全体やいまだ観測されていない将来のことを推論する心理統計学に対応がつく。どのような領域であれ、この3つの過程が含まれていて、共通の要素がある。共通性を認識することが大事であると思う。

行動計量学では、説明したい行動パターンを、潜在的な構成概念を用いて説明することが多い。ところが、この構成概念の測定値も顕現的な行動からモデルを使って推測されたものである。ここに人間を対象とするサイエンスの難しさがあり、トートロジー的な研究が多発する理由がある。これを避けるにはふたつのアプローチがある。ひとつは、理論の精緻化によって、モデルの比較がクリティカルな意味を持つようにした上で、モデルの相対的な評価をおこなうことである。もうひとつは、行動計量学の手法が、当面する問題解決に実際に役に立つ事例を積み重ねることである。人間行動に関する理論の発展の現状を鑑みると、行動計量学においては、特に、後者の立場、すなわち、現代社会の問題を解決することで存在理由をアピールすることが重要なのではないかと思われる。

[理事、第28回大会実行委員長、元事務局長、1994年度（第9回）功績賞受賞]

日本行動計量学会と柳井さんのこと

柏木 繁 男

城西国際大学アセスメントセンター・千葉大学名誉教授

理事や委員の役割を一度も経験したことの無い私に寄稿の依頼があり、少々当惑しているのですが、ただ、学会設立前夜の柳井さんから相談を受け、若干のお手伝いをしたことは憶えています。計量心理学を取り巻く40年前のわが国の状況をうまく説明するのはそう容易なことではないのですが、人間の行動や心理を数理統計や計量測定することを肯定する気風ではなかったのです。今でも、ご存命の心理学の大先達の中には、統計学や測定手法の導入が心理学をダメにした、と明言される方があるそうです。私にとっては大変な驚きですが、先日、ある後輩が、初心学生向心理統計の本を出版し、その大先達に進呈した時のご返事に、その趣旨の批判があったそうです。

私個人でも、そのような経験事例は数多くあります。今では、政治、経済、社会生活に対するアンケート調査はごく日常的なことですが、アンケートで世論が分かっていたまらか、と言うのが常識だったと言ってよいでしょう。しかし、こんな私のJR時代の1反例があります。新幹線設立以前の旧東海道に電車特急“こだま”が走っていた頃です。当時特急の東京駅始発は朝9時が常識でした。東海道特急列車の利用者は金持ちが殆どで、朝9時以前の早い時刻の電車には絶対に乗らない、というのがその常識だったのです。そこで、こっそり私個人の責任で、特急列車の乗客に、朝7時で乗るかどうかをアンケートしてみたところ、30%前後の乗客が乗ると答えたのです。そのデータを、当時の旅客局長さんに朝の出勤時に直接手渡したところ、その日の理事会でOKがとれ、朝7時東京発の特急電車こだまが走りだしたのです。若い私の意見を率直に受け入れてくださった当時の旅客局長さんとJRの寛容さには、今でも頭が下がる思いです。

JRの研究所での最初の仕事がマークシート内田クレペリン(UK)テストの客観的評価法の開発です。実用的評価法として当時のJRのデータを使って私が考案したのがPF判定法で、信頼性や基準関連の妥当性が客観的にチェックされ、さらに、最近、作業曲線と性格特性BigFiveとの関連が確認されています。当然、これらの処理はコンピュータなしにはできません。

ところで、新幹線の建設直前、日本に初めて科学計算用コンピュータが導入されました。Bendixというマシンでしたが大学の有名教授連もその見学に多数見えたそうです。私もテスト処理の将来にコンピュータ利用の将来性を確信し、アセンブラーの講習会に出席させてもらいました。それ以来アメリカのPsychometricsやテスト研究に関心を払うようになりました。JRでの第二の仕事は、因子分析法、とくに因子回転法の利用と開発です。因子回転法と言えば、今でもHenry Kaiser氏によるVarimax法がよく使われますが、項目数が増えると、因子回転の効果が上がりません。彼は私の批判を率直に認め、ボスドクとして受け入れてくれました。このような研究制度やシステムがわが国にもあれば、と考えていたとき、柳井さんからの学会設立の希望を伺ったのです。準備的会合開催を一度お手伝いしましたが、後は、専ら柳井さんの努力そのものでした。

これまでに果たしてこられた柳井さんの努力と学会の今後益々の発展を心よりお祈りします。

[第16回大会実行委員長]

師友に恵まれて35年

後藤昌司

特定非営利活動法人 医学統計研究会

日本行動計量学会が満35歳を迎えた。最初に、設立から今日まで諸種の形で関わってきた方々にお祝いを申しあげたい。歌の文句ではないが、「思えば遠くへきた」ことを、いささか感傷的な気分で実感する。本学会には、その前身として「行動計量学シンポジウム」(1970年8月24~26日のプログラムが手許にある)があった。学会の設立に際して、その名称を何にするかの議論があったことを覚えている。当時には、「行動計量」の形容は、統計的データ解析を生業として企業で働いている者にとっては何となく馴染めなかったが、時間を経るごとにその役割と位置を確立したようである。

本学会には、微々たることしか尽力できなかったが、大会への仲間との発表、論文・作品の寄稿などを始め、理事、編集委員など、いろんな形式で参画させていただいた。大会には、仲間の方々と、ほぼ継続して、参加し、発表させていただいた。因に、第1回大会以降、発表・参加していないのは、第23回大会(1995年:私事であるが、企業から大学へ職を変えた、阪神・淡路大震災の年)と海外出張で不在であった第28回大会(2000年)だけである。

この間、多くの師友に恵まれた。いずれも彼岸に先立たれたが、北川敏男先生、林知己夫先生、奥野忠一先生、丘本正先生、脇本和昌先生、駒澤勉先生から多大のご教導を頂戴した。1970年代、および1980年代には、コンピュータ・ソフトウェアは自前で開発していた時代であり、そのうえで、統計科学の理論の学習・研究と実践に精力的に働いた。そこでは、統計的データ解析の過程の諸種の段階で、「技」と「智慧」の獲得が必要であった。現在でも、ご健在でご指導をいただいているのが、小川暢也、赤池弘次、浅野長一郎、佐久間昭、納谷嘉信、永井武昭の諸先生である。

研究主題は、時代の要請とともに、実践に根ざすか、あるいは、必要に駆られた形式で多彩に広がった。当初には、因子分析の検証研究であったが、多変量解析法の全般、比例ハザード・モデルの推測と応用、統計的グラフィクス、回帰係数の縮小推定量、ベキ変換と拡張の諸型、ベキ正規分布の提案と拡張、樹木構造接近法とその応用などになった。

時代の節目でいつも注意していることは、恩師[北川敏男先生]から頂戴した教えである。

「鹿を追う獵師 森を見ず」の戒め:自分の歩んできた道を第三者的に回顧してみることに。

歴史を記してみることに。この教えは、まさに本学会35周年のような機会に参考になる。これから、5年、10年のスパンでいかなる問題領域で自分の進路があるかを探索的に考えてみることに:これも若い仲間と研究にとり組むときの主題の選択に欠かせない教えである。

「新安全学」の提唱について用意し、その構想をたてることに:最近のすべての事象や物の安全が問われるときに、約20年も前にその問題を意識され、筆者に課された洞察のすごさを改めて思い知る。

このように偉人ともいえる師友に恵まれて、最近の虚構ともいえる「仮想現実」の世界で意図することは、「すべての学問は実践を経ることで生命をもつ」ことに倣い、これまで頂戴した教えを自己の哲学に還元し、後続の人たちにつなぐことである。

[元理事、1989年(第4回)功績賞受賞]

日本の学際研究も既に戦後30年の歴史を経過したが、それでも未だ必ずしも常に成功しているとはいえないようだ。どうも日本の学界では、学際コミュニケーションがうまくいかず、それが学際研究の成功をさまたげている。では何故、日本では学際コミュニケーションがうまくいかないのか。

その原因の第一は、何といっても研究者の側の、学際的知識の貧困さに帰せられねばならない。共通の知識と相互理解なしにはコミュニケーションは成立し得ない。日本の大学の、独立性と自己充足性（といえば聞こえはいいが、要するにセクシュナリズム）の強い学部・学科の中で、われわれが研究者としてのパーソナリティ形成期を過ごさねばならないことは、この意味で大変不幸である。

しかし、第二に私がここで強調したいことは、「学際的偏見」とでも名付けうるものの存在である学問分野相互の間で、その学問的蓄積の多少や、基礎科学か応用（又は周辺）科学かの差が存在することは、否定すべくもない。それは丁度、西欧人の皮膚が白く東洋人の皮膚が黄色いのが事実であるのと、同様である。しかし、より基礎的な、蓄積のより豊かな分野を研究している人が、有能かつエライのだ、という考えがあるとすれば、それは人種間偏見と同じような、「学際偏見」といわざるを得ない。

そして白人の中の貧困階層に有色人種への偏見が強いと同様に、学際的偏見もまた、余り有能でない研究者にしばしば見られるのは、当然である。

人間誰しも多かれ少なかれ人種偏見をもっているのと同様、研究者が学際的偏見にとらわれるのも「自然な」現象ではあるけれども、矢張り度が過ぎればハタ迷惑で、学際研究の発展を阻害する。ある著名な社会学者が「自然科学の人達は文科系の人を馬鹿にするから、一緒の会合には出たくない」と洩らされたのをきいて、私は今更のように考えさせられたことがある。

幸いなことに、人種間偏見における人種とは違い、学際偏見の基礎になっている所属学問分野は、生まれながらに決定されているわけではない。大学において一応、終生の所属分野が決められるわけだけでも、その後の勉強で更に自分の所属分野をふやすことが可能である。自分の所属集団に対しては偏見は発生しないから、所属分野をふやすことによって学際偏見を減らすことが出来るし、また他人から受ける学際偏見に耐えることが出来る。

われわれの日本行動計量学会は学際的知識の修得と学際偏見の昇華の場として、大変有効に機能していると思う。欲をいえば、研究発表やパネル・ディスカッションだけでなく、特別講義や研修に類するものもあってよいのではないかと、思ってみたりする。

[会報8号(1976)巻頭言、当時：理事・東京大学文学部、1990年逝去]

(追記) 安田三郎先生は、1972年8月に発足した行動計量学会発足準備委員会の主要メンバーとして、日本行動計量学会趣意書、および、会則の作成にあたり中心的役割を担われた。(柳井晴夫 記)

サイバネティクスから行動計量学へ

井上通敏
大阪大学名誉教授

50年も前の医学生時代にフィードバックという言葉を目にしたので興味本位に遊んでいたらウィナーのサイバネティクスに出会った。今度はサイバネティクスから下ってきたら制御理論、システム理論、情報科学といった大河にやってきた。当時の医学は酵素学が全盛でほとんどの医学研究者はごまんとある酵素についてのアイソザイム、アロステリック効果、インダクションといったことの発見を競い合っていた。これがやがてワトソン&クリックのDNAを起源とする分子生物学という大河に発展するのだが、ぼくは酵素学の研究者が金魚のウンコのように思えて、ウィナーのほうの河を選んでしまった。もちろん、当時はそれが第三の波と称せられるような人類文明の大河に発展するという認識もなかったし、まして医学領域でどれほど膨らんでゆくのかを考えることすらしなかった。

そんなころ、小児科病棟で小児糖尿病の子供が昏睡死したことを耳にした。ベスト(カナダ)がインスリンを発見したのは1921年であるが、その発見のドラマを記した「インスリン物語」(岩波新書)には、それまで助けることができなかった糖尿病性昏睡の子供を劇的に救えたことが非常に印象的に書かれていて、私の医学生時代、日本の一流病院でなぜ死亡するのかと義憤を感じた。さっそく血糖調節機構のモデル作りに着手し、インスリン注入量と血糖値との関係のシミュレーションを行なって昏睡症例に投与するインスリン量の最適化を行なう研究を始めた。この研究を1969年7月20日にシカゴで開かれた国際ME学会で発表したのだが、ちょうどその時刻にアポロ11号のニール・アームストロングが月面に着陸する模様をテレビが実況していた。インスリンとロケットの燃料の違いはあるが、どちらも軟着陸が目的の制御。コンピュータ技術も制御技術も彼我の差は大きかったが、今後の医学医療にサイバネティクスの流れが生まれそうだと感じた一瞬であった。おりしも、1973年に政治学、経済学、心理学、生理学、機械工学、数理工学、医学、疫学といった異なる領域に所属する研究者が、計量的アプローチ、学際的アプローチを基盤にした研究を推進する「行動計量学」が生まれ、林知己夫先生によって日本行動計量学会が設立され、自ら率先して会員となった。私自身はサイバネティクスの延長上に行動計量学を捉えていたつもりだったし、林知己夫先生も同じお考えではなかったかと勝手に決め込んでいる。

1970年代から80年代にかけては、「医学生のための行動計量学セミナー」、「薬と行動計量」「人は形をどのように見ているか - 人のパターン認識」といったシンポジウムを関西地区で開催したこともなつかしい思い出である。

その後、時を経て病院長や独法化された病院機構の理事長を務めさせていただいたが、若いころに学んだサイバネティクスの教えが人生を通して私の判断や行動の軸や拠り所になっているように思う。

[元編集委員、元運営委員]

今年の9月学会が成立してから3ヶ月が過ぎた。この間、学会活動の基礎作りが活発に行われてきた。会員の募集、賛助会員御承諾の御願い、活動の大綱の決定など事務局はよく動いた。運営委員会に小委員会を作って活動を始め、事業計画をたてている。編集委員会は和文誌・欧文誌の部会に分れて検討を重ね、発刊の手筈が整ってきた。学会の収入も大よその見通しがつき、予算計画が出来上り、12月8日の理事会で学会活動の具体的な項目が決定されて、いよいよ実際の活動に入るようになった。各委員会や理事会の決定事項などが次から次へと流れてきて、事務局は寧日ない有様である。

学会が成立してこの様に動きが激しくなる前には、こうなるべき準備期間があった。行動計量学シンポジウムが何回か開かれ、多くの方々が集るうちに学会作りの気運が熟してきたと思われる。正に柿の実の熟して落ちる様にして出来た感じである。ひとたび地に落ちればぱっと拡がる。この様に諸々の活動が生じている。またますます多岐にわたって活発になることが期待される。

学会が何のためにあるか、生ずべくして生じた以上明らかなことであろう。学会活動が有意義になるかどうかは会員の皆様の活動にかかっていると思う。また、学会各委員会のマネージメントの仕方にかかっている。

さて、学際的な会合という場合、既存分野で言う各領域の方々が集って意見を交換し、相互理解を深めるというだけでは不十分である。これは第一步には違いないが、ここに止ってはいけないと思う。共同研究にまで進まねばならない。各分野の人々が、本務として、ひとつの共通課題の解決という目的の下に集り、研究を協力して進めるということが必要である。このとき既得の遺産としての蓄積はポテンシャルとして、虚心にこの問題解決に取り組まねばならない。そうして文字通り膝付き合わせて考えてゆく、この共同研究の場として、新しい方法論が生まれてきて、しかも課題解決に対して有用なものとなろう。このような方法論が出来て始めて、これまで解明できなかったことが解明されてくる。こうしたことは既存の各分野にも有用なものとしてフィードバックされてくることにもなろうと思う。協力なくしては生まれてこなかった方法論、これが行動計量学と呼ばれるべきものであろう。既存の方法論の単なる寄せ集めを脱却してゆかなければ進展はない。

以上の様な狙いの実現を目指して一同相励むことが大事であり、これを促進するために学会は活用されるべきものと思う。

[会報1号(1973)巻頭言、初代理事長・統計数理研究所、2002年逝去]

第3部

創成期における 学会活動

日本行動計量学会会報は、この号で第3号となる。第2号によると、会員数500人にもう一步とあるが、今は600人にあと一步というところだという。会員数の順調な伸びは事務局各氏の努力にも負うところが大きい、何といてもこの学際的分野が世の関心を集めているからだろう。

したがって、各種の研究会が学会のアレンジでいくつも、そしてまた各地で開かれ、その出席者も少なくないという。わたしはもちろんそう多くの学会を知っているわけではないが、しかし、学会主催でのこうした研究会の盛況は珍しいのではないかと思う。もってこの学会の発足が干天の慈雨だったことを知るべきだ。

これらの研究会は、学会運営委員会の「若い」諸兄の企画、実行にかかる。運営委員には年齢制限があって40歳後半になると資格がないのだそうだ。老眼鏡のやっかいにまだなっていないわたしなど木戸をつかれて大いに不満な気がしないでもないが、ここに若い学会の、したがって若い学問の気力を認めて満足すべきなのだろう。

運営委員からはじき出されて、わたしは編集委員になった。国語の方を専門としていて、しかも老人？というわけか、和文誌の編集幹事の責任者ということにされてしまった。大変な名誉ではあるけれども、いささか実力がこれに伴わずといった感があるのは大方も認めるところで、当人もまたじゅうぶん承知している。

わたし自身はそう新しい理論なり方法論を生み出せるはずもないし、ただ、言語の實際例に通用することに興味を持って、いくつか江川清君（運営委員）といっしょにやっているに過ぎない。けれども、まあ何とか学会に一臂の力を貸すことができるとすれば、このくらいだろうと思って引き受けたのだ。

といっても編集者というものは一人でいくら力んでもどうにもなるものではない。いい原稿がどんどん集まってこなければ何ともならない。この点で会員の皆様のご助力を大いに望むのみだ。ひとつわたしを原稿の海に溺れさせ大いに苦しめてもらいたい。

今のところ半年刊だけれども、これは会員数と販売できる数とが飛躍的に増大すれば、年4冊も発行可能となる。忙しくなることは大いに歓迎だ。

われわれとしては、なるべくいろいろな分野の人に執筆してもらいたいと思っている。あまり偏りがないようにしたい。同時に創刊号の経験から、国語の表記にもう少し関心を持ち、ご自分の原稿の整理をされることを寄稿家諸氏に望みたいと思う。

[会報3号(1974)巻頭言、当時：理事・和文誌編集幹事代表・国立国語研究所、2004年度(第19回)功績賞受賞、2006年逝去]

欧文誌第1号刊行に当って

印 東 太 郎

和文誌「行動計量学」とならんで欧文誌「Behaviormetrika」を、年1号ずつ刊行することは本学会設立の事点から決まっていたようであるが、はからずも私がその仕事に当ることになった。編集委員は総計45名おられたので、その中から理事長指名により、野崎昭弘、宮原英夫、佐伯胖、松原望、岩坪秀一、丸山久美子の諸氏に実務をお願いすることにして第1号の編集を開始したのが昨年の秋であった。何しろすべてが from scratch (ゼロから) という状態であるから、まず出版社を探し、執筆要綱を決め、投稿を勧誘することから出発した。幸い日本出版貿易株式会社の協力を得ることができ、各分野から原稿も集り、第1号が刊行される運びになった。実は現時点では未だ現物は形になっていないが、この記事をお読みいただける頃には会員諸氏の御手許に届くはずである。従ってここに目次を紹介することは redundant というものであろう。

当分の間70~80ページのものが年1冊であるから、volume という言葉を用いず、すべて No. で統一することになっているので、これは「Behaviormetrika, No.1, 1974」である。表紙のデザインは林理事長の御紹介により、特にデザイナー佐藤敬之輔氏の手をわずらわせた。学会の専門誌としては、これは異例のゼイタクといわなければならない。

この第1号は、今後の本誌の性格を決定する枠組みとして作用するものと思われたので、編集には次の点に留意した。それは、その内容においても、そのスタイルに関しても本号を本誌の今後のあるべき姿の偏りなきサンプルとしたいということであった。もとより標本数が6では完全な代表になり得ないであろうが、分野としては統計学、心理学、社会学、スタイルとしても「数式だらけ」のものからひとつも数式を含んでいないものに及んでいることは事実である。御投稿頂いた方々に対しては勿論、御助力頂いたすべての方々に御礼申し上げたいと思う。特に編集の実務に当たられた上記6氏の方々の御苦勞は一方ならぬものであったことはここに明記しておかなければならない。

本誌は、毎年、9月をメドに刊行してゆく予定になっている。私共の理想は海外に相当数の定期購読者を獲得して外資をかせぎ、もって本学会の財政に寄与（より正確には学会の財政負担を軽減）したいということであるが、そのためには、内容が高水準でなければならないと同時に、刊行のスケジュールを狂わせないということも必要条件である。第2号に対する原稿×切りは本年末としているが、できるだけ多くの方から御投稿頂けることを期待している次第である。また、海外にキャンペーンを行いたいので、各専攻の分野で、定期購読者になりそうな個人及び機関の情報をお知らせ頂ければ、それだけ上記の理想の達成される日が早まるであろう。

[会報4号(1974)巻頭言、当時：理事・欧文誌編集幹事代表・慶應義塾大学文学部
2000年度(第15回)功績賞受賞、2007年逝去]

第2代欧文誌編集委員長を担当して

松原 望

聖学院大学・東京大学名誉教授

日本行動計量学会欧文誌編集委員会は1973年7月頃に統計数理研究所2階の会議室においてその第1回設立会合を開いた。委員長は故印東太郎慶応大学教授（計量心理）、委員は佐伯眸（認知心理）、宮原英夫（医学）、丸山久美子（多変量解析）の諸氏および私（統計的決定）である。久保武士（医学）、上笹恒（計量心理）の両氏にも間もなく（あるいは当初より）ご参加いただき、いずれ劣らぬ各分野の指導的な名士から成る強力布陣でスタートした。数学者野崎昭弘氏のご協力もあったことの記憶もある。

論文誌は学会事業の命である。委員会の運営は、異なる分野からの互いに初めての集まりにもかかわらず、印東委員長の豊かな学識経験と温和な人柄から、当初より順調に進行し、最初の数回で難なく審査規定と投稿規定を定めた。現在の投稿規定（Information for authors）はほぼ当初の規定そのまま、細かい点まで配慮がいきとどきワープロ、ワード時代に通用するよくできたものである。雑誌創設の委員会であったから、雑誌名、装丁・内容フォーマット、ロゴの設定、印刷業者の選定などの重要課題があったが、これら諸課題も印東委員長のリーダーシップでとんとん拍子で進んだ。雑誌名はBehaviormetrikaと決定した。言語学者の野元菊雄先生から、behavioとmetrikaの間につなぎとしてrを介在させるのが言語学的に見て正当であるとのご助言をいただいたので、林理事長のもとで衆議一決した。雑誌名が決まったのであとはロゴのデザインであるが、これは林理事長の紹介で美術家の佐藤敬之輔氏の特別のご厚意によるものである。ロゴマークを持つ学会誌はそうあるものではなく、貴重な財産である。印刷業者（日本出版貿易）も委員長の紹介であり、海外頒布も行なっている業者を選定したのも、学会が海外に知られることを目指したからである。表紙装丁・内容フォーマットも当時設定したものが現在も用いられている。創刊号は招待論文を掲載し、小室直樹氏のパーソンの構造機能分析解説（英文）という異色のものであるが、これは林理事長のご紹介と思われる。印東氏のチョコレート選好の精密な計量心理学、佐伯氏のコンピュータ作曲の論文なども印象に残る。

印東氏の海外赴任のあと筆者が第2代委員長を数年間務めることとなった。委員会開催も筆者の勤務地（筑波）の関係から松戸など常磐線沿線の遠隔地が多かったにもかかわらず、丸山、宮原、久保、佐伯、上笹諸氏のご協力が一方ならぬものであったことはありがたかった。投稿も増え分野の厚みも加わり、雑誌は安定期に入った。異色の猪口邦子氏の投稿と論文掲載もこのころである。審査があまりに厳格であったため、林理事長から執筆者（特に若手研究者）の意欲を削ぐことになるからから、出来るだけ緩やかに審査することが肝要であるとクレームがついたこともある。その後、文部省の学術定期刊行物補助の申請を行い、首尾よく認可を受けたが、これには肥田野直氏（教育心理）のご助言が貴重であったことを記しておこう。

[元欧文誌編集委員長、1995年度（第10回）功績賞受賞]

行動計量学会でお世話になった人々

宮原英夫

豊橋創造大学リハビリテーション学部

私が行動計量学会と関係を持ったのは、学生時代から多変量解析に関心を持って高橋暁正先生、増山元三郎先生のところ相談に見えていた柳井晴夫先生に誘ってもらったことが縁だと考えている。行動計量学会は前身となる何回かの研究集会を経て誕生した。その何回目かの研究集会が統計数理研究所で開かれたときのことは今でも印象に残っている。柳井先生から根岸龍雄先生の講演の指定討論者を依頼されていたが、遅刻してしまった。講演が終わり、あらかじめ抄録を読んで用意した原稿に沿って質問を行ったところ、今日の講演ではこの話はしていない。大体、宮原君は遅刻してくるとは何事かと演壇からお叱りを受けてしまった。学会の設立当初は、日本医科大学の木村栄一先生、統計数理研究所の林知己夫先生、駒澤勉先生、東大物療内科の増山元三郎先生、高橋暁正先生、東大第一内科の長坂昌人先生、精神科の斉藤陽一先生らが計量診断、循環器疾患の多変量解析などを精力的に進めておられ、これが全国の医学関係者の関心を引いたこともあり、医学関係者の参加が多かった。医学データの統計解析の話題が、医学専門誌はもちろんのこと、一般の医学雑誌の紙面にも溢れていた。

その頃の私は高橋先生のグループに加わり、因子分析（重心法）を使った自律神経機能の分析に興味を持っていたが、分からないことだらけで困っていた。そうこうしている内にアメリカで一度だけお会いしたことがある印東太郎先生が因子分析の研究もされているということを知り文献を送っていただいた。この縁であろうか、学会が発足すると編集委員会の一員になり、それまでまったく別世界の存在であった心理学や文学領域の多くの方々と知り合いになることが出来た。特に松原望先生、岩坪秀一先生、柳井晴夫先生には、医学部では得られない考え方を教えてもらうことが出来た。その後欧文誌の編集委員にも加わることになったが、ここでも当時若手研究者であった上笹恒先生、薬師寺泰蔵先生、佐伯胖先生、丸山久美子先生から最新のトピックや新しい研究方法について話を聞くことができた。欧文誌編集委員長時代には論文の投稿が少なく、毎年文部省から補助金を受けることが出来る規定のページ数を確保するのに苦労したが、年度末きりきりで日本出版貿易の中村俊秀さんが何とか形を付けてくれた。編集委員会はメンバーの住所の中間という発想から松戸の駅の居酒屋で開かれることもあったが、統計数理研究所でしばしば開かれた。研究所に行ったときには委員会の前後に所員の大隅昇先生、村上征勝先生、柳本武美先生にも色々相談に乗っていただいた。このような方々の助いで、疾患の自然分類、脳血管障害の症状の重症度の尺度、MMPIの日本版の翻訳差の影響、疾病の頻度の国際間比較、漢方治療の有効性の問題、入学試験の信頼度など、自分の興味を持った問題をまとめ、学会誌で発表することができた。最後になったが、この機会に学会や諸先生に感謝すると共に、学際的な研究の遂行に当たって貴重なヒントを与えてくれる本学会のますますの発展を期待したい。

[元欧文誌編集委員長、第5回（1990年度）功績賞受賞]

当学会の正式名称には「日本」が前につくのであるが、そのように書くとあまりにもフォーマルな感じになってしまい、日常感覚に合わないの得上記タイトルでは省略させていただいた。

手元にある「第1回行動計量学大会 発表論文抄録集」を見ると、“1973年9月3日(月)～9月6日(木)於統計数理研究所”という文字が表紙の右下にのっている。30数年が瞬間に過ぎ去ってしまった感が強く、今や大変懐かしい思いで実に多くのいろいろなことが連想・想起される年代となってしまった。

発足の頃から今日まで、研究発表は勿論のこと学会運営等の中心的存在として非常に長く当学会にコミットして息長く大活躍をされている方々も多いし、初期のころには大活躍されていたのかかわらず、その後登場することもなくなってしまった方々もいる。世代交代も進み学会組織の新陳代謝のプロセスを見ることが、これまた現象として興味関心がもたれる。

当学会は、学会設立に至る前の研究会の準備段階から、立ち上がりの段階、そして今やテイクオフして成熟期に到達していると思われるのであるが、このように安定したフェイズに至るには多くの人々の努力と、やはり一世代にわたる時間が必要だと感じられる。

しかし、学問の世界の変化は情報技術の長足な進歩・発展とともに情報・知識生産の量的、質的發展が促進されて、その伝播・拡散が急速で広範囲に及ぶ様相はかつて人類の経験したことがない歴史段階に至っているといえるであろう。科学の世界の変動には瞠目すべきものがあるといえる。

このようなプロセスの中で私が貢献できたことはほとんどないに等しいが、当時の林先生をはじめ‘統数研’の方々の仲間に入れていただき、あまり活動的ではない会員ではあったが、それでもやはりいろいろな側面で研究マインドが養成できたことは大変ありがたいことであったと感謝あるのみである。

自分自身を振り返ってみると、要するに、コンピュータの「ROM」にダブらせて文字どおり‘read only member’と揶揄される、いわば周辺人だったといえる。つかず離れずひたすら読み取りのメンバーであったと思う。ごくたまに何かを書き込むことはあったがROMに徹していたタイプであるといえよう。

しかしながら、それは私にとっては甚だ面白く、興味・関心を持って大会発表、英文誌、和文誌等の論文をとおして、優れた会員・研究者の方々から実に多くのことを読み取らせていただきこれもただ感謝あるのみである。

今期の学会理事長鮑戸先生の学会ホームページの就任の挨拶、当学会の趣意書、その頃の研究グループの構成状況などからみて、非常に学際的なものが感じられるし、今後もそのようにあって欲しいと思う。なぜならば、人間や社会の現象そのものがどうも分析的な研究のみでは現象解析が十分できないような、これもある歴史的フェイズに至っているからかもしれないのである。

言い古された学際的な研究を見直すきっかけが得られる多様な分野の融合する学会であるとういと思う。勿論、解析の方法論と応用分野の分担、協調も含めて。

[元欧文誌編集委員長]

水野欽司先生と日本行動計量学会事務局

岩 坪 秀 一

早稲田大学人間科学学術院・大学入試センター名誉教授

故水野欽司先生に初めてお目にかかったときは、行動計量学会が設立されたばかりで、30代前半だった柳井晴夫、丸山久美子、松原望、梶田叡一の諸先生、それに私が、それぞれお互い衝突しながらも若さにまかせて事務局を切り回していた頃であった。当時水野先生は名古屋大学に勤務されていたが、皆さんの熱気が名古屋にも伝わって来ますよ、と励ましていただいたのを鮮明に覚えている。

昭和50（1975）年10月に先生は統計数理研究所に移られ、第二研究部第一室長に就任、当時の所長林知己夫先生のまさに片腕としての活動を開始された。水野先生が庶務担当理事として事務局を担当されたのが昭和52（1977）年4月であり、在外研究員として米国に出発される直前の昭和57（1982）年3月までの5年間を本学会のために献身的に尽くされた。水野先生によって学会の運営体制が整えられたといっても過言ではない。欧文誌が刊行物補助金を受けようになったのも先生のご努力による。当時の本学会理事長でもあった林先生と緊密に連絡を取られ、学会の諸活動に不断に目を配っては適切な助言をされ、必要とあればどこまでも助力と協力を惜しまれなかった。いい加減な活動に対しては厳しく、私も具体的内容は忘れてしまったが、小グループ研究会活動で人に迷惑になるようなことを気づかずに進めてしまい、先生からこっぴどく叱られたことがある。日本人の国民性研究等本務でお忙しい中で900人近くの会員への発送準備を日曜にやられることもよくあった。無私の人、まさに先生にふさわしい言葉と思う。

先生が在外研究に出かけられることになって私が事務局を引き継ぎ、これを機会に学会事務センターに業務の一部を委託することになった。センターは約20年後に不幸にも破綻したが、委託したばかりの頃はセンター側に本学会担当の吉崎さんという若い真面目な方がいて随分と助けられたものである。センターとの頻繁にわたる委託の打ち合わせには、米国へ出発する直前のお忙しい時期にもかかわらず先生は常に私に同行されては緻密な内容確認をされ引継ぎが円滑に進むように細心の注意を払ってくださった。先生が出発されて事務局の仕事が始まってからも、航空便を出してはよく相談を持ちかけたものだった。そのたびに長い返事の手紙が届いた。事務局への誤解や理解されない私の悩みに対して、長い慰めの手紙が来たが、それを熟読して私も腹をくくったものである。新しい問題が起きたとき罪は自分が背負う覚悟で独断実行しなければならないこともあるのだ、またひょっとしたら汚いこともやらなければならない場合もあるかも知れない、事務局とは本当に悲しい存在だが、なに、これも人生修行なのだ、と。

先生が帰国されてからも判断に迷うときには即先生に相談した。私の事務局時代の重大失敗に刊行物補助金申請をすっかり失念したことがある。そのとき、刊行物補助金申請貢献者たる先生が、そんなに気にすることではないのだと心から慰めてくださったのである。この言葉が落ち込んでいた自分をどれほど救ったか、今でも忘れられない。

[理事、編集委員長、元事務局長、1993年度（第8回）功績賞受賞]

昨年度、行動計量学シリーズを学会から発刊することを目的として刊行委員会が作られ、3回に亘って会議がもたれました。現在第一段階として刊行物としてどんなものを取り上げてみるかの目安をつけ、出版社との交渉を始めたところです。

先ず行動計量学とは何か、という問題から委員の方々の意見の一致をみることを試みましたが、これはこの学問が多様性を内蔵しつつ発展生成中であるため甚だ困難であるということで、行動計量学のイメージを規格化することは当面は避けることに致しました。

そうして各人のもつイメージを中心に、これこそ行動計量学たるものと思うものを各人が書いて行くうちにイメージの定着化を図ろうということになりました。

次に内容についての議論では、大きくふたつに分け、方法と分野の両方面から問題にとりくんでいくのがよいだろうということになり方法に関しては計数と計量、分類と弁別、モデル構成、予測、決定、比較指標、パターン認識、シミュレーションなどがあげられました。また分野別としては、公害、世論、教育、健康、行動などがあげられました。

このような枠組を頭において各委員に自分が書くならこんなものをという形でのべていただいたものが次のようなものです。

決定と情報、人物評価、行動の変容、言語と音声、印象形成過程、計量言語学、計量政治学、心理的空間、地域分析、医療システム、計量診断、公害、災害と行動、健康など。

これらはまだ本の表題として生硬なものや、形を成していないものもありますが、出版社との交渉を通じて確定して行きたいと考えています。

始めに述べたように、行動計量学のイメージの規格化がなされていないので、あまりに発散してもどうかということで監修者を設けて大まかな交通整理をすることになりました。また適用例、データは必ず入れるように心がけ、説明は研究者のみを対象とせず丁寧に、かつ直感的なものにする。各巻毎にオーガナイザーを設けて著者が数人で書いてもよいことにするというのも意見の一致をみました。

以上がわれわれの委員会で議論してきたことのあらましです。これらの結果をふまえて出版社との交渉に当るのですが、理事長のあっせんで数社の出版社と交渉を始めているところです。

今年度新しい理事会の発足とともに、再び、刊行委員会をお世話することになりました。出版社との交渉や会計の問題も種々起ってくることでしょうが、会員各位の御支援によって何とか実らせて参りたいと思っています。

御意見などあれば、どしどし御申出下さるよう特にお願い申し上げます。

[会報7号(1975)巻頭言、当時：理事・統計数理研究所、2008年逝去]

「データ解析」随想

奥野 忠一

本会報33号の「ヴェルサイユの空は晴れていたか」という林理事長の巻頭言を拝読して、そのような文学的香気の高い文章はとても綴れないとしても、考え方に共通する部分があるのではないかと考え、一文を草する決心をしました。

最近、ある友人から「お前の本（多変量解析法）には、相関係数行列から求めた主成分分析（PCA）では、“回有値が1より大きいものだけを取れ”と書いてあるが、あれはどこかに原典があるのか、それともお前の発案か？」と聞かれました。

十何年も前に書いた本ですから、誰かの所説を見たのかよく覚えていませんが、しかしその頃からひとつの目安として推奨してきたのは事実です。ただその際、 λ_1 が0.97ならだめ、1.04なら採用、というように、 λ_1 を数学的に厳守せよとは言っておらず、単なる目安として示しているにすぎません。その根拠はふたつあります。PCAを計算するとき、 n 個の対象を2組にランダムに分け、その「各組」と「全体」とについて3通りの主成分を求めることを勧めています。そして、その3通りの結果に共通な部分だけを解釈するように勧めています。この条件を満足するのは、概して λ_1 に対応する主成分であるという経験則に従っているのです。もうひとつの根拠は、取出した主成分は総合特性値であるという解釈に基づきます。もとの特性値の分散はいずれも1ですから、総合特性値は1以上の情報を総合しうるものでなくてはならず、各主成分の分散は固有値 λ_i に等しいから、 λ_1 となるのです。 λ_1 が1より小さな主成分は、前述のような総合特性値を抽出した後の残渣と見るべきだと考えるのです。

重回帰分析における変数選択問題でも同様の考え方が重要です。数学的には、 X_1, X_2, \dots, X_p を用いる重回帰式を“真のモデル”（true model）その中から r 個の変数だけを選んで作った重回帰式は“仮りのモデル”（provisional model）と称して、そのふたつのモデルの違いをいろいろ論じますが、これは筆者にはほとんど無意味としか思われません。現実には“真のモデル”などは存在せず、目的変数 y を説明するのに、 (X_1, X_3, X_6) を用いても、 (X_2, X_4, X_5, X_6) を用いてもよい場合があるのです。説明変数 $\{X_i\}$ の間に相関があるから、これは当然のことであって、今年のイネの収量が高かったのは、7月が高温であったからと言ってもよいし、7月の日照時間が長かったからだと言ってもよいのです。どのモデルを採用するかは、その重回帰式をどのような目的に用いるかで定まるのです。

林理事長は、「データ解析においては、データによる現象解析のフィロソフィーが主導するものでなくてはならない」と言っておられます。筆者は、C.R.ラオの「統計学は今世紀の新しいテクノロジーである」という言葉から借用して、「統計学はデータを対象とするテクノロジーである」と言っています。テクノロジーであるからには、論理の飛躍も発想の転換も許されますし、異なるアプローチによって同じ目的を達成することもできます。そこが数学との違いです。

「行動計量学」に携わる方々が、数理統計学の枠組から解放された“自由な”データ解析を駆使されて、それぞれの分野で成果を上げられることを切に期待します。

[会報34号（1984）巻頭言、当時：理事・東京理科大学工学部、2002年逝去]

林 知己夫先生の師縁に感謝して

宮原守男
虎ノ門法律事務所

1. 林知己夫先生との出会い

日本行動計量学会は、林知己夫先生がおられたから誕生した。先生の推薦で設立時から監事となり、無償の法律顧問の役割を果すことになった。

林知己夫先生との出会いは、東京大学法哲学の碧海純一先生の紹介による。私が『裁判の予測とコンピュータ - 経験法学からみた裁判過程 -』の論文を書くためには、林知己夫先生の創案された数量化理論を使う必要があったからである。数学は全くの素人で、数量化理論が一体どういうものかも皆目わかっていなかった。先ず林先生から直接教わった方がよいと碧海先生から薦められたからである。

2. 日弁連の懸賞論文に応募

昭和40年に日弁連で懸賞論文の募集があり、審査委員の一人であった森長英三郎先生から、応募しないかと声がかかった。1等賞金額は5万円（当時強制保険の死亡保険金が100万円、現在3,000万円だから30倍として150万円相当になる）2等が3万円、それ以下は賞金なしであった。ちょっと魅力的な金額である。よし、1等賞を狙ってやろうと考えた。審査委員（委員長は早稲田大学の戒能通孝教授）は法律家ばかり。そうだとすれば、最新の法律学 - 経験法学を基本にして、コンピュータによる裁判の予測の論文を書いてみよう。当時のコンピュータはまだカタカナで現在の漢字のワープロはなかった。

法律は、法律 (Rule) を大前提、事実 (Fact) を小前提とする三段論法によって、法律 (R) を事実 (F) に適用して、裁判 (Decision) がなされる。 $R \times F = D$ のモデルである。しかし実際の裁判は、そのような単純なものではない。経験法学は、リアリズム法学ともいわれ、三段論法による裁判を批判し、法律 (R) と事実 (F) とが裁判官のパーソナリティ (Personality) の刺激 (Stimuli) となって裁判 (D) がなされるという、 S (刺激) \times P (裁判官のパーソナリティ) $= D$ のモデルを打ち出した。

経験法学の解説だけでは、1等賞を貰えない。コンピュータによる交通事故の慰謝料の予測をしようと考えたのである。これには林知己夫先生の数量化理論I類を使う必要がある。数量化理論で論文を書く以上、その原理を解説しなくてはならない。そのため、林先生から直接講義を受けることになった。

林先生は素人の私にわかり易く解説して下さった。社会現象は非ユークリッド空間の中にある多次元の座標軸をもつ。これを数量化するという事は、その座標軸を全体的に調和的に一次元に変換することである、ということをお教えくださった。

3. 林知己夫先生の師縁

裁判は、裁判官の勘による推論で、線形的、単線的な一本の糸を辿ってなされるものではない。行列的思考とか多変量解析の手法によらなければ裁判官の勘による推論は解析できない。林先生の御指導によって懸賞論文は完成し、予測どおり1等賞金を獲得したのである。これはひとえに林先生の師縁によるというべきで感謝してもしきれないのである。

[名誉会員、元監事]

初代理事長 林知己夫先生の思い出

肥田野 直

東京大学名誉教授・大学入試センター名誉教授

敗戦後間もない1948年に行われた「読み書き能力調査」の委員会で林知己夫先生に私は初めてお目にかかった。この調査は15歳から64歳までの全国民を対象とし、層別無作為抽出標本約17,000名に対して行われた。集合調査法であったにもかかわらず参加率は80%を超えた。その際には進駐軍のジープでサンプルのお年寄りを会場に運ぶというエピソードもあったと聞いている。教科書どおり行われたこのサンプリング調査は個人情報保護がやかましい今日では到底考えられない昔の話となってしまった。さて、この委員会で活躍された先生はその後世論調査や選挙予測に適用分野を広げられて時代の寵児となり、様々な分野で多くの人材を育てられた。

日本行動計量学会は先生によって育てられた手作りの学会と言ってもよいであろう。

この学会は先生に強く影響された人材が集まって出来た。したがってその出身分野は多岐にわたっていた。統計学、工学、医学など自然科学の領域にとどまらず、政治学、経済学、社会学、国語学、心理学などいわゆる人文・社会科学の領域に及んでいる。この学会は共通の方法論によって結びついた一種の学際的な組織として出発したと言えるであろう。

先生は常に「データをして語らしめよ」と教えられた。どのような領域であれ生のデータから結論を導き出すのに最も適切な処理手法を考えられ、既存の手法にこだわらない新しい計量化のモデルを次々に開発された。その独創性こそ先生の持ち味であり、偉大さの秘密であったと私は考えている。先生はまた、日本人の国民性研究のような長年月にわたる壮大な規模の研究も中心となって推進された。全15巻「林知己夫著作集」は先生の多彩な業績を物語る記念碑である。

先生は13年9ヶ月の長期に亘り本学会理事長を務められた。私は先生がまだまだ続けてくださると信じていたが、突然思いがけず第2代の理事長をお引受する羽目になり、力不足を曝け出す結果となってしまった。それにもかかわらず何とか任期を終えることが出来たのはひとえに事務局長として補佐して下さった江川清理事のご尽力のおかげであった。心よりの感謝を記して本稿を結ぶ次第である。

[名誉会員、第2代理事長、1998年度（第13回）功績賞受賞]

第4部

発展期における 学会活動

縦書きを横書きに ～ 会報 ～

杉山明子
元NHK・元東京女子大学

縦書きの会報を横書きにする検討がいつ始まったのか、その記憶は定かでない。情報化の進展に伴って、行動計量を謳う学会にとっては、横文字、数式、図表のためにも、縦書きからの脱却は避けられぬことであった。

当時、会報の編集は、月例シンポジウムの開催、講習会の開催に並んで運営委員会の仕事の柱であった。会報第48号（1989年9月）に、第50号から会報の様子がえをすとの予告が載り、会員からの意見・提案を募り、題字についてもアイデア募集が始まっていた。この横書きを機に、編集を引き受けることになった。

いざ、横書きの作業を始めて、見本を集め、題字が出来てきても、統計数理研究所会議室での運営委員会では議論百出、結論が出ない。広尾の駅近くのコーヒーショップに場所を移して、長い時間話し合っ、水野欽司運営委員長のOKがやっと出たのを覚えている。

編集作業は、流行りのDTP（デスクトップ・パブリッシング）で行なうべく、ワープロ専用機文豪MINI 7HRを自宅に購入した。

そうこうするうちに、1990年4月30日に横書きの会報第50号が完成した。堅いイメージの学会報にあって、林知己夫の書になる題字「行動計量学会報」はユニークで、筆の運びに躍動感があり何ともいえぬ味わいと、とても好評であった。巻頭言に「行動計量学の資産を作ろう」池田央（立教大学）、それに第50回記念月例シンポジウムの報告から「行動計量学の今後の展開」上笹恒（筑波大学）、「行動計量学会の誕生とその後の経過」柳井晴夫（大学入試センター）を掲載した。横書きになったので、外国語の表記が楽になり、またグラフが挿入できた。ワープロ専用機のおかげで、文字サイズ、文字装飾が多用され紙面が華やかになった。

前任者の杉戸清樹（国立国語研究所）は第30号（1983年5月）から第49号（1990年3月）までの7年間20号分を編集されたが、私は第50号（1990年4月）から第55号（1992年1月）までの2年間6号分のみで、後任の市川雅教（東京外国語大学）にバトンタッチした。

その後、会報の内容が他学会情報や求人情報などに拡がり頁数が増え、広告も掲載するようになった。第89号（2001年6月）には、サイズをB5からA4へ変え、1回り大きくなった。

編者が変わり、体裁が改訂されるたびに気になるのは、題字の筆者名の所在である。どこにも入っていないのに気づき慌てたこともあった。今になって、題字「行動計量学会報」の横に「林知己夫」とサインして頂ければよかったのと思うことしきりである。（文中、氏名の敬称略）

[理事、第5代理事長、第18回大会委員長]

「事務局」1985-1988の思い出

岡 太 彬 訓

多摩大学大学院経営情報学研究所

1971年に、学士会館で行われた第2回行動計量学シンポジウムで発表したのが、行動計量学会との最初の接点でした。多次元尺度構成法やクラスター分析法などについての研究は、発表する場に余り恵まれなかったのですが、行動計量学シンポジウムに参加することができてからは、ようやく共通の興味をもつ方々と交流することができるようになり、たいへん嬉しく思いました。大会で何回か発表し、学会にも馴染んだ頃に、「事務局」を担当してはどうか、というお話がありました。まだ40歳を少し超えたところで、自分に務まるだろうかという不安や、事務局の仕事で時間が足りなくなり能力もない自分の研究がおろそかになるのではないかという不安もありましたが、それまで10年以上お世話になった学会であり、「学会は運営を支える人間がいるから動くのである」とのなかなか反論しにくいお話もあり、お引き受けしました。

庶務事務局担当理事が正式名でしょうか、通称「事務局」は1985年から1988年まで担当しました。勤務していた立教大学の住所の事務局のゴム印や事務局の封筒ができあがり、理事長印（角印）を前任者の岩坪秀一先生からお預かりして、いよいよ事務局担当ということで、3年間無事に務まるだろうかととても不安になりました。岩坪先生から受け継いだ事務局運営マニュアル（大変助かりました）を基に、電話でも色々教えていただいたのを懐かしく思い出します。現在の事務局と比べると、仕事の内容はともかく仕事の環境が今とは全く違っており、BIT-NETが海外との連絡に細々と使われ始めた頃で、理事会の出欠は往復葉書の返信の住所に事務局宛のゴム印を押して使いました。ワープロもようやく普及し始めた頃で、筆記もかなり使われていた記憶があります。表計算ソフトもまだ余り一般的ではなく、年度末といっても、実際は夏休み前の決算と予算では、電卓を使って会計書類を書きました。「事務局は決まった手順に乗らない仕事をうまく片付けなくてはいけない」というのが、事務局指南役ともいべき水野欽司先生の口癖で、事務局をお引き受けして全くその通りだと思いました。色々失敗もし、当時の理事長林知己夫先生はじめ皆様にはさまざまご迷惑をお掛けしましたが、どうやら3年の任期を全うすることができました。学会賞（当初は功績賞と優秀賞の2種類）の創設に携わったのが印象に残っています。監事の宮原守男先生からは、「会計監査ではここを見るべきなのだ」ということを教えて頂きました。学会を通じて、また、事務局の仕事を通じて、年齢や地域は異なっても研究の興味が同じ多くの方と知り合うことができました。これが、学会に入会して一番良かったことだと思っております。今後もこのような機会を期待して拙文の結びとします。

[理事、元事務局長、1999年度（第14回）功績賞受賞]

行動計量学会には「創立と同時に入会した」と云いたいところだが実際にその存在を知ったのは少し後である。何の躊躇もなく入会したのは我ながら不思議と思うのだが、学際的な学会であることと人間の行動が研究の対象であり、それを「計量的」すなわちコンピュータとも関連を保ちながら研究を進めるという主旨に共感を覚えたからである。人間の勤をたよりに推論するだけでは複雑に入り込んだ学際的な研究には納得のゆかないものが多く、やはり数量化を通して種々のモデルを駆使しながら分析を行ない、試行錯誤を繰り返してはじめて目的を達するものと思われる。ところで話が代るが、現在進行している第二次産業革命と呼ばれるものはエレクトロニクスの生んだ花形役者、コンピュータが中心的な役割を果たしている。それに伴うコミュニケーション方式や制御システムの飛躍的發展によってあらゆる分野にインパクトを与え産業構造から社会機構に至るまで大変革が行なわれ、2000年代は勿論、10年後の1990年代でさえその予測は非常に困難になってきている。さらにエレクトロニクス関連技術および光ファイバー通信等の新しい技術が次々と開発されこれらのハードウェアの発展とソフトウェアの発展とは密接な関係にあり、ソフト技術者はまた次々と新しい技術を考案している。この産業革命およびそれに伴う社会的変動は好むと好まざるに拘らず全人類を呑込んでしまうものと考えられ、予測される社会的な大変化としてはコンピュータダイジェスト12月号の記事（新コンピュータ革命）によると、中間管理職の消失傾向、ブルーカラーとホワイトカラーの差の減少、労働者の転職回数の増加、パートタイムの増加、等があげられるとある。しかしこのような社会的影響よりもっと恐ろしいと思われることはプライバシー・セキュリティの問題に代表されるように人間そのものが精神的苦痛等により破壊される心配があること、コンピューターセキュリティの問題に代表されるカタストロフ的な大事故やその恐怖から来るノイローゼ等人間自身の存在が危殆に瀕するおそれさえあること、である。

一番大きく変化するものとしてはあらゆるコミュニケーションの発展があげられる。そして我々はその恩恵に浴すると同時に情報過多とそのインサイト過多に悩むことになるだろう。電話嫌いやテレビ嫌いな人間が出てくるのは当然でありこれがますます増加するようになると思われる。あまりにも発達が速く革命的であるので、社会組織や人間関係にひずみがおこり破綻をきたすおそれがある。勿論人間には順応性があり、このような変化が徐々にくれば、あるいは覚悟を決めておれば案外大丈夫なのかもしれないが、よほどの強靱な神経を必要とする。問題はいかにこれをコントロールして自分に必要な情報だけを取り入れるかであろう。そのシステムは各人または各企業によって異なり、そのニーズによってそのシステムを考えるべきである。これは非常に難しいことなのでプロのコンサルタントも必要になってくるだろう。

このような社会情勢において、行動計量学会の果たす役割はますます重大な段階に入ってきたものと思われ、学会に対する期待も甚だ大であるというべきではなからうか。

[会報23号 (1981) 巻頭言、当時：理事・北海道大学工学部、2006年逝去]

計量医学の要

駒 澤 勉

統計数理研究所に入所してからこの6月で21年になる。医学関係の分野の研究者との結びつきは入所後3年目の昭和37年であったと思う。現在の研究所の建物が出来る前で、大正時代の立派な木造の建物に間借りしていた頃である。脱線ついでにいうと、研究所の今の敷地は日本の国勢調査発祥の地である。昭和43年に総理府から文部省に移管されたが、当時、歴代の統計局長がなかなか移管の書類に印を押さなかったという。今思えば、担当局長としてはもっとものことであったろう。

話を本題に戻そう。近年の生物学・医学の発展には理工学分野の寄与が大きいことは周知の通りである。林知己夫先生が医学のデータ解析の研究に専念する糸口をつくって下さった昭和37年の秋に日本 ME 学会が発足した。ここに、理工学と医学とが結集し相互協力の学術・医療の本格的研究の発表の場が用意されるようになった。特に、情報処理の道具だでのコンピュータと統計数理の理論・方法論はこの分野での利用で急速な発展をみせてきた。ところで、現実問題として両分野の有機的な結合のためには、あまりにも強力な専門者意識の溝を埋める必要がある。現実には両分野の研究者の緊密な協力関係と不断的努力の結果、そのギャップが埋まっているが。

今では笑い話となるが、大動脈硬化の指標を作る目的の研究に協力した時のことである。大動脈の構築要素と脈波速度を重回帰した結果を病理学会でグループ発表した。その時、構築要素の大動脈の内膜・中膜の弾性繊維・膠原繊維・筋細胞の重みを数値で示した。その結果を聞いていたその道の大先生が、1とか9とか重みで硬化度を判定するとは何ごとぞ、と私達の研究を批判された。今から16、7年前のことである。今日ではその大先生の研究グループが多変量解析を取り入れている。

私が病理学会の発表にはじめて加わった時、医学研究者との接触も浅く、データの背後の現象を知ることなく統計解析を機械的に行っていた。一方、医学者の側では解析結果を鵜呑みにして消化不良のまま表現していたように思う。その後、研究生活を共にし（日本の医学研究者は昼間の診療・夜間の研究活動と実に精力的な人間だと思う）、時には酒を酌みかわしながら語らった。研究面の相互理解ができるまでに約3年の歳月がかかったと記憶している。

私の体験からいうと、ノウハウ的手法整備を含めて、データ解析の理論・方法論を開発する側は応用分野のデータに接し、データが手軽に得られるものではないことを知る必要がある。また、解析法を利用する側はデータさえ取ればあとは統計プログラムによってすばらしい結果が得られるなどと考えるはならない。データの背後のことをよく理論屋に知らしめて、どのようにデータ解析処理をすればよりよい結果が得られるか周到な分析計画が必要である。

この意味で、今後とも私は医学と理工学の接点に飛び込み、私の刀である多次元データ解析を使って計量診断・治療の研究を支えていくつもりである。また、未来の医学と理工学の創造の中核の一端を背う行動計量研究の活動を進めていきたいと日ごろ念じている。

[会報21号 (1980) 巻頭言、当時：理事・統計数理研究所、2005年逝去]

日本の農村社会学のリーダーの一人だった有賀喜左衛門氏が、村落構造を把握する数学はないかと言ってから、30余年になる。この質問の定義如何によって答は変わるだろうが、村落の計量社会学的な研究はいまだに数少ない。このなかで井森陸平氏が村落構造尺度を発表して、およそ25年が経つ。彼は、村落共同体の研究に関連のある旧習俗慣行を主とした項目を尺度分析で検討して、スケログラム2種類を示した。対象地は愛知県である。井森氏の尺度は多元分割表になっているので、潜在構造分析やログリニヤーモデルを適用するよい例題になる。

ところで、井森氏は三河と尾張について地域ごとの尺度を作り、愛知県全体の尺度を作らなかつた。これらの地域を知る人は、三河と尾張は分けて扱うのが適当であるという。地域による農村のちがいを無視出来ないからである。だが尺度作成のために井森氏が用いた標本集落は愛知県の無作為標本であるから、項目が同じ三河と尾張のスケログラムを合併したらどうなるであろうか。

結論としては、この合併スケログラムは愛知県農業集落を分類する尺度となり得たと筆者は考えている。その代り、たとえば、三河で旧習俗慣行が強い集落が、愛知県全体の尺度からすれば、旧習俗慣行の強い集落とみなされ、尾張で旧習俗慣行について強いとも弱いとも分類できなかった集落が、県全体の尺度ではいずれかに分類される。尺度を作る項目間の関連も、地域別データよりも県全体のデータの方が明確であり、三河・尾張の地域尺度とともに県尺度の方にも尺度としての意味があるように思える。

幾分これと似た話がある。農業集落カード（5年毎の農業センサスにおける農業集落調査結果を各集落ごとにカードとしてまとめたもの。全国で約14万の農業集落がある）からの標本について主成分分析を行い、その結果が実情を適切に反映しているかどうかを、筆者は知ろうとした事があった。このときは対馬を検証のための対象地とした。つまり、全国農業集落からの標本を規準として対馬農業集落それぞれの主成分得点を求め、これによって対馬の農業集落を位置づけたとき、この位置づけでおかしくないかどうかを、現地の見聞で確かめようとしたのだ。実情と合わないところもあると思っていたが、対象地の町で20集落のうち12集落の位置づけがおかしいということになった。その夜は、地元の人が遠路の調査を気の毒がって、位置づけの全部がおかしいと言わなかつたのではないかとすることも考えた。

大学に戻り、対馬農業集落だけの主成分分析を行い、その主成分得点をみると、地元の人々の対馬集落の評価と大体一致するし、このときの対馬集落の散布図は、全国農業集落からの標本を規準としたときの対馬集落の散布図と、原点はずれるものの、形は似ているようである。どうやら現地には対馬規準ともいべきものがあって、全国的な標本を規準とした場合とは、ちがった集落の位置づけが行われると解したらどうかと思うようになった。

同じ農業集落のデータでも、地域レベルで扱うか、もっと広いレベル、ときには全国レベルで扱うかによって、何がどう違ってくるのか、このとき地域差（個体差といってよいと思うのだが）をどう扱うかは、筆者の関心事のひとつになっている。

[会報41号（1987）巻頭言より、元理事]

日本行動計量学会での活動

狩野 裕

大阪大学大学院基礎工学研究科

私が日本行動計量学会に入会させて頂いたのは、確か1992年ではなかったかと思います。それまで日本数学会と日本統計学会を中心に活動していて、日本行動計量学会は少し遠くから眺めていました。ところが、いつしか狩野にとって活動の中心学会として位置づけられていきました。1993年の大会は大阪大学人間科学部で開催され、そのとき、初めて特別セッションを組ませて頂きました。セッション終了後フロアにおられた脇本和昌先生（岡山大学）からナイスセッションとの賛辞を頂き嬉しかったのですが、それはリップサービス以外の何物でもありませんでした。それを今でも記憶していますのは、その日の夜、脇本先生がホテルでお亡くなりになったからです。本学会としても貴重な人材を失いました。また、当大会の第3日目が台風の接近によって中止に追い込まれるというハプニングもありました。

1994年に当時の編集委員長であられた繁榊算男先生からお誘いを頂いて欧文誌 *Behaviormetrika* の編集委員を務め、Covariance structure analysis の特集号を担当させて頂きました。その貴重な経験が、後年に同雑誌の編集委員長を拝命したとき、大いに活かすことになりました。

狩野は1997年に人間科学部に異動しましたが、それからは以前にもまして同学会は狩野にとってきわめて中心的なものとなりました。それは、同学部での所属が行動計量学研究分野であったことや同年に優秀賞を頂いたことも関係しているかもしれません。1999年に第2回春の合宿セミナーの開催責任者の指名を頂きました。大阪大学を会場とし、結果的に200余名の参加者を得たのには感激しました。その後数回に亘って、合宿セミナーの講師として主に因子分析や構造方程式モデリングについて講義をさせて頂きました。

2001年に当学会と関係する計量心理学会国際大会（IMPS2001）を大阪大学で開催させて頂いたのは貴重な経験でした。組織委員会の中心メンバーは柳井晴夫先生（大学入試センター）、岡太彬訓先生（立教大学）と繁榊算男先生（東京大学）でした。狩野は数名の大阪大学の助手とで開催地組織委員会を組織し、学生の力を借りて大会運営をしましたが、若気の至りと言いますか、今考えるとこのような大きな仕事を引き受けたのは無謀であったと思います。IMPS2001ではTシャツをデザインし販売しました。タコティーと称されたTシャツはほぼ完売し、2年後に地中海のサルディニア島で開催されたIMPS2003でタコティーを着用した参加者がおられて大いに盛り上がりました。

日本行動計量学会の特徴は、何と云っても、統計科学者が社会科学や疫学を含む多くの分野の統計ユーザまたはそれに近い研究者や実務者と直接的な対話ができることでありましょう。統計科学を科学の方法論とみたとき、方法論者と統計ユーザとのコミュニケーションは重要な要素です。この観点で、木下富雄先生（京都大学）の統計ユーザ・メーカー論からも強い刺激を受けました。

日本行動計量学会が発足した1970年代は多くの学会・協会が誕生した時期でもありました。その中でも同学会は優良学会と言っても良いのではないのでしょうか。学会員は800名を超え、たとえば、国際的な学会である Psychometric Society のそれよりも多いと思ひ

ます。その理由は日本行動計量学会が統計ユーザにとっても魅力的な学会であるからだと思います。先に登場した木下富雄先生は同学会の大会を「統計手法のデパート」と呼んでおられます。学際性や文理融合は時代のキーワードですが、それを35年前に先取りしたのが日本行動計量学会と言えらると思います。(本文で登場した方々の所属はすべて「当時」である)

[理事、1997年度(第12回)優秀賞受賞]

日本行動計量学会との関わり

佐井至道
岡山商科大学経済学部

日本行動計量学会35周年、おめでとうございます。個性的な学会として存在意義を持ち、さらに発展していくことを祈念いたします。

岡山大学教養部の教授を務められていた脇本和昌先生が、岡山での第17回行動計量学会大会の開催を引き受けられたのが1989年夏でした。その頃、私は岡山商科大学に講師として勤めていましたが、同時に岡山大学大学院自然科学研究科（博士課程）にも通わせて頂くという幸運に恵まれ、脇本先生の指導を受けていました。脇本先生は私にデザインの才能があるという、とんでもない誤解をしており、大会の予稿集の表紙に岡山らしいイラストを描くことを命じられました。数日の期間しかなく、訳も分からないままに、当時完成したばかりの瀬戸大橋（児島 - 坂出ルート）を描きましたが、今でもその予稿集を目にすると顔から火が出る思いです。この大会への参加を機に入会したこともあり、これが私と行動計量学会との最初の出会ということになります。

その脇本先生は1993年に突然他界されてしまいました。研究についてのアドバイスを受ける機会が減ったそれからの数年間、私の研究にとって最も苦しかった時期でしたが、その頃、私は「行動計量学」に次の3編の論文を投稿しました。

サンプリング法の誤解による推定への影響について

- 第1部母平均推定の場合（第20巻第2号）
- 第2部母分散推定の場合（第20巻第2号）

層化抽出法に基づく母平均の信頼区間の構成について（第23巻第2号）

内容がオーソドックスなサンプリング理論に関するものだったため、周りに専門の研究者も少なく、十分な議論を交わせないまま投稿しなければなりません。修士時代の恩師である田栗正章先生にご相談したところ、迷わず行動計量学への投稿を勧められました。調査関係に強い行動計量学の選択はごく自然だったと思います。実際、レフェリーの方々からは対応に困るほどのコメントを頂き、実に多くの勉強をさせていただいたと感謝しています。もちろん今にして思えばという意味で、当時は分厚いコメントに多少落ち込みもしました。そのことが評価されたのかは分かりませんが、2001年の第29回大会で優秀賞を頂きました。

1996年頃からは、官庁統計の個票データを公開する場合のリスク評価法と秘匿方法の研究に取り組んでいます。得られた手法は官庁統計のみでなく、社会調査などで得られた個票データに対しても応用できます。そこまで手が回らないのが現状ですが、今後は微力ながら、そのような方面でも日本行動計量学会に貢献していければと考えています。

[2001年度（第16回）優秀賞受賞]

日本行動計量学会第24回大会のこと

宮 埜 壽 夫

大学入試センター研究開発部・千葉大学名誉教授

第24回大会は、千葉大学担当ということで、幕張メッセで開催されました。大学内ではなくメッセで開催となったのは、日本統計学会大会との合同開催のためであり、参加人数の大幅な増加が見込まれたためと統計学会の大会への参加者が多いためです。大会は、1996年の9月7日～9月9日に開催されましたが、大会前日には統計学会と合同でチュートリアルを開催しました。チュートリアルセミナーは、大会でも講演をいただいたDarrell Bock先生（シカゴ大学）、甘利俊一先生（理化学研究所）にお願いしました。また、幕張メッセを使用するには、一般公開の講演等の開催が望ましいとの話があり、竹内啓先生、故林知己夫先生にそれぞれ「21世紀の展望 - 歴史的予測と数量的予測」、「行動計量学とデータの科学」と題してご講演をいただき、さらにパネルディスカッション「21世紀の社会と人間 - 科学的手法による予測はどこまで有効か」を開催しました。一般の方がどれくらい参加されたかは不明ですが、パネラー、講演者は錚々たる顔ぶれであり、統計学会との合同開催という利点を活かしたよい催しであったと思っています。行動計量学会独自の催しとしては、招待講演2件（Bock教授、Browne オハイオ大教授）、特別セッション11、一般セッション8が開かれ、発表件数は115件であった。

当時を思い起こしてみると、大会の開催を千葉大学で引き受けること、大会委員長を私がやること等、すべて私が在外研究でマルセイユ大学にいた間に決められており、そのことを伝えられたときには愕然としたものです。しかし、千葉大学の講座の同僚はもとより、田栗先生（当時、千葉大学理学部、現大学入試センター試験・研究統括官）、朝野先生（首都大）、繁樹先生（東京大）、岡太先生（多摩大）を始め、多くの先生にお世話になり、何とか大会を無事終えることが出来ました。今も感謝の念に耐えません。特に、開催に必要な資金を工面するために、広告掲載のお願いに尽力をいただいたこと、セッションの司会を無理にお引き受けいただいたこと等が、記憶によく残っています。

他学会との合同開催は大変ではありますが、学会の活動をより活発にするにはよい手段であると思います。最近ではIMPSがありますが、より一層、他学会との交流を深められたらと思います。

[第24回大会実行委員長、1987年度（第2回）優秀賞受賞]

「行動計量学会誌」編集委員長時代の思い出

久保 武士
龍ヶ崎済生会病院

他学会誌の編集委員を務めたことはありましたが編集委員長を拝命したのは行動計量学会誌が始めてでした。身に余る大役でしたが、その間随分勉強をさせて頂き考えさせられることが多々ありました。

まず何よりも印象的だったのは2人の査読者のうち少なくともお1人は不採択という厳しい判定が多かったことです。主として方法論に関する疑念からの却下判定でした。極めて広い領域からの投稿であり、統計学的手法に習熟していない投稿者もいて、もう少し専門家のアドバイスを受ければ良かったのに、と思われる着想の良い論文もありました。

後にノーベル賞受賞対象となった研究論文もその領域の嚆矢となる研究は、しばしば先駆的研究にありがちな瑕瑾を咎められ、一流ジャーナルに掲載を拒まれたことが少なくなかったと聞きます。

査読者は投稿者にとって最高裁判事のような立場にあり、投稿者には採択してもらうために（無罪を勝ち取るために）控訴と言う手段がありません。

勿論編集委員会では査読結果を基に慎重に審議をして最終結論を出すのですが、不採択の結論にはいつも心理的な抵抗がありました。死刑の判決にも似て全員一致が原則でした。救済の余地があれば差し戻しで、修正し再度査読に委ねることが多かったと思います。

査読をしていると自分にはこの論文を正確に理解するだけの知識や能力に欠けているのではないかと、論文の著者は自分より遥かに高いレベルにいるのではないかと言う懼れに近い気持ちを時に抱くことがあります。査読者は限りなく謙虚であることが求められる所以です。

一方論文のクオリティを高く保つためには甘い査読が赦されないことも疑う余地がありません。何千何万という多くの会員を擁する学会でありませんから、つまりささやかな学会ですから学会誌の学術的価値は絶対に低めてはならないと思いました。山椒は小粒でもピリリと辛い学会誌であって欲しいという願いからです。

査読を巡って愚痴めいたことを記しましたが、厳しい査読を通過した論文はそれなりに優れた論文と思います。

コンピュータがこれほど発達した時代において、行動計量学はもっとその裾野を広げ一層発展できるはずです。そのためにも行動計量学会誌はもっと広く distribute されるべきでないでしょうか。

最後に私の編集委員長時代に編集委員を務めて下さった方や査読者の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。随分不躰な催促をしましたが、査読の綿密さ、緻密さにはいつも尊敬の念を抱いていました。

今は亡き林知己夫先生の衣鉢を次ぐ優れた後継者が大勢おられるのですから、行動計量学が更に発展することは間違いないと確信していますし、そうなることを心から祈念しています。

[第22回大会実行委員長、元和文誌編集委員長、2005年度（第20回）功績賞受賞]

日本行動計量学会35周年に寄せて

林 文
東洋英和女学院大学人間科学部

大学卒業以来、研究者になろうとは思っておらず、下働きとして何か役に立ちたいとだけ思ってきました。林知己夫先生とそして行動計量学会は、何とか学界の端くれにおいていただくことになった私にとっての重要な基盤です。統計数理研究所で林知己夫先生の研究室に置いていただくことになってから、大変広い分野のご研究とそのアプローチに引き込まれたのは、行動計量学の設立に携われた諸先輩と同じような気がします。林先生は、とにかく、何でも面白くて仕方がないというように取り組まれていました。昼休みを延長してそんなお話を随分沢山お聞きすることができました。そこでお話されていたことが、そのうち文章になっていて、雑談のようなお話をお聞きする時間は、私たちにとってはもちろんですけれども、話しながら考えておられたのかな、などと思います。

さて、行動計量学会にはそんなわけで最初から入会させていただいたわけではありません。林先生はお手伝いの私にも論文の一部を担当させて下さり、ご指導下さいました。その中で、データの見方というものが身についたようです。統計数理研究所という世界から外に出たとき、そうして身についたものが、実はとても重要なものだと気付かされました。それが、たぶん行動計量学だと私は思っております。はじめは林知己夫先生が常に見てくださるという状態のまま、行動計量学に発表させていただくようになり、学会運営についてのお手伝いもさせていただくことになりました。

「行動計量学」の編集委員長をピンチヒッターとしてお引き受けし、次の1期も担当させていただきました(2000年10月~2003年3月)。丁度、投稿原稿を紙ベースから電子媒体に変化する時期でもあり、原稿は書留でという考えと電子メール添付でよいという考えがあって中途半端のまま、その他いろいろと不手際もあり、出版の遅れを回復させることはできませんでした。しかし、特集企画など、行動計量学会を愛する編集委員や執筆の先生方のご協力を得て、よい特集号を出版できました。吉野諒三氏によって手続きが簡略化されたのはすばらしいことだと思います。

2002年には林知己夫先生を失い途方にくれましたが、行動計量学会は、他の学会と比べて、大会発表をはじめ様々な面で、自由な学問の雰囲気を持っています。今の厳しい社会で、それが失われないようにと思います。

[理事、元和文誌編集委員長]

運営委員会活動と行動計量学会

山岡和枝

国立保健医療科学院技術評価部

2000年度から2005年度までの6年間、運営委員長をお引き受けした。運営委員会は行動計量学という学際的な分野を考慮して、多岐にわたる分野から15名の方々に運営委員をお願いし活動を行ってきた。その役割はセミナー、シンポジウム、講習会等の企画運営、広報理事とともに会報の発行・WEB運営（その当時はまだ広報委員会は独立していなかった）など、学会活動の活性化に向けて取り組むことであった。また、研究部会として地域部会と小グループ研究会の援助を行い、それぞれ大会はもとより、独立した形でのシンポジウムなどを展開していただいた。

当初の委員会では、繁樹先生や岡太先生のように学会活動を率先して率いてきてこられた頼もしい方々を筆頭として、それぞれの委員が積極的にかかわり、特に依頼しなくても自発的に、シンポジウムをはじめ、セミナーや講習会を開催して下さっていた。また、初めての試みではあったが、海外の研究者による講演会の開催や、社会調査士教育における多変量解析の講習会を共催という形で行ったこともあった。さらに、行動計量学という基礎から応用までの幅広い分野での研究に従事する、あるいはしていこうとする若い人々（自称も含む？）を対象として行ってきた合宿セミナーを、毎年春に開催してきた。これらはすべて運営委員や会員のボランティアにより行われてきた活動であり、運営委員会はこれらの活発な活動の一助となることができたと思う。

このような6年間を通して特に印象の深かったのは2002年のシンポジウムである。この期間には第68回～第86回まで計19回行い、2002年度には6回のシンポジウムを行った。特に5月8日に統計数理研究所にて開催した第73回行動計量学会シンポジウム「データの科学と調査法」では、「データによって現象を理解する」という林知己夫先生の一貫した探索的立場に基づく「データの科学」についてお話いただいたが、8月6日に亡くなる前の最後の講演となってしまった。また、次の6月1日の「データの科学と調査法（その2）」には、コメンテーターとしてご参加いただいたが、健康状態があまり優れなかったにもかかわらず、そのような気配を感じさせずお話いただく姿が印象的であった。このようなすばらしい諸先生方が発展させてきた行動計量学会が35周年を迎えたことを機に、今後さらに活発化し学会活動を深めていくことが現在の会員であるわれわれに託された課題であろう。

[理事、元運営委員長、2003年度（第18回）優秀賞受賞]

1994年に統計数理研究所に就職した時、ちょうど本学会も役員改選期で、柳井晴夫先生が理事長に就任された。4月中のことだったと思うが、柳井先生から直々にお電話を戴き、行動計量学会の運営委員を務めて欲しいと言われ、一も二もなくお引き受けした。当時千葉大学の田栗正章先生（運営委員長）に紹介いただき、私の学会活動を支援する側の活動が始まった。またこの期から統計数理研究所のメンバーが事務局（庶務担当理事）を務めるようになり、それが現在も続いている。爾來14年、運営委員会や広報委員会の活動と事務局の仕事のインターフェース的な仕事も手伝ってきた。考えてみると現職場への勤務期間と学会の支援活動の時期が丁度重なっていることになる。

最初のお手伝いは、丸山久美子先生が企画された行動計量シンポジウム（生と死の行動計量）の会場係だったと記憶する。この時は改選時期に重なったこともあって広報が十分になされずに、開催されることを知っていた会員が大変少なかった。必然的に参加者も少なく、丸山先生を落胆させてしまったことを覚えている。現在では運営委員会と広報委員会の連絡は比較的密に行われ、いろいろな催しのアナウンスなどもタイムリーに行われているが、ひとつの要因として2003年以降に広報委員会を運営委員会と別に常置委員会としたことが効を奏したと思う。14年間で、自分で企画した行動計量シンポジウムなどもあったが、積極的に学会の成果となるような運営委員会企画を立ち上げられたかという点心許ない。

運営委員会の活動で少し印象に残っているのは、春の合宿セミナーに関する件で、発端は私の発言だったかも知れない。繁榎算男先生と岩崎学先生が合同でゼミ合宿を開催されている（本当に合同だったかちょっと自信がありません）というお話を委員会会合の前か後かに伺い、「私も参加したい、楽しいだろうなあ、何なら公開合宿にしていただけませんか」、というようなことを軽い気持ちで申し上げたところ、その類の催しに繁榎先生が大変乗り気になって下さった。あれよあれよという間に第1回の開催が決まった覚えがあるが、何しろ短期間に充実した催しを準備された繁榎先生以下、ゼミの皆様のバイタリティーに心底感嘆した。といいながら実は私にとってはあまりタイミングの良い時期とは言えず、残念なことに、この時を含めて一参加者として参加できた合宿セミナーというのではない。

活動を通じて感じるのは、学会活動がバイタリティー溢れる諸先輩のサービス精神に支えられているということなのだが、これは本学会らしいところとも思えるし、続く者にとっては高い目標値を設定されているようで苦しいところでもある。若手会員の小さなやる気と学会支援活動への気楽な参加の気運を盛り上げられたら良いのだが、とたまたま思案している。

[理事、2000年度（第2回）奨励賞受賞]

「同じ釜の飯を食う」春の合宿セミナー

大森拓哉
多摩大学経営情報学部

私がこの学会に入会してからすでに10年以上もの時がたっていると考えると感慨深いものがある一方、まだまだ研究面においては諸先生方にとっても太刀打ちできない情けなさを改めて感じるものである。初めて大会で発表した際にも、行動計量学の専門の先生方からどのような厳しい質問・指摘を受けるのだろうかと思いきや、ビクビクして登壇したことを今でも鮮明に覚えている。事実、発表中に首を横に振って全否定するような仕草をする先生がおられて、大いに緊張が増した思いがある。そのような行動計量学を専門とする大先生方に少しでもお近づきになれる機会を与えてくれたのが春の合宿セミナーであった。

大学院生だった当時幸いにも第1回（千葉・検見川）の開催のお手伝いをする事ができたため、多くの参加者や、講師を務めてくださる学会の大先生方のお顔を拝見することができた。また、第2、3、10回は参加者として、第7、8、11回は実行委員として、第6回には講師として参加し、多くの方々と交流を深めることができた。これは単なるセミナーではなく、“合宿形式”というある種無理やり同じ時間・空間を共有する（させられる）ことからくる良い面での効用であると思われる。方や、相部屋しか用意できなかったり、合宿施設そのものを用意できなかったりといった、参加者のニーズ全てを満足させられない面があるのも事実である。直近の第11回（多摩大学）では合宿施設が用意できなかったため、無理やり参加者の方々には学食で同じメニューを食べていただいた。それらを踏まえたうえでも、合宿セミナーを通して学びを得ることはもちろん、多くの方々と交流する機会が得られたことは私にとっては大変大きな収穫であった。

通常の大会では興味のある発表セッションに参加するのが普通で、大会最初から終了日最終セッションまで全てに参加する方は少ないと思う。それに対し、この合宿セミナーはかなりの長時間を参加者が共に過ごすことになる。異論もあるが、同じ時空間をもつことによって参加者同士の距離が縮まるであろうことは些か期待しすぎであろうか。実際第1回の際には夜に皆で海に出かけたり、実現はしなかったがテニスやバーベキューなどの案も出たりしていた。そのときの集合写真に写っている若手（だった？）参加者達が、現在各方面で活躍していることを聞くと大いに刺激にもなるものである。第2回の大阪大学（狩野先生）の際のサブテーマは「ともだち100人できるかな？」であったと記憶している。参加者が40名程度のときもあれば200名を超えることもある合宿セミナーではあるが、ぜひとも多くの方が参加して、学術面だけではない「交流」を深めていただきたい。さらに願わくば、いつかは雪の降る温泉宿とか、3月でも暖かい沖縄とか、あるいはちょっとがんばってハワイとかで開催していただきたいと思うものである。

[運営委員]

「シンポジウム担当」運営委員として

松本正生
埼玉大学経済学部

ここ数年来、行動計量学会には運営委員として参画させていただいている。ただ、学会への貢献度は極めて低く、調査関連のシンポジウムの企画運営で辛うじて責任を果たしているに過ぎない。どうかご寛恕願いたい。

松本が企画および実施にかかわった行動計量学会主催のシンポジウムは、4件に及び、その内容は以下の通りである（年次順に、タイトルと報告者・討論者を列挙する）。

「電話世論調査：RDD法の検証」(01.10.20)

報告者 齊藤博美（朝日新聞社）、小寺敏雄（NHK）、土屋隆裕（統計数理研究所）

「世論調査のゆくえ」(02.11.23：多摩大学と共催)

報告者 宮森重光（共同通信社）、長江一平（毎日新聞社）、松田映二（朝日新聞社）、
窪田知久（読売新聞社）

討論者 山岡和枝（国立保健医療科学院）

「今こそ、調査の哲学を」(04.5.22：多摩大学と共催)

報告者 松田映二（朝日新聞社）、吉野諒三（統計数理研究所）、萩原雅之（ネットレイ
ティングス）、相田真彦（ミシガン大学）

討論者 平野浩（学習院大学）、山岡和枝（国立保健医療科学院）

「いま求められる調査とは 各調査モードの比較検証」(06.11.11)

報告者 佐藤寧（日経リサーチ）、福田昌史（毎日新聞社）、松田映二（朝日新聞社）

討論者 谷口哲一郎（輿論科学協会）

司会はすべて松本が担当。なお、4番目の「今求められる調査とは」における報告の担
い手となったサーベイ・メソドロジー研究会は、2006年度から行動計量学会の研究部会
として活動している。

これらのシンポジウムは、もとより多くの先輩のみなさまのご協力なしには成立しなかつた。また、いずれも非常に盛況であった。心より感謝を申し述べたい。

「電話世論調査シンポ」時（2001年）には、RDDにかんする懐疑論が主流を占めており、この方式の学問的および社会的認知度を広げるべく配慮した記憶がよみがえる。RDDは、その後急速にシェアを拡大し、世論調査の標準となるに至ったが、直近ではもはや、その限界すら語られるようになってしまった。この間、わずか数年にすぎない。社会との共生を余儀なくされる社会・世論調査の宿命であろう。

[運営委員]

会報の編集を担当するようになって

西川 浩 昭
日本赤十字豊田看護大学

準会員の期間も含め、日本行動計量学会に入会して20年以上になる。学会が創立35周年ということから鑑みると、会員歴は長い方になるのかもしれない。現在、いくつかの学会の会員であるが、この学会は私が初めて入会した学会である。また、その年の夏、北海道大学で第13回学会大会が開催された。夏の北海道という言葉にも釣られ、この大会に参加したが、これも私が参加した初めての学会大会である。学会というと格式張ったイメージがあり、ネクタイ締めてスーツを着ていくものと思っていたのだが、参加者がラフな格好をしていたのに驚かされたのを覚えている。その後20数年間、学会大会には結構参加しているが、自分の研究は主に医学系の学会で発表しているため、この学会ではあまり発表した記憶はないが、私としては繋がりが深いと受け止めているとともに、思い入れが強い学会である。

現在は、広報委員会の会報担当と本誌こと記念誌編纂委員会の委員という出版物による学会の広報活動を担当している。とくに会報については編集の責任者を担当している。いつも巻頭言をどなたに依頼したらよいかと頭を悩ませている。そこで思うことは、この学会の会員が如何に多方面にわたっているかということである。これは学会としては好ましいことであるが、原稿を依頼する者としては悩みの種である。特定の領域に偏らないようにした上で、執筆を依頼する人を探すのは結構苦労する。

私が担当するようになってからの巻頭言に限って見れば、最も多いのは林知己夫先生についての思い出であるが、その他の内容としては、理論統計、調査、医学、統計教育、と様々なテーマの原稿を掲載させてもらっている。私が担当する前を振り返れば、前述の内容以外に、言語、法律、意思決定、計算機など挙げだせばきりがない。ひとつの号にひとつしかない巻頭言でさえこの状況であるので、関連学会の開催案内にいたってはバラエティの限りである。本学会がいわゆる境界領域に位置し、人間の行動が多様であることを考えれば当然の事かもしれないが、このように様々な領域の研究者が一同に集まっているのは非常に貴重なことであると言えるだろう。

今後は、本学会がこのような多領域の研究者が一同に集い、互いに交流を深める場として機能していくことを願うばかりである。

[理事]

本学会に入会したのは1997年。学会の35年に比べて、在籍は長くはありませんが、いくつかのお手伝いをさせてもらう中で、私にとって身近でかわりの深い学会となりました。

まず、岡山・倉敷で行われた第27回大会（1999年9月20日～22日、垂水共之委員長）。少し離れた2つの会館が会場でしたので、倉敷美観地区内で迷わないように、あるいは懇親会で倉敷を存分に楽しんでもらえるようにと、参加者へ丁寧な配慮をしたことから、こういった雰囲気をもった学会なんだ、と感じたことを覚えています。次に、「地域部会」。2002年に、それまでの小グループ研究会を発展させ、「研究グループ」と「地域部会」の2つが新設されたのを受け、この後者に、「行動計量・岡山地域部会」を申請しました。2002年度から4年間、代表としてお世話をさせていただきましたが、2回の行動計量シンポジウム（第79回「地域・地理・図形情報とデータ解析」と第85回「社会調査と社会調査士」）や研究奨励を目的とした「学生セッション」を含め、4年間で計18回の研究会を行うことができました。年5万円の助成金やノルマ（年4回の研究会と2年に1回のシンポジウム開催）が、実は、定期的に研究会を開催する非常によい動機となりました。岡山はもともと統計の研究者の多い地ですが、研究会での新しい出会いやシンポジウムにも各地から参加をいただき、東京近郊以外の「地方」での研究活動を活発化しようという「地域部会」の趣旨とこれを制度化した本学会の英断に大いに感謝した次第です（現在も、世話人を交代し、活動を継続中です）。

さて、2006年度からは、広報委員として、会報とともに、ネット関係の仕組みの充実にかかわらせてもらいました。ひとつは、会員用のメーリングリスト（ML）で、書式を統一し、学会からのお知らせや関連団体からの情報をタイムリーに伝えるように広報委員でがんばっています。最近では、ML配信を前提とした連絡がたくさん来ますので、もっとMLへの登録者が増えてほしいところです。また、Webページも2006年9月から新しいデザインで運用しています。特に、Webページにすべての情報を集中させようと、会報、大会プログラム、行動計量シンポジウムの開催要項などを第1回からすべて掲載することにしました。これには、関係者の多大な協力によって、故林知己夫先生の資料庫内の資料や柳井晴夫先生所蔵の資料から情報収集をしました（ここで整理した情報が、この35年史の「資料編」の基となっています）。2007年9月から公開していますが、作業を終えて、それらの資料をあらためて眺めてみると、当時の様子や研究動向がわかるだけでなく、創設時の苦労の一方で先人の先見の明がどれほど素晴らしかったかをあらためて知ることができます。

理論だけでなく、実学的な研究をしっかりと受け止めてくれる日本行動計量学会、もっと会員が増えてもよいな、と思います。また、どんどん便利になるネット環境に本学会および会員も遅れないようにしなければ、とも感じます。先人の資産を受け継ぎながら、ますますの発展を期待するとともに、今後も可能な限りお手伝いをしていきたいと思っています。

[理事、広報委員長]

日本行動計量学会35年記念誌編集に携わって

森 本 栄 一

株式会社ビデオリサーチ 研究開発部

日本行動計量学会に入会したのは1995年の秋頃になります。当時、大学院生でしたが、学部時代より、統計数理研究所の駒澤勉先生の研究室で勉強がてら働かせて頂くことになり、先生の所に持ち込まれるさまざまな仕事を通じて、実際のデータによる問題解決のための統計的データ解析（行動計量学）に興味を持つとともに、駒澤先生のご著作（『数量化理論とデータ処理』（朝倉書店）や『数量化理論』（放送大学教育振興会））の冒頭に紹介されていた数量化理論の成立過程について非常に興味を抱きました。統計数理研究所の図書室には、林知己夫先生の数量化理論開発当時の論文や当時の時代背景を探る統計学関係の古い資料が豊富にあり、駒澤先生のご許可を頂きこれらを収集するとともに、幸いにも、同じ頃林先生が東京工業大学で講義「行動計量学序説」をなさっており、講義の後、先生に相談を持ちかけると初めて会う私に優しく接して下さい、以後、先生から貴重なお話をお伺いできる機会を得ました。

林先生には、細部に渡って論文にも目を通して頂き、後に「戦後日本の統計学の発達 - 数量化理論の形成から定着へ」というタイトルで、『行動計量学』（32巻1号）に発表いたしました。ここでは、数量化理論が開発された1940年代後半から学会が設立された1973年までの時期（時代区分）を対象とし、理論形成からその定着過程について分析しました。さらにこの論文で、その年の夏の大会で肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）を頂くことができました。

論文以外にも、林先生には先生の渋谷の事務所で毎月開催されていた「林塾」にも参加の機会を頂きました。「林塾」では、林先生を始め、岩坪秀一先生、丸山久美子先生、林篤裕先生、倉元直樹先生、伊藤圭先生などが参加されており、先生方の統計・調査に関するさまざまな研究報告と議論の中から行動計量学の礎を学ばせて頂くことができました。これら林先生に渋谷の事務所で論文についてご指導頂いたことや、「林塾」での議論、また先生が渋谷の事務所にいらっしゃる際、ベレー帽とタートルネックで事務所の前の急な坂道を上がられてくるお姿などが脳裏に蘇ります。

その後、日立製作所を経て、現在、会社設立当初から林先生が顧問として調査の基礎を築いたビデオリサーチにて、日々、さまざまなメディアリサーチ・マーケティングリサーチの研究課題に取り組んでいます。今回、学会の設立メンバーでその後も中心的存在でいらっしゃる柳井晴夫先生の下で35年記念誌の編集作業に携わることができ、当時の貴重な状況を知りえるのみならず、先生と学会の歴史を纏める仕事をさせて頂くことができたことを感慨無量に思っております。これも天国の林先生が下さった貴重な機会と感謝しております。

[35年記念誌編集委員、2005年度（第7回）奨励賞受賞]

私が統計数理研究所に研究員として採用されたのは、林知己夫先生が統計数理研究所の所長になられた1974年4月である。就職して1年目か2年目かは定かでないが、駒澤勉先生に勧められて行動計量学会に入会した。行動計量学会が1973年9月の発足であるから、かなり古い会員ということになる。林知己夫理事長のもと、水野欽司先生、駒澤勉先生が行動計量学会の仕事をしているのを、時にはお手伝いをする程度の関りはあった。駒澤先生が水野先生の代行で事務局をしたときではないかと思うが、私の研究室が比較的広い部屋であったためか、ある日突然、駒澤先生がダンボール箱と一緒に若いアルバイト女性を連れてきたときは驚いた。学会の事務についての当時の私の認識は、一人のアルバイトと小さな机と名簿の入ったダンボール箱である。

国立国語研究所で開かれた第10回大会（1982年8月）では、実行委員としてお手伝いをした。10回記念ということで、日経ホールで記念公開講演会が開催された。司会は野元菊雄先生で国語研究所の林大所長、と林知己夫先生が講演者であった。

それから約20年後、2003年度から2005年度の3年間事務局をお引き受けした。理事長は杉山明子先生である。この間は行動計量学会にとって様々なできごとがあった。中でも学会にとっての一大事は、会員業務と各種発送業務を委託していた（財）学会事務センターの突然の破産である。2004年8月のことである。会費預かり金、約300万円が回収の見込みがないことになった。幸い、文科省から和文誌発行に対する補助があり、運営上は事なきを得たが、肝を冷やすできごとであった。

発足当時と最近の学会の大きな違いは他学会との関係である。2003年11月に日本教育社会学会、日本行動計量学会、日本社会学会の3学会によって、社会調査士資格認定機構が発足し、現在は法人化に向けて様々な動きがある。2005年2月には、行動計量学会を含む統計関連6学会による統計関連学会連合が発足した。また、この間、横断型基幹科学技術研究団体連合への加盟、日本心理学諸学会連合からの脱退など、対外的な交渉ごとが大幅に増えた。会員への直接的なサービス以外に社会への貢献とも言うべき業務が増えている。社会との関りも含めて学会のあり方を見直す時期が来ているように思える。

[理事、前事務局長]

『林知己夫著作集』の刊行

村上 征勝

同志社大学文化情報学部・統計数理研究所名誉教授

2006年の末に『林知己夫著作集』15巻が刊行された。先生はしかし、この著作集の完成を待たずしてお亡くなりになられた。先生には是非全巻を見ていただきたかったと今でも残念に思っている。

この著作集の刊行については、一度会報で案内させていただいたが、今回は編集の経緯と刊行後のことについてご報告させていただきたい。

先生の著作は、著書、論文、研究報告、随筆、新聞記事、書評など1500編を超え、しかも分野は多岐にわたっている。これらを個人で集めるのは、不可能に近い。そこで、先生の現象理解に関する考え方や、データ分析に関する思想・哲学を理解する上で重要なものを集め、著作集を作らせていただきたいと先生にお願いした。それは体調を回復された先生が久しぶりに研究会に来られ、「これからだ」とおっしゃられた2002年の春であった。「生涯現役」を標榜されていた先生のことなので、許可は得られないと思っていたところ、意外にも先生は少し考えられた後で「いいだろう」とおっしゃられた。

許可が得られた数日後、出版の打ち合わせのため勉強出版の池嶋社長とともに林先生のお宅に伺った。その折、巻数は8巻、価格は4万円で、作成部数は200～300セット程度で計画してはどうかと申し上げた。勿論、最小限に見積もった場合の数字として申し上げたつもりであったが、後日、奥様からお聞きしたところでは、私たちが帰った後に、先生は奥様に「オイ、村上は（著作集は）あまり売れそうもないといっていたぞ」とおっしゃられていたとのことであった。これには自己の言葉足らずを大いに反省した次第である。

ところで、著作集は最終的には全15巻（4860頁）という大部なものになった。そのため8万円という高価なものになったが、作成した500セットの残部は現在20セットに満たないという状況であり、編集に携わった一人として大変うれしく思っている。

現在私は、林先生の提唱された「データサイエンス」をキーワードに教育を展開している文化情報学部には籍を置いているが、浅学非才の身でありながら、先生の行動計量学の思想と学問に対する情熱を、これからの時代を担う若い人々に伝えることが出来る立場にあることを、常に重く受け止めている。この学部の資料室、といっても10万冊が収納できる規模であるが、ここには奥様から御寄贈頂いた先生の蔵書が「林知己夫文庫」としてまとめられている。勿論『林知己夫著作集』も含まれている。

[第35回大会実行委員長、元事務局長、1997年度（第12回）功績賞受賞]

第5部

行動計量学との 関わり

巻頭言が私事にわたるのは不適當かも知れませんが、私は大学の数学科を卒業し、しばらくして統計学を専門とするようになりました。学会で言いますと、日本数学会が本籍、日本統計学会が現住所というわけです。この比喻を続けるとき、日本行動計量学会は私にとって何であるかという問が出て来ます。ある晩眠れぬままに、この問を考えつめて、得た答は「隣家」でした。

本学会を隣家としか考えない人間が、会報のこの貴重な紙面をふさぐのはけしからんという声を予想して、急いで釈明します。この「隣」は「隣りは何をする人ぞ」というような心もとない関係ではなく、困った時には米や塩を借りに行けるような親しい間柄です。また、両家の間には境界領域と言いますか広い敷地があって、食用に適する野草もあります。

日本統計学会は、まもなく創立50周年を迎えます。でも由緒があるということは、万事それだけ老化しているということにもなります。私がこの家に移った30年前は、家の中に新鮮な食物が充満していた記憶がありますが、今はかなり乏しくなりました。狭い家の中の物を皆が分け合って暮している状態です。家族の中には、空気中の窒素から蛋白質を作り出して食料としている人もいます。私にはそのような技能がありませんので、もっぱら自然食品に頼らなければなりません。それで時々隣りへ借りに行き、また野草をつむことになります。

近頃、私は両家の間の土地が非常に肥沃であって、いくらでも開墾の余地があると思うようになりました。これを統計的データ解析という言葉で表現することにします。日本統計学会の中では統計的方法論がかなりの部分を占めていますし、日本行動計量学会の中ではデータ解析のウエイトが大きいと言ってよいでしょう。この両者の関係は、ある場合には競争的になるかも知れませんが、主として相補的であり、この関係が現在よりもっともっと緊密になることによって、両家はそれぞれ大きく発展すると私は信じます。

さて、両家の家風には大きな違いがあります。私の家は何事も格式ばっていますが、隣家は新築間もないせいか自由闊達の雰囲気があって、善悪の問題ではありませんが、それぞれの会報の上に違いがはっきり出ています。この文を書きながら、私は自分がお隣りの座敷へ上りこんで、いつになく冗舌を弄しているのに気付いて苦笑しています。

とにかく、このせち辛い世の中に、こうした隣り付きが出来るということは、誠にありがたいことです。ただこれが多分に私の個人的付き合っていて、両家の全面的な関係でないのは残念です。私がこの付き合いから得ているものは、恐らく私の家のだれにとってもプラスであると信じますし、逆もまた真であると思うからです。お隣りの一層のご繁栄と、両家の付き合いの発展とを祈りつつ。

[会報18号 (1979) 巻頭言、当時：理事・大阪大学基礎工学部、2006年逝去]

文化の行動計量

三 隅 二不二

これほど国際関係が身近になってくると、好むと好まざるとに拘らず、文化の計量を考えざるをえなくなる。30年来、実験社会心理学としてのグループ・ダイナミクスを研究してきたが、卒直に述べて、あまり文化の相違について真剣に考えてこなかったことを反省する。

実験結果に、米国などの研究と相違が見出されたならば、それを文化差と考えるよりも、実験状況を構成する条件差として考えてきた。条件差のなかには文化的要因も含まれているかも知れないが、それは部分的影響であると考えてきた。一方、文化人類学や文化心理学では、いうまでもなく文化の特殊相を記述し、解釈してきた。中根、土居の日本社会論や日本人論は、その特殊相のみを強調している。

両者の視座は一度再吟味しておかねばなるまい。それは、ともに方法論の問題である。

概念と方法の適用に関する再吟味の問題である。概念化の問題としては、従来の社会科学の分類それ自体に問題がある。政治・行政・宗教・教育・体育などの分類それ自体が社会的現象の特殊相に相即したものであって、物理学・生理学のような社会科学の分野における一般学のカテゴリーが存在しないようである。私どもは、リーダーシップ現象の行動計量を進めているうちに学際現象の“広場”としての一般学としてのリーダーシップ論がおちつく先がないことを知った。政治のリーダーシップは、行政的リーダーシップとも、経営リーダーシップとも、教育のリーダーシップとも異なる。お互いに異なることだけを論議して、それらを相互にすり合せて、類同性を体系化する分野が存在しないのである。データの分析においても、一般性、普遍性と特殊性の双方を同一のデータから解析する視点に欠けている場合が少なくない。日本人論の行詰まりのひとつもそこにあるだろう。中根、土居の論文を読んで感じることは、どこまでが普遍的なもので、どこから日本的なのか、はっきりしないのである。日本型集団主義の論議においても同様である。アメリカ人は個人主義、日本人は集団主義という観点から、スケールを準備して永年データを収集して分析してみたが、結果ははっきりしない。英国・米国と日本における同様な工場・生産工程の職場の管理・監督者を対象としてリーダーシップ行動評定を行っているが、予想以上に対人関係に対する配慮因子に関して類似性が存在することに驚いている。もっと異なるはずだという Assumption があったためかも知れない。

比較対象となる資格をもったものは“同じようで異なるもの”であるという林知己夫のことばは示唆的である。全く同じもの、全く異なるものは比較対象となる資格がない。文化の比較の場合、サルと人間の類似性すら追求する人間科学の世界では、同じようなものが多く、文化差といっても、それは少しばかり違うのではないか。それにも拘らず、最初からちがったものであるという“おもいこみ”が強すぎるのではないか。文化の行動計量学は、まだこれからである。

[会報39号(1986)巻頭言、当時：理事・大阪大学人間科学部、2002年逝去]

最近のパソコンの普及は目覚ましいものである。ちょっと一晩豪遊するのを儉約するくらいで、パソコンが購入できる。趣味として個人で買って楽しんでいる人も少ない。

これに伴って、ソフトウェアも完備してきた。昔は、むずかしい理論と、プログラムの技法を同時に学ばなければならなかったのが、既製のソフトウェアが簡単に入手できるようになった。

データを入力するだけで、いろいろの分析をし、その結果を美しいグラフとして出力してくれる。昔は平均値や分散を求めるのさえ、たいへんな手間がかかったのが、近頃ではどんな分析手法でも、ほとんど手間をかけないでできる。

またデータの入力もなるべく自動的に行いたいというので、新しい入力装置がつぎつぎに開発されてきている。人間はなにもしなくても結果が出てしまう。

確かに便利な時代になったものである。ところが、どうも少し変な傾向が現われてきたのではないかと思われる。

どんな分析手法も、その裏にはっきりとした考え方がある。ある仮説の上に立っており、その仮説が成り立つ条件の範囲でしか有効でない。ところが、すべてが自動化されてしまうと、出発となる立場も、途中の計算過程もすべて無視されて、結論だけがもっともらしく示される。これでは、何をやっているのかわからない。

入力のデータも、また出力された結果を利用するのも人間であり多くの分析手法は、人間の直観をより定量的に表現しようとしているのであるが、この点を忘れて、結論だけを手軽に入手しようとする。そこには人間の洞察力の余地はまったくない。これでは分析結果の有効な利用は望むことはできない。入力を観察してみる。出力もできるだけ直接に観察してみる。そこでデータの意味を考察して、最も合理的な結論を出すように分析する。あるいは、結論さえ出さず、ある処理をした結果をできるだけ観察しやすい形式に表現して、そのまま観察者に提供する。

それを観察し、判断する人は、同じデータから異なった結論を出すかもしれない。これが人間の社会の常識である。同じデータからある人は慎重にしろという消極的な結論を出し、また別な人は、積極策を提案するかもしれない。この人間の判断を柔軟にできるようにするのがデータの処理の目的であり、結論そのものを出すのが目的ではない。

あまりに便利になったために、生のデータを直接に観察して洞察する習慣を失ってしまうのではコンピューターの普及も、分析手法が広く知られることも、あまりうれしいことではない。

[会報28号(1982)巻頭言、当時：理事・慶応義塾大学理工学部、1983年逝去]

非対称性の解析と行動計量学とのかかわり

千野直仁
愛知学院大学心身科学部

私の世代の多くは、学部を卒業した頃行動計量学会が発足し、学会で故林知己夫氏、柳井晴夫氏や岩坪秀一氏らの大先輩達の後姿を見ながら、育った。私自身は、故内田良男氏や故水野欽司氏に多変量解析を教わり名大大学院教育学研究科心理学専攻修士課程を1972年に終了し、その年に現在の愛知学院大学に助手として赴任した。翌年、統計数理研究所で開催された第1回行動計量学会大会では、定性的要因の場合の正準相関分析のアルゴリズムを提案していたことを、今回の原稿を作成するにあたり、色褪せた第1回大会発表論文集をひも解いてなつかしく思い出した。私自身のその後の研究のひとつの方向を決定づけたのは、第5回大会で発表した「N個の対象間の非対称な関係を図式化するための一技法」であり、その前の数年間クラス集団の縦断的ソシオマトリックスを収集する中で考えたものであった。また、翌年にはこれを加筆修正して Behaviormetrika に投稿し運良く掲載されたことが、私が非対称性の解析にのめり込む契機となった。もっとも、この方法は、70年代後半の時点では未だ Torgerson 以来計量心理学の分野で発展しつつあった対称データに対する多次元尺度法、すなわち伝統的な（対称）MDS に比べると世界的にも提案者はほとんどなく、さびしい船出となった。しかし、80年代になると、日本でも岡太彬訓氏・今泉忠氏をはじめとする研究者による非対称 MDS に関するユニークなモデルが幾つか提案され、今や日本が世界の非対称 MDS の研究をリードしているといっても過言ではない。

いずれにせよ、私の最初の論文では、方法的には制約の大きいモデルを扱っていたので、その拡張は決して難しくはなかったが、もともこの論文のもとになったデータが縦断的ソシオマトリックスであったので、私自身の関心は、モデルの拡張よりは非対称 MDS とは発想が大きく異なる非対称な関係の変化のダイナミックスを記述したり予測したりできるモデルや理論の構築にシフトしていった。こうなると、非対称 MDS で得られる対象の布置は、ダイナミックモデルの状態空間に過ぎず、その空間内で生起する成員相互のダイナミックスに関する理論や方法こそが、重要に思われた。これが、私のその後の研究のふたつ目の方向を決定づけた。

結局、この方向の研究には数学の分野の力学系の定性理論の学習が不可欠と思い、当時名大で教鞭をとっておられた力学系の専門家であられる白岩謙一氏の門を叩いた。先生にはその後もずっとお世話になっている。また、この方向の研究に興味を持って下さった高根芳雄氏、吉野諒三氏、中川正宣氏には、これまでいろいろ貴重なコメントをいただいていた。近年、自然科学の分野のみならず社会行動科学の分野ではよく話題となっているカオス理論は、力学系の定性理論にその基礎を置くが、多様な社会行動科学の分野の現象に対して力学系の定性理論を応用する研究は、まだまだ少ない。

最近、高根氏が81年に提案した対称 MDS のひとつの手法である MAXSCAL を非対称データの場合に応用する最尤非対称 MDS を、若手の佐部利真吾氏と開発しつつあるが、その中で非対称性を図る物差しとして評定尺度を用いると、数理統計学の分野で長い歴史のある正方分割表の研究と非対称 MDS の研究の間に大きな橋渡しができることに気付く、この方向の非対称性にかかわる研究を進めつつある。

[理事]

一瞬、鋭い眼光が放たれた、と思った。

1988年の夏、千葉大学で開催された行動計量学会の研究発表大会のセッションの合間に、当時既にカナダ・McGill 大学教授であった高根芳雄先生から、林知己夫先生（当時・統計数理研究所所長、行動計量学会初代会長）に紹介された時であった。California 大学 Irvine 校で学位をとったものの、数理心理学という狭い分野だけに、就職に苦慮して駆けずり回っていた時期であり、夏休みに帰国した高根先生が後輩の私をいろいろな方々に紹介してくださっていた。

はじめ高根氏を相手に、にこやかに対応していた林先生が私の方へ向いた時であった。こちらで大先生の前で緊張し真剣にお話をうかがっていたが、一瞬、鋭い眼光を放ち、先生も真剣な眼差しでこちらをみつめ、「いま、(社会調査) データ・ライブラリーを創ろうとしているんだ。手伝ってもらいたい」と、おっしゃった。その場では経緯が分からず、ただ大先生の前でうなずくだけであった。その年度末に林先生は研究所を退官なさり、私自身は公募審査を経て助手として入所することになった。

あとで考えてみると、Irvine での恩師、印東太郎先生が林先生にお手紙を差し上げていたのであろうと推察される。印東先生も行動計量の重鎮として林先生が頼りになさっていたが、60歳を前に米国に渡り、直接には学会の活動から離れたものの高根氏、西里静彦氏、鮫島史子氏とともに海外で「行動計量学」をひろめ、功績賞を受賞されている。印東先生は名誉会員でもあり、林先生と同様、生涯現役の人生を送られた。学部卒業後、留学を模索していた私に印東先生を御紹介くださったのは、学会草創期のメンバーの一人、丸山久美子先生であった。

学生時代、「統計学」で教官への研究協力や後輩の大学院生の指導で給与を得ていたものの、自分ではあまり理解できた気がせず、嫌いなものであった。しばらく様子を見て、本来の「数理心理学」に近い研究職に移ろうと思っていたが、入所直後、退官されたが「生涯現役」の林先生の国際比較調査とデータ・ライブラリー創設活動をお手伝いすることになった。各国の大先生との間で通訳など、お手伝いするなかで、統計学の大先生も統計学が「分からず」、それ故にその後の「数量化理論」の開発に繋がったのだと知った。数学を用い、一見、科学を装っているが、実はその実践的論理があやしい数理統計学への反動として、「統計数理」、「数量化理論」、そしてその延長上に「行動計量学」、「多次元データ解析」、「調査の科学」、そして今日の「データの科学」が発展してきたのであった。現実社会の重要な課題を、データの収集計画、収集、解析、政策立案への基礎情報提供など、全体的視点から、実証的な統計学の活用を意図する学問が成立、発展してきたのであった。

[理事、事務局長、1992年度（第7回）優秀賞受賞]

独学にも行動計量学会とい師匠あり

足立浩平

大阪大学大学院人間科学研究科

「文科系と理科系」という区別は、「系間分散」より「系内分散」の方が大きいように思えてよくありませんが、あえて使うと、私は、文学部というどっぷり文科系の学部を卒業して、今は、「行列をひっくり返したり、パカッと分けたり」する理科系的と思えることに美学をおぼえています。振り返ると、大学入学時から4段階で大きく変わったものです。第1段階は入学時で、「文学部なので、もう数学はやらなくてよい」と喜んでいました。次に第2段階は、「文学部でも心理学を専攻したため統計法が必修で、ちょっとは厄介だな」と感じた段階です。そして、心理学を勉強するうちに、なぜか、「心の中の過程を数理的に表現する分野」に興味をおぼえたのが第3段階です。そして、最後の第4段階は「心理学そのものではなく、そのデータを分析するための統計手法」に興味に至りました。以上の4段階で「興味が大きく変わった」というべきか「自分の興味を発見するのに長い時間がかかった」というべきか判然としませんが、あまり数学が得意でなかった人間が、いつの間にかサイコメトリックスなる数学をベースにした学問に惹かれたのは不思議です。この経過は、「ストレートに美味しい食べ物」から、たとえば鮎寿司のように、最初は臭くてとても好きになれない「酒のつまみ」に、嗜好が移っていくことにも似ているように思われます。

このような次第で今は、サイコメトリックスで発展する多変量データ解析法を研究していますが、上記の第3と第4段階では、独学で勉強したつもりです。しかし、「独学の影にも師匠あり」で、この師匠が行動計量学会でした。学会の諸先輩が書かれた論文や書籍を通して、間接的に指導をうけたと言えましょう。行動計量学会に入会したのは1986年で、初めての大会での発表は1988年。心もとない発表で冷や汗をかきましたが、若い方には「心もとない発表での冷や汗」をどんどんかいてほしいと思います。この前後に大きな進歩をとげることができると思うからです。そして、1992年以来欠かさず大会で発表しています。こうした口頭発表に際してのコメントや質疑応答、および、投稿した論文の査読結果を通して、さらに勉強させていただきました。今後も生涯現役プレイヤーを目指して、発表、および、最近とだえがちな論文投稿をできるだけ続けたいと思います。

最後に、日本行動計量学会の良い点を述べたいと思います。幾つかありますが、フレンドリーな雰囲気当学会の一番の長所と思います。理論から幅広い応用までテーマのスペクトルが広い学会でありながら、大会では、分野や年齢の違う参加者どうしが気さくに話し合い、和気あいあいとしている雰囲気は、他の諸学会と比べて、大きな長所と思えます。もう一点挙げると、ちょっと視点が変わりますが、欧文誌の「Behaviormetrika」はとてもよい名称と思え、この名を考え出された先輩方に感謝しています。というのも、造語ベースのために、「Journal of the Japanese Society ...」と限定が着かず、最初から国際化を目指せる名称になっているからです(ときに「Biometrikaに論文を載せたのですか」と間違われて嬉しくなることもあります)。以上、原稿締め切り間近に、思いつくままに書き綴り、まとまらない内容になりましたが、35周年と十分な年月を経た行動計量学会のさらなる発展に向けて、これからもお世話になりながら、その分、恩返しにも努力していきたいと思えます。

[理事、1997年度(第12回)優秀賞受賞]

私の論文が行動計量学会の学会誌に最初に掲載されたのは1982年であった。爾来四半世紀、2008年の現在に至るまで「行動計量学」に8編とBehaviormetrikaに3編の計11編の論文が掲載されている。この数は、私が所属する日本の統計関連諸学会のうちで最多であり（第2位は応用統計学会の8編）、その意味では日本行動計量学会が私の主たる研究活動の場といえるであろう。

8編の「行動計量学」の論文のうち、『コンピュータ指向型データ解析の新手法』（1992）、『非線形手法と行動計量学 - 統計学の視点から -』（1997）、『データマイニングと知識発見 - 統計学の視点から -』（1998）、『「処置前 - 処置後」データの解析と平均への回帰』（2002）の4編は「展望」などの総合報告的なものである。その時々で自分が興味ある研究課題について勉強し、その成果を発表する場を与えていただいたという意味で、学会には非常に感謝している。これを見ると、その当時興味を抱いていた対象が懐かしく感じられる。もっとも、これらのテーマは今現在でも私にとって重要な研究対象であり続けてもいる。

上術の11編の論文のうち、『ランキングの信頼度評価 - 2002 FIFA ワールドカップの結果分析 -』（2002）は私の論文の中では異色である。表題から察せられるとおり、日韓同時開催となった2002年のサッカーワールドカップに題材を取った論文である。御他聞に洩れず、この年私にもわかサッカーファンとなり、熱心に試合をテレビ観戦すると共に、各試合での得点の一覧表を作り、サッカーの得点がポアソン分布で近似されることなどを確認していた（稀な事象ですからね）。この論文の内容は、FIFA ランキングと実際の試合結果との関係进行分析したものである。この年は、FIFA ランキング2位のブラジルが優勝したのであるが、ランキング1位のフランスが予選で敗退し、22位のトルコ、42位のセネガルの活躍が著しい回であった。論文の中では番狂わせ度なるものも定義し、それによると番狂わせ度1位はセネガル、2位はフランスであった。ブラジルの番狂わせ度は32位と出場チーム中最下位でランキングどおりの勝ちを収め優勝したのであった。番狂わせ度が下から2番目のチームはトルコであり、やや意外な結果と思えたが、よく調べてみるとランキング下位のチームには勝ち、上位のチームには負けていることがあとで判明した。数量化によりものごとの実際がよく見えたという好例であるという意味で、まさに行動計量学的な結果であるといえよう。

ところでこのワールドカップ論文は、多分レフェリーの方々には誰が書いた論文かが分からなかったのではないかと推察する。多くの場合、たとえ著者名が消されてあったとしても、論文内容や参考文献などから投稿論文の著者は見当がつくものである（狭い世界ですから）。ところがこの論文の場合、私のそれまでの研究とは全く異なる内容であり、しかも学会発表も一切していなかったため、著者名の推測は多分出来なかったのではないかと。もう1度くらい、誰が書いたのか分からない論文を書いてみたい気がする。

[理事、1994年度（第9回）優秀賞受賞]

若い研究者がイキイキ活動できる学会

富山 慶典
群馬大学社会情報学部

行動計量学会は、わたしが初めて入会した学会です。大学院修士課程へ進学した時期とほぼ同じだったと思います。一人前の研究者になりたいという夢を持っていたわたしにとって、イキイキと活動されている多くの研究者に出会えたことは、幸運であり幸福でした。そのような会員から知的な刺激をいただき、研究活動と学会運営のイロハを学ばせていただきました。

研究活動のはじめの一步は、学部の卒業論文の内容をまとめ直した口頭発表でした。いまレジュメを見ると、冷や汗がでます。しかし、フロアから建設的な多くのコメントを頂戴しました。それらを踏まえて、内容と形式への推敲を重ねに重ね、行動計量学に投稿することができました。レフェリーからは、きめの細かい“教育的な”審査結果をいただきました。それをにらみながら改稿し、投稿論文は格段に良くなりました。口頭発表からレフェリーとのやりとりまでの過程を通じて、審査付き学術論文とはどのようなものを学びました。その論文が掲載された学会誌を受け取った日の夜は、それと一緒に寝ました。それほど嬉しかったです。こうして、口頭発表を6回おこない、行動計量学に3本とBehaviormetrikaに3本の論文をそれぞれ掲載していただいたときに、学会賞の制度が新設されました。第1回学会賞（優秀賞）の受賞は、専任のポストを得ていなかった当時のわたしにとって、大きな励みとなりました。

学会運営のはじめの一步は、欧文誌の編集委員でした。論文を執筆し学会誌に投稿しているだけの会員のときは、投稿論文に対する審査結果の返ってくるのが遅いとか、レフェリーからのコメントが意味不明だとか、いま思えば大変に身勝手な不満ばかりを抱いていたように思います。しかし、編集委員になって、学会誌に論文が掲載されるまでには、じつに多くの研究者がさまざまな形でかかわっていることを初めて知りました。投稿論文の中には、たとえば多くの誤字脱字を含むもの、図表番号がでたらめに近いもの、本文中に引用している文献が文献リストに含まれていないもの、そして従来研究とのかかわりの中で投稿論文が明確に位置づけられていないものが決して少なくないのです。このような論文に対しても、レフェリーや編集委員は多くの時間をかけて丁寧にコメントをしているのです。そのあと、和文誌の編集委員も務めさせていただきましたが、欧文誌のときと同じでした。こうして、いずれの編集委員会でも、わたしがご教授いただいたように若い研究者たちの役に立ちたい、という想いで活動いたしました。

最近、所属学部に関連する学会の立ち上げや運営へのかかわりと、わたし自身の研究関心の広がりなどが原因で、行動計量学会での諸活動が少なくなってしまっています。それゆえ、回顧的な内容にさせていただきました。行動計量学の発展を担うことはもちろんのこと、若い研究者がイキイキ活動できる学会であり続けて欲しいです。

[1986年（第1回）優秀賞受賞]

本学会の春の合宿セミナーは大学の若手研究者の方々に評判のよいセミナーです。もともと複数のゼミがゼミ合宿をジョイントで開催したのが始まりなので、交流の機会も含めて極めて教育的に運営されています。近年では産業界からの参加者が3分の1くらいを占めて、ますます賑わいをみせていますし、学会の会員を増やす機会ともなっています。

私は多摩大学で開かれた第11回春の合宿セミナーで全体講義を担当させていただきました(2008年3月29日)。「調査をめぐる今日的課題」という演題で、近年の産業界の動向と、その結果生じたマーケティング・リサーチの新しい課題を展望しました。提供した論点のひとつに仮説検証の限界があります。

マーケティングは、課題解決志向であり産業活動と強く結びついた実学的な分野です。実務の世界では仮説検証といってもアカデミックの世界とは異なり、仮説の否定を想定しないという one-sided な認識の人がいます。調査結果を自分に都合よく解釈することもあれば、それが無理なら調査そのものを否定してしまう、という事態さえ起きます。なぜそういう事態が起きるかを理解するには、マーケティングの目標を理解する必要があります。たとえば企業が「当社の新プロジェクトは成功する」という仮説のもとに事業を計画し資金を投入してきたあげく、導入直前に市場性が否定される調査結果が出たとしましょう。仮説は支持されませんでした、と否定するだけでは意味がありません。プロジェクトをどう修正すれば成功できるのか? という処方を見出さなければ課題解決に結びつかないからです。マーケティングに求められているのは患者への死亡宣告ではなく治療法なのです。

今日の成熟市場においては誰もが考えつく自明な市場はすでに開拓されています。未開拓であり、市場性があり、事業側のリソースの範囲内で実現可能であるという3拍子そろった新製品、新規事業を発見することは容易ではありません。マーケティングの課題は「難題」そのものです。

そういうわけで常に難しい課題に悩み、何か实际的に役立つ方法はないかと先輩諸科学から学んでいる、というのが現在のマーケティングの立ち位置ではないかというのが正直な感想です。マーケティングは顧客の価値創造などという、とうてい単一の学問だけではカバーできそうもない問題を扱っているのです。

日本行動計量学会の大会では1980年代から徐々にマーケティングの研究が発表されるようになりました。マーケティングと銘打ったセッションが始まったのが1998年からで、その後はほぼ毎年マーケティングのセッションが開かれるようになりました。2004年以降はマーケティング関係で複数セッションが組まれようになり、すでに定番化しています。

学会の草創期から、毎年の大会には企業のマーケティング部門の方とか、製品企画や広告担当の方々が大勢参加されてきました。企業に所属されている学会員の方が、今日の産業界がかかえる新しい課題をアカデミアンに教示してくださることも貴重な貢献です。その意味で、産業界は学会にとって重要なステークホルダーであると考えたべきではないでしょうか。産学が協働できるリアルな機会を提供することが大会のひとつの意義であろうと思います。

[理事]

行動計量学に学ぶ

岸野 洋久

東京大学大学院農学生命科学研究科

私が行動計量学会に入会させていただいたのは、90年代半ばでした。統計数理研究所で10年、海洋研究所で3年を過ごした後に、教養学部のある駒場に移って間もないころでした。私の中で行動計量学会は、当時の駒場の生活と重なり合って思い出されます。

海洋研究所では、魚類、底生生物、微生物にいたる海洋生物を調査し、海流と海底地質、大気と海洋の相互作用を調査し、海洋を構成する化学物質を調査します。当時、外洋を調査する白鳳丸と日本周辺海域を調査する淡青丸の2隻の船を擁しておりました。所内外からの調査の申請をまとめ、地質の研究者と生物の研究者が組むなど、乗合所帯による調査航海を組みます。互いに助け合ってそれぞれの分野のデータをサンプリングします。

駒場では、法学・政治学、経済学、社会学の先生方が活躍されておりました。多くの先生方は、授業時間を除いて自宅で研究するため、建物は普段静まり返っています。ですが、メールボックスに配布された先生方の出版ほやほやの書籍を見るたびに、心臓がきゅっと締められました。式も数字もまったくないのですが、膨大な先行研究を踏まえ、切れ味のよい視角と緻密な調査に裏打ちされた文章に、2 - 3のポイントを抑えた表を付すことにより、見事に説得力を獲得します。

海洋研究所では、海の新知見を提供して初めて研究の価値が認められます。駒場の国際社会科学専攻では、社会と制度に切り込む研究が評価されます。固有の分野で核心に迫る情報を自分で提供しない限り、存在意義を問われるという、それまでは経験しなかった不思議な気持ちに、しばしばなりました。行動計量学会への入会は、こうした時期だったのです。特定の手法にとらわれずに、さまざまな専門分野の独自性を尊重しつつ、計量的方法を通じて人間の行動と社会を理解する、という行動計量学会の理念に共感しました。

当時、紙のリサイクルが深刻な社会問題となっていました。古紙の供給過多から、価格が暴落したのです。各家庭で環境のために良かれと願って行ったりリサイクル行動が、はかrazも回収業者の生活を脅かす結果になったのです。そこで、紙リサイクル社会を構成する国内外の主要なアクターを尋ね、国内外のトイレットペーパーのブラインドテストを組み込んだ消費者意識調査を行いました。困難の背後にある原因として、消費者行動の矛盾と社会システムが浮かび上がってきました。

駒場から弥生のキャンパスに移り、いまではウイルスの適応、植物の除草剤耐性、昆虫の殺虫剤抵抗性など適応のメカニズムを、分子進化の視点で捉えることを研究の柱にしています。産業社会になって、私たちは周りの生態系に大きな淘汰圧をかけています。ですが、見えないところで生態系は適応し、時として私たちの脅威となって襲いかかっています。こうした問題を克服することに貢献するような研究ができればと願っています。主軸を人間の行動から人を困む生態系に移しましたが、私の中では行動計量学の持つ理念がいまでも眩しく光っています。

[1996年度 (第11回) 優秀賞受賞]

日本行動計量学会35周年おめでとうございます。学会運営にご尽力されてこられた先生方に心から敬意を表します。

私自身は、いつ、日本行動計量学会に入会したのか定かな記憶がありませんでした。調べてみると、どうも、平成3年だったようです。そうすると、学会の歴史の中で半分くらいの期間は会員として過ごしてきたことになります。正直、実感が湧きません。何らかの委員として学会運営に携わった経験がないこともあって、自分の中では今でも「新参者」という意識が強いのです。

私にとっては、平成3年に入会、という事実は重要です。それは、私自身が初職を得た直後のタイミングだったことを意味するからです。日本行動計量学会の中心を担う先生方のうちの幾人かには、学生の頃からなじみがありました。最初に教科書や参考書でお名前を知り、新書などでお顔を知り、授業で実際にお目にかかって、その事実に感動する、といったが第1段階です。そこから面識を経て、徐々に親しみを感じ、お人柄をよく知るようになって個人的にファンになる、というプロセスを経ていたように思います。研究の中身ももちろんですが、決して教科書には書かれていない、諸先生方の豊かな個性に魅了されていたことを懐かしく思い出します。それなのに、学生の間には入会手続きを取っていなかったという事実は、自分では少々意外でした。一人ひとりの先生方は大好きで、何かと理由をつけてまわりついたりしていたのですが、学会のメンバーとしてお仲間に入れていただくことには、どことなく気後れを感じていたのかもしれない。

思いがけず、平成2年12月に大学入試センターに職を与えられ、そこから、大学入試の研究をすることになりました。そこで初めて何らかの覚悟をしたのでしょうか。それが、入会の動機だったのではないかと自らの心中を推測する次第です。あれから17年以上が経過して、構成メンバーも少しずつ変わっていったにもかかわらず、日本行動計量学会とは適度の距離感で心地よい付き合いをしていただいています。

大学入試の分野に携わってみると、研究のスタンスや捉え方にもよるのでしょうか、決して構造化されない、現場での泥臭い問題との格闘の連続のように感じます。問題の個性が強いので、どうということが行動計量学の分野への貢献になるのか、ここしばらくは考える余裕もなかったように思います。せめて、複雑な条件の絡み合う中での現実的な問題解決に向けて日本行動計量学会で発表される諸研究をどのように生かしていけるのか、そういったことが自分の課題になってくるのでしょうか。次々と新たな課題に追われる日々の暮らしの中で、少しは落ち着いて考える時間を作らなければならない、と自省する次第です。

最後になりましたが、日本行動計量学会の益々の発展を祈念いたしております。

[2007年(第22回)優秀賞受賞]

私の研究と行動計量学との関わり ―森林から人間へ

鄭 躍 軍

人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

私は、もともと林学を学んで、種類、樹齡、大きさ（樹高と胸径）などの異なる木々が同じ空間で競り合いながら共生することにより、育まれる森林の成長過程及び収穫量の推計を研究していました。たとえ同じ時刻に発生した同じ樹種の苗木にしても、生まれ付きの競争力や与えられた環境状況、周辺の樹木本数の多少などの違いにより、それぞれの木はその成長過程が異なり、非常に複雑になることが大きな問題です。私はかつて木々の大きさや空間上での相対的な位置関係を基に、単位面積当たりの木々の成長軌跡をマルコフ過程で推測することに熱中しました。これは、樹種も大きさも同じである木々が次の時点にどのくらい大きくなるかということは、確率現象としてしかとらえないからです。言わば、これは森林社会という。

一方で、人間社会は多様な民族、言語、文化などをもつ人々から構成されますが、複雑な構造をもつという点では、森林社会も人間社会も同じです。しかしながら、人々のものの見方、考え方、そして行動意向などの人間行動を科学的に測ることは、木々を測ることより、はるかに困難です。統計数理研究所に就職したことをきっかけに、私が社会統計学的研究に関心を持ち始め、研究の重心を社会調査データの設計、収集と分析に関する研究へ転換しました。特に、抽出名簿の閲覧が制限されている今日の状況に備えて、多様な調査環境に適応した標本抽出法と質的データ解析の研究に焦点を絞ると同時に、人々の価値観や環境意識などの具体的な社会調査を行動計量学の観点から企画・実施しています。

社会調査法に関する理論的研究では、調査環境の変動と多様化に適応した個人標本の抽出手法を実証的に開発し、偏りの少ない標本抽出法を考案しています。特に、住民基本台帳や選挙人名簿などの抽出の枠の代わりに、国勢調査データ及び住宅地図を基に、個人を抽出するためのエリア・サンプリングを構築し、関連する調査票の設計、標本誤差、非標本誤差などの諸問題を検証しています。

データ解析法に関する研究では、日本人の国民性調査、価値観国際比較調査、環境意識調査などのデータを用いて、社会現象間の関連性、因果関係、意識構造の有様を解明するためのデータ解析法を模索しています。特に、調査データによる国民性、価値観、環境意識と人々の社会、文化、経済的背景などの人口統計学的要因との関連性の解明に力を注いでいます。

国際比較研究では、異なる社会に置かれる人々の価値観や環境意識などの構造的特徴を探索しています。とりわけ、東アジア諸国の価値観に主眼を置き、儒教文化圏の歴史的変容を分析し、異文化の理解と国際協調の一助となる情報を集積しています。一連の研究を通して、欧米、日韓中における国民性に関する異同の有様を明らかにし、環境意識、価値観などのような具体的な概念を実践的に確立すると同時に、「データを中心に現象を解明する」というデータサイエンスの視点から、国・地域間の意識の形成メカニズムを探究しています。

[2006年度（第21回）優秀賞受賞]

本物の調査者との出会い

松田 映二
朝日新聞社世論調査センター

『行動計量学』第29巻第1号(2002)に、「『電話調査の精度』その1」と題した特集が掲載されている。その中で「朝日新聞社のRDD調査について」と題して論じさせていただいたことが、私と日本行動計量学会との最初のかかわりである。当時の理事長であった杉山明子先生から執筆依頼があったのだが、仕事に追われてなかなか時間がとれず、夏の蒸し暑い締め切り当日の夜に先生のご自宅まで原稿を持参した。杉山先生は、この特集について『行動計量学』第30巻第1号(2003)の「『電話調査の精度』その2」の冒頭で、急速なコミュニケーション手段の変化に伴う電話に対する人々の意識変化もあり、改めて電話調査の研究が必要だという旨の企画意図を述べている。

1998年参院選、2000年総選挙では、選挙人名簿から抽出した後に電話帳で番号を調べて電話する方法で調査をしていた。そのため、電話番号非掲載者に調査できず、都市部の無党派層の投票意向を大きく読み誤った。その反省から、非掲載者をも取り込み有権者のカバレッジを高めるRDD法を導入したわけである。その後の選挙予測の精度は、面接調査時代よりよくなっている。先のRDDの論文は、初代理事長である林知己夫先生が2002年8月に亡くなる直前に投稿したものである。ちょうどそのころ、林知己夫先生に日本医科大学の救急病棟でお会いし、2001年参院選の予測をRDD調査でピンポイント的中させたことや、次の総選挙をRDD調査でどう予測するかという話をした。いま解散は無いだろうからしばらくは夏休みとして、秋から本格的に準備を始めようということになった。帰りに先生は一本人差し指を立てて、ニコリと笑われた。次の総選挙でも1番をとろぞ(他社を凌ぐ一番いい予測結果を出すぞ)ということだった。林知己夫先生は、とにかく選挙が好きだった。調査が好きだった。RDD調査開発の際には調査会場まで来られて運用の様子を見学・体験された。持論である「実証的な確率論」と、自ら調査にかかわる姿勢を教えられた。

調査にかかわる多くの先生と、じつに多くの深い縁のあることを痛感している。『行動計量学』第35巻第1号(2008)に「郵送調査の効用と可能性」と題して郵送調査は高回収、高品質な結果を得る可能性のある手法だということや、そのための運用上の注意を論じさせていただいた。この取り組みにあたって、『郵送調査法』の著者である林英夫先生に多くの助言をいただいた。林英夫先生も、杉山先生が企画した『行動計量学』第23巻第1号(1996)の特集「社会調査の精度」で「郵送調査法」と題した論文を載せている。この論文のおわりで林英夫先生は、「郵送調査法はマイナーな代替的方法ではなく、独自性を有するひとつの調査法である。また、返信率向上のための工夫の余地が多分に残された期待のもてる調査法であり、古くて新しい調査法であるともいえる」と述べている。他者からのいわれなき中傷をものともせず、郵送調査の可能性を実証し続けてきた林英夫先生の研究者としての姿勢に感銘を受けた。この学会には本物の調査者がいる。

[2007年度(第9回)奨励賞受賞]

電話調査と行動計量学

城川美佳

東邦大学医学部社会医学講座

私が、日本行動計量学会に参加させて頂くことになったきっかけは、電話調査である。1987 - 8年だったと思う。当時、米国 CDC (Centers for Disease Control and Prevention : 疾病予防管理センター) が人の疾病と生活習慣や健康関連行動に関する調査を電話で行っていた。BRFSS (The Behavioral Risk Factor Surveillance System) という、1984年から現在まで継続して行われているこの調査で用いられている調査手法は Random Digit Dialing (RDD) 法であった。その頃は、RDD 法は日本であまり知られておらず、実際に RDD 法を利用した社会調査も行われていなかったように思う。そこで、所属講座の教授が私の研究テーマとして RDD 法を提示してくれたのだった。

RDD 法どころか、社会調査法自体をほとんど知らなかった私の右往左往ぶりを見かねて、日本行動計量学会の社会調査研究会に行ってみないかと誘っていただいた。杉山明子先生が主催されていた社会調査研究会では、社会調査に関する様々な情報や課題が検討され、また海外の調査に関する情報の提供があった。私が所属する医学・保健領域では何の問題意識も感じずにいる調査や分析手法のそれぞれに裏打ちされた経験と知見があること、実は医学・保健領域のデータ自体に特殊性があり利用されている分析手法があること等、私にとっては知らない事だらけで、「井の中の蛙大海を知らず」(というか、私の専門研究領域である公衆衛生学自体「大海」のようなものなので、「大海の中の蛙宇宙を知らず」と言った方が良いかも知れないが)のような体験だった。しかし一方で非常に刺激的な時間、研究者にとっては幸せな時間だったと思う。

この社会調査研究会に入れて頂いたことがきっかけで、日本行動計量学会に入会させて頂き、RDD 法に関する研究発表の場をいただき、諸先輩の貴重なご意見をいただく事ができた。忘れられないのは、RDD 法の調査手法について発表させて頂いた日本行動計量学会第27回大会の時、学会会場の倉敷市民会館の食堂で林知己夫先生と杉山明子先生からご指導いただいたことである。そのとき食べた昼食のメニューや味は全く覚えていないが、大先生お二方を占有してお話しさせていただいたことは、今でもよく覚えている。医学領域では普通に行われている結果の調整に関する事で、この両先生からのご意見が2005年から行っている社会調査研究会のきっかけになった。

社会調査研究会では、社会調査の質について検討している。現在、調査が花盛りである。調査環境の悪化が言われている中で、どうしたらよりパワーのある調査結果が得られるか、そのために必要な事は何か、過去の知見を基に現在の状況に見合った調査設計や実査手段、分析方法を検討する必要があると考える。

2006年には肥田野直・水野欽司賞(奨励賞)を頂戴し、身の引き締まる思いであった。最初に「君、やってみなさいよ」と言われて始めた社会調査に関する研究は、未だ私にとって未知の領域が大きい大海である。これまでにご指導頂いた諸先生への感謝を胸に、この大海での航海を続けたいと思う。

[2006年度(第8回)奨励賞受賞]

行動計量学会との関わりと今後

広田 すみれ
武蔵工業大学環境情報学部

思い返すと、行動計量学会との関わりは割合偶発的に深まっていった。最初に知ったのは約20年前院生の頃、指導教授の岩男壽美子先生が発表された際である。確か価値観の構造の国際比較研究のご発表だった。だが、当時私は専門のリスク研究を社会心理学会や心理学会に発表するだけで精一杯、行動計量学会は遥か遠い存在だった。その後、どういう訳か統計学を教えるのが主になってしまったので入会はした。が、依然行動計量学会は私にとっては本の背表紙でお名前をしばしば拝見する「雲の上の先生方」がいらっしゃるところで、私のようなちんぴらには到底恐くて参加・発表のできる場ではなかった……正直なところ。

ところが最近環境が変わり、岩男先生にお目にかかる機会が増えた。で、「受刑者のデータの分析結果、行動計量で発表してね」とのお言葉により、光栄にも先ごろ初めて先生と共同で発表させていただいた。これが行動計量学会での大変遅い発表デビュー。その上、早大院で同級生だった前田忠彦君に「広報委員やってよ」と言われてお手伝いもすることになり、それが契機でようやくコンスタントに参加することとなった。

そこに至り、遅まきながらようやくわかった。行動計量学会は私にとって非常に興味深いところだった、ということが。行動計量学会は学際性が高く、実社会の方も多い。その中には、自分の専門や本や論文だけではわからなかった新しい動きや分析のヒントがあちこちにある。Webの発展と共に利用可能なデータの形が変わっていく中、手法の変化を予想してはいたが、先日の学会では分析が大きく変わっていく強く新しい流れをひしひしと実感した。振り返って自分の専門の学会では、確立された手法の利用が主でそれ以上多くは望めない。その上、近頃は「質的」研究が大流行で、どうも分が悪い。しかし、一方で社会現象についてはマルチエージェントシミュレーションや複雑ネットワークといった手法で物理学者や経済学者が多くの成果を挙げつつある。このように人間行動や社会現象を数量的な新しい手法で切り込めることは発展のひとつのポイントであり、そういった知識がなければ今後他分野に到底対抗できない。その手がかりが得られるのは、関係学会のうちたぶん行動計量学会以外には無い。また、測定や標本抽出などの問題について、真正面から取り組んだ知見が得られるのもありがたい。……叱られようが恥をかこうが、結局面白いものは面白いのだ！

私は数的手法の凡庸なユーザーに過ぎないし、残念ながら菲才なため研究上は行動計量学会で大した貢献は到底できそうにない。が、学会の意義については十二分に感じることから、その運営のお手伝いに加えていただいていることを光栄に感じている。

…しかし、それにしてももうちょっと早くから積極的に参加しておけばよかった、しまった、惜しいことをした、せめてこれから、というのが現在の私の感想である。

[広報委員]

日本行動計量学会の良き動きとともに

若山大樹
駒澤大学経営学部

本学会設立35周年記念誌刊行というこの機会に、本学会と関わらせていただく中で気付かせていただいた本学会の良き伝統について、少し述べさせていただきたく存じます。

第1回春の合宿セミナー参加が入会のきっかけ

本学会入会のきっかけは、大学院生のころ指導教官から紹介いただいた第1回春の合宿セミナーへの参加であり、講義担当の先生から入会申込書をいただいたことにあります。セミナーの内容は統計関連科目をしっかりと勉強してこなかった初学者に配慮したものであったと存じます。残念ながら講義の内容は記憶に残っておりませんが、参加学生の方々に車で近くの海へ遊びに連れて行っていただいたことはよく覚えております。本学会への入会は春の合宿セミナーへの参加に由るところが大きいわけですが、セミナー主催者の方々が非会員初学者にも門戸を広げていただいたことと、潜在的な需要のある人々がセミナー開催を知り参加しやすいようにご努力いただいたこと、潜在的な入会希望者が入会関連書類を入手しやすいようにご配慮いただいたことのお蔭であると感謝しております。

はじめての学会発表

大学院2年目に指導教官と連名で初めて学会発表をさせていただきましたが、本学会が私にとって初めての学会発表でした。また本学会会員が多く参加する国際会議 IMPS2001でも報告の機会をいただきました。当時不十分な発表内容にもかかわらずご参加の会員の方々からは温かいコメントや建設的な質問をいただいたことが印象に残っており、大学院生として最初に発表させていただいた学会が本学会でよかったと感謝しております。本学会のように、院生の発表にも耳を傾けていただけることや暖かいコメント、建設的な質問をいただくことができる学会は、若手を潰してしまわずに若手を育てることにつながると存じますが、そのような学会はそれほど多くないのかもしれない。

はじめての学会委員会活動

広報委員会インターネット小委員会委員のお役目をいただいたのは、研究職へ就職してちょうど3年目のことであり、今年で3年目になりました。学会発表のところでも書かせていただきましたが、本学会には若手にも委員会活動のチャンスを与えてくださる点が本学会の良き特徴であると思います。まだまだ委員のひとりとしてお役に立てるところまでには至っておりませんが、日々数多くの会員の方々のご好意で成り立っている学会活動を拝見し、色々と勉強させていただき貴重な機会を頂いております。

まとめ

最後にまとめさせていただきますと、本学会の春の合宿セミナーは毎年開催されて11年目になりますが、本学会のこの企画（動き）は会員以外にも広く教育の機会を与えるという意味で社会に貢献するものであり、また、本学会は学会発表や学会委員会活動において若手にチャンスを与え、若手を育てる学会としての良き伝統があります。本学会設立と同じ1973年生まれの私がこういったことを申し上げるのは大変恐れ多いことですが、本学会の持つ特色ある良き伝統がこれからも受け継がれ根付いていくことが、本学会発展のために大切なことなのではないかと思います。

[広報委員]

これまで、多次元尺度構成法 (MDS) とクラスター分析法における多元データの分析方法について研究を行ってきました。これらの研究をとおして、人々の行動の背後に潜んでいる現象をいかに計量化して、あるべき本来の関係を視覚的に表現するかという課題に取り組んできました。MDS は布置を求めることでデータの構造を空間的に表現し、クラスター分析法はクラスターを求めることでデータの構造を離散的に表現します。多くの場合、両者は同じ近接度データに対して適用可能であり、同じデータのそれぞれ異なった側面を明らかにする相補的な手法であるといえます。そのため、両者はできる限り併用することが望ましく、併用して解釈を行うことは、データの構造を解釈がする上で有益であると考えられています。近年の情報技術の発展にともなって、MDS もクラスター分析法も、多くのデータが入手可能となり、多くの分野への応用が一層期待されています。そして、対象間のあるべき本来の関係を表現するために、非対称データや多元データなど様々なデータ形式に対応したモデルについての研究が行われています。

通常の MDS やクラスター分析法では、多元データが分析される場合、データから2つの対象間の関係に基づく距離を算出することで分析は実行されます。本来は3つ以上の対象間の関係も2つの対象間の関係に置き換えることなく、直接的に表現することによって、はじめて対象間の本来のあるべき関係が表現可能になります。

しかし、実際は、コンビニエンス・ストアでの購買行動のように状況により購買点数が限定される状況も考えられ、全ての対象間の関係を考慮して人々が行動を行っていると考えるのは不自然です。全ての対象間の関係が考慮して分析を行う必要はないとも考えられます。したがって、現実のデータには、2つの対象間の関係で説明できる場合、3つ以上の対象間の関係でないと説明できない場合の双方が存在しているといえます。そのため、多元データを分析する際には、データ内の情報を整理して、重要な情報を抽出して、その傾向ごとに計量化を実行することが重要となります。そこで、現在、考慮すべき対象間の関係の上限を設け、その条件に基づいて多元データを分析することのできるモデルの研究、開発を現在行っています、さらには、多元データの非対称性を分析することのできるモデルについての研究は少ないことから、今後は、非対称な多元データを分析することのできるモデルへの拡張を目指しています。

最近の市販のソフトウェアにおいても MDS やクラスター分析法を実行することが出来るようになってはいますが、分析できるデータや利用できる手法は限られたもので、その使用方法についてもあまり触れられていないなど多くの制約が存在しています。今後はより幅広いユーザーの方々に利用してもらえよう、これらの問題の解決に努めながら、データの計量化の必要性や重要性を伝えていけるように励んでいきたいと考えています。

[2006年度 (第8回) 奨励賞受賞]

日本行動計量学会に参加して

竹内光悦
実践女子大学人間社会学部

私が日本行動計量学会に参加し始めてちょうど今年で10年になります。まだまだ若輩者であり、記念誌への記事など不釣り合いと思いましたが、現在の私の状況や今後の抱負をお知らせすることにより、これまで以上に叱咤激励を頂けると思い、投稿いたしました。

本学会での私の最初の発表のとき、まだ博士後期課程に在籍中で、多変量解析の中でもクラスター分析に興味があり、クラスター分析手法を用いた際の分類結果の評価について研究をしていました。当時、理学系の大学院に所属していた私は、理論的な“きれいな”データを分析することが多かったのですが、本学会での発表を通じて、現実社会での“きれいな”と言えないデータを見聞きすることができ、このことは私の経験の中でも重要であったと感じています。特にその後体験した様々な社会調査で、調査データの分析を行った際にデータの多様性を知り、より様々なデータのタイプを考慮した解析手法や結果を評価する指標が必要であると考えていました。このことは現在取り組んでいる非対称データを分類対象とした非対称クラスター分析の私の研究にも影響を与えていると思います。

また近年では、教育やマーケティングなど応用分野にも興味を持ち、理論と実践の両側面での研究を考えています。特にここ1、2年の初等・中等教育機関における統計教育の変化は目覚ましく、ご存じの方も多いと思いますが、新しい学習指導要領においても統計が重要視され、ますます統計教育の発展が期待されます。この結果には本学会にも関係する諸先生方の貢献も大きいと思います。国外をみてもデータを用いた客観的根拠に基づく論証は重要視され、問題点を把握し、データ収集の計画をして、データを適切に集め、データを適切に処理し、それらの結果に基づく考察を行うこと、そしてさらなる問題点がないか問題把握に戻るという一連のデータ分析のサイクルについて、初等教育から指導し、特に単年度で終わるのではなく、各学年で少しずつレベルを上げ、スキルのスパイラルアップを目指しています。単なるデータをさわるだけではなく、このような目的意識を持ってデータにふれる問題解決力の育成は日本においても近い将来期待・実現されていくと思われれます。このとき、理論と応用の両視点での研究が多い本学会の貢献も大きいと思われれます。

本学会においても私は良き師、良き研究の先輩方、また良き研究仲間恵まれ、今日まで研究を続けられました。まだまだ力不足は否めませんが、微力ながら本学会の発展に寄与できればと思います。

[2002年度(第4回)奨励賞受賞]

日本行動計量学会35周年に寄せて

藤 井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

日本行動計量学会は、筆者が土木計画、交通計画で研究をはじめ、はじめて土木以外の分野の方々と接触を持つ機会をもてた最初の学会である。最初に日本行動計量学会に参加したのは、学位論文をまとめる前のことであった。筆者の学位論文は、アクティビティ分析、交通行動分析と呼ばれる研究分野で、交通計画を立てる折の基礎情報となる、「交通需要」を予測するために、一人一人の都市生活者の時空間内での行動軌跡を統計的に予測する技術を開発することを目的としたものであった。すなわち、筆者の当時の仕事は、文字通り、「行動計量」のモデルを開発することだったのである。

その中で、様々な分野の研究者にお目にかかることができた。統計学の先生方や、数理心理学の先生方、そして、意思決定に関わる心理学を研究しておられる先生方であった。言うまでもなく、分野が異なれば、研究の「目的」は大いに異なっている。上述の様に、当時の筆者は、「行動を予測する」ということを目的とした諸研究を行っていた一方で、心理学や統計学、数理心理学は、必ずしも「予測」を目的とするものではない。しかし、目的は異なっても、研究の対象は「人間の行動」であり、そのためのアプローチとして「行動を測定したデータ」を分析するのであり、そして、その分析の方法として「統計学」を用いているという点では、大いに重なりあっていたのである。そうした点から、行動計量学会の場に参加することは、筆者にとって大いに刺激となったのである。

とはいえ、やはり、目的が異なれば、「共同研究」を進めるというようなことは難しい。それ故、当時は、行動計量学会は「勉強」の場ではあっても、「議論」や「共同研究」の場ではなかった。筆者にとって、行動計量学会が議論や共同研究の場となったのは、やはり、研究目的を一にする共同研究者とご一緒する機会に恵まれたからである。学位を取る以前は「行動の予測」にのみ関心を抱いた研究を進めていた筆者であったが、学位取得後「行動の理解」に重点を置いた研究を進めようとしていた、そうした中で、行動計量学会に共に属していた竹村和久先生（当時筑波大学、現在早稲田大学教授）と研究をご一緒する機会に恵まれ、それ以降、行動計量学会が共同研究の場、となったのである。それ以来、「状況依存的焦点モデル」に関する研究をはじめとした、認知的で、統計的で、かつ、行動的な意思決定の共同研究をご一緒させていただき一方、社会的な要素や価値論的な要素も加味した多様な分野の研究者とご一緒する機会に恵まれるに至っている。こうした経緯を振り返るに、行動計量学会の場が、筆者の現在の研究生活の展開において極めて重要な位置を占めていたものと改めて感じ入る次第である。

[2005年度（第20回）優秀賞受賞]

第6部

これからの
行動計量学会に望む

日本行動計量学会の創立は、昭和48年9月3日。当時としては、珍しく学際的な学会のひとつとして誕生したもので、人文社会科学、理工科学の別を問わず、多くの人が熱意と大きな期待を抱いて参集したのです。その背景には、コンピュータが普及し、末端の研究者も気軽に利用できる状況が生まれ、統計的な解析法に伴う複雑で大量の計算が可能になったという情勢も手伝ったといえます。多くの人々は、使いたくても使えなかった、新しい高度な(?)分析手法によって従来とは異なる精密で豊富な発見が得られると大いに期待したものだと思われます。中でも数量化法や多変量解析は人気があり、実際、私が学会事務を担当していたとき、「多変量解析の学会だそうで、私も入会したい」という電話の入会申込みをよく受けたものです。確かに、本学会は、人間の行動現象に計量的にアプローチする方法論の確立を目標に創始したものであり、多変量解析的な種々の手法はその中でも重要な部分を占めていますから、そういう認識をもつ人が居ても当然だったのでしょう。

その頃から、本学会も15年を経過しました。現状はどうか。コンピュータも分析手法も社会にすっかり定着し、初期のような分析手法へのナイーブな期待や熱気が見られなくなった反面、本学会の諸氏が着実に手法研究の成果を各方面に提供してきた努力は高く評価されてよいと思います。また、分析手法の解説書の刊行や統計ソフト類の普及の面でも学界や社会に貢献しております。

では、現在の本学会の活動は順風満帆といえるのでしょうか。また将来に向けて新しい課題はないのか。過去の活動を振り返ってみる必要があると思います。

第一に、昨今の分析手法の研究は、数論的内容に重きを置き、現実の目的課題への有効性に対する関心が乏しいように、私は思うのですが、どうでしょうか。いかにソフィステケートされた手法でも旧来のデータ処理で得られる知見以上の新発見がないなら、意味がありません。だとすると、特定の問題とそのデータに即した解析方法を苦しくても開発する努力が必要でしょう。欲張った話ですか、少くともその気概をもって貰いたいと思います。

第二には、右に関連して、実際の現象に強い関心をもって欲しいということです。今日の社会は、稀に見る大きな変化に直面しており、解決すべき問題が山積しております。特に人文社会科学の分野では、多種多様なデータを駆使して有効な解析により難題を解明して行かなければなりません。反面情報化時代といいながら、調査ひとつ行うにも、プライバシー問題のように情報の秘匿・管理が進み、容易ではありません。

その意味で、私は研究者相互が連携して積極的に難課題にチャレンジして貰いたいと思います。とかく“数理”に関心が向うのは日本人に多い美意識のなせる習性であると思いますが、本学会が目指す“計量的方法論”とは、荒削りであっても現実の難課題に対抗できる科学的で統合的なアプローチを指すものと、私は考えます。

その意味でも、会員諸氏がいわゆるアクション・リサーチ、フィールド・ワークなどを通じて、分析手法以前の現象知識やデータ収集の知恵などの練磨を日頃忘れないよう、期待しています。

[会報45号(1988)巻頭言、第3代理事長、当時：理事・運営委員長・統計数理研究所、1988年度(第4回)功績賞受賞、1999年逝去]

行動計量学と多変量時系列解析

脇本和昌

行動計量学に、数量化をはじめとする多変量解析の手法が非常によく使用されるのは周知の事実である。その理由は、行動科学において生ずる問題が、主として多くの変量をもつ測定値の構造の解明を要求することによるものと考えられる。たとえば、日本の都道府県の平均寿命ひとつとってみても、その長短は、気温、食べ物、地理的条件、文化水準、医療状態といった多くの変量が複雑な形でかかわりを持っていて、その因果関係の解明はなかなか一筋縄ではいかない。

私が最近手がけている問題の中に、ふたつほど行動計量学と密接な関係をもつものがある。そのひとつは、小学生、中学生などにおける体力低下や、非行などに関する調査であり、約8千人のランダムサンプルによってその要因と考えられる項目をすべて盛り込んだ調査をおこない、多変量解析を駆使して分析してみたが、一度だけの調査ではあまり思わしい結果は得られなかった。

他のひとつは、18歳以上1万人に近いランダムサンプルにより、通勤、レジャー、買い物など生活行動圏に関する調査で、回答結果より、その行動パターンを推測するものである。たとえば、買い物圏ひとつとり上げて、それがどんな要因によって定まるのか、これまた一回だけの調査結果からだけではなかなか結論が出せない。

一般的に、行動科学に関する問題解決は、上手な計量をおこない強力な武器である多変量解析の手法を使用しても、一回だけの調査結果からだけでは、原因となる多くの変量と結果の間の因果関係の把握がむずかしい場合が多い。なぜなら、因果関係を示す多変量データは、多次元空間の点として分布し、それが時間とともに変化しているために、多くの点の分布の特徴的な「形」を時系列的に認識することに欠けるからである。

時系列的に多次元空間の点の形を認識するためには、調査そのものをくり返しおこなうことと、現在の多変量解析の手法に時間を導入し、時系列的観点から見直すことが必要である。したがって、行動科学における多くの未解決の因果関係を解明するためには、目的に合った時系列調査データを得ることと、多変量時系列解析の手法の開発が大きな鍵を握っている。現在でもこのような観点から問題解決に取り組んでおられるかたを見受けるが、規則的に時系列調査データを得ることは大変な労力と時間を要し、問題解決のためには想像以上の努力と忍耐を必要とする。しかし、これは行動計量学に携わる者の宿命であるように思われる。

今後も同じテーマを多変量解析の立場から、ねばり強く長期にわたって調査分析することによって新しい結果を求め続けて行きたいものである。

[会報24号 (1981) 巻頭言、当時：理事・岡山大学教養部、
1991年度 (第6回) 功績賞受賞、1993年逝去]

日本行動計量学会への感謝

村上 隆

中京大学現代社会学部・名古屋大学名誉教授

日本行動計量学会が創立35周年を迎えることを、心から喜びたいと思います。今、書棚から取り出してきた「行動計量学」創刊号巻頭の故林知己夫先生のご高説を拝読して、本学会がインターディシプリナリーな学会として、高い理想を掲げてスタートしたことを改めて確認いたしました。ただ、その後の学会の運営を見たときに、そうした理想は必ずしも実現したとは言えなかったように思われます。多くの会員は、自身のディシプリンを保持したまま学会に参加してきますし、その発表内容はどうしても本来のディシプリンの動向に沿ったものにならざるを得ません。私も大会の企画・実施に3回ほど携わらせていただき、何とかディシプリン間の交流を可能にするようなプログラム編成が出来ないかと頭を絞った憶えがありますが、結局はうまくいきませんでした。

しかし、日本行動計量学会のインターディシプリナリーな特性を本当にありがたく思うようになったのは、実のところ、今から2年前にそれまで30年以上勤めた国立大学の職を辞して、現在の職場に移ってからです。その結果、私自身の教育・研究環境にふたつの大きな変化が起きました。ひとつは学部のディシプリンが、これまでの心理学から社会学に変わったこと、もうひとつは、日本行動計量学会が日本社会学会、日本教育社会学会とともに立ち上げた社会調査士資格に関する学部の窓口教員に任ぜられたことです。

そこで感じたことがふたつあります。まず、計量的データ分析の方法に限定しても、改めてディシプリン間の違いの大きさと、自分のディシプリンへのこだわりの強さに気づいたことです。具体的に言えば、自分が力を入れてきたつもりの測定の妥当性や信頼性という問題が、必ずしも社会学では重視されていないことで、これはかなりの驚きでした。実際、社会学的な調査の多くが、心理学よりずっと具体的な事実レベルの質問を多く採用しており、分析にあたって個人差というものをさほど重視しないという特徴をもっているようです。したがって、少なくとも授業においては、計数的な方法、特にクロス集計の有効な使い方といったところに重点を移すことになりました。第2は、日本行動計量学会において学んだことと、そこで培うことの出来た人脈のありがたさです。考えてみれば、前述のような大きな環境と職務内容の変化に、さほどのショックもなしに適応できているのは、「異文化」に触れ、多様な専門分野の研究者の方々から良くしていただいていたからに他なりません。昨年秋、不安を抱きながら初めて社会調査士認定協会の窓口教員の会に出席したとき、日本行動計量学会でお顔を存じ上げていた（もちろん偉い）先生方をお見かけしたときのうれしさは、ちょっと筆舌に尽くせません。

こうしてみると、私は学会に貢献することは少なく、いただくものばかりが多かったことに今更ながら気がつきます。将来、このご恩を少しでもお返しできる機会があるとよいのですが。

[第31回大会実行委員長、元理事、1991年度（第6回）優秀賞受賞]

行動計量学の日本のマーケティングへの貢献

柳原良造

株式会社マーケティング・サービス

マーケティングの米国からの導入当初から、特に市場調査分野は、行動計量学に拠っていたと云えるであろう。比較的早期にこの世界に身を置いた者として、極めて大雑把であるが、その過程をまとめてみたい。

マーケティング導入時は「無差別マーケティング」期で、ビジネスへの科学的思考への第一歩として、各企業は、先ずは市場マップ作りに取り掛かった。そのためには、比率等の正確な測定が重要であった。そこで活用されたのが、幸運にも当時既に完成されていた、世界でも稀なランダムサンプリングサーベイで、この方法により、正確にマーケットシェア等が測定された。行動計量学の貢献のひとつといえよう。その後もこの調査法が標準手法として用いられており、そして、測定対象も、外形的なものから、消費者の行動やビヘイビアへと広がっていった。

この広がり、各企業のマーケティング活動の高度化と軌を一にする。そして、これら活動に伴い、より深い顧客理解・活動成果の測定等が重要となってきた。そこで、活用されたのが各種多変量解析法である。ここでも、幸運なことに、我が国では従来手法に加え、林の数量化手法が完成しており、コンピューターの発展があった。この幸運な条件下、判別分析、数量化Ⅱ類、重回帰分析、数量化Ⅰ類等による分析が一般化、又ビヘイビア測定の尺度設問や尺度構成等のため因子分析、主成分分析、数量化Ⅲ類等が活用されるようになった。こうした解析法の駆使は、世界的にみても進んでいたと見られる。私的経験で申し訳ないが、1990年に日米貿易摩擦問題についての研究調査結果の報告会を米国数都市で行った際、聴衆を最も驚かせたのは数量化Ⅰ・Ⅲ類の分析結果で、彼らには初見のようであった。こうした多変量解析法の提供・指導は、マーケティングにとって行動計量学からの大きい貢献であった。

更に市場が成熟し「ターゲットマーケティング」期に至り「マーケットセグメンテーション」が重要となった。この作業で大いに威力を発揮したのは数量化Ⅲ類である。このおかげで質的変数を含む我が国特有ともいえるセグメンテーション作りが行えた。「マーケットセグメンテーション」は、その後も進展し、より細目の、より多様な、人々の行動特性や心理特性を含む複雑な変数を用いて行われることとなったが、数量化Ⅲ類は、立派にその役割をはたしつつある。又、M.D.S.や目的が異なるが共分散構造分析等も難問解決に有用な役割をはたしている。

セグメンテーションの究極は個の分割に達する。今や「ワントゥワンマーケティング」がいわれ、従来とは異なるデータとそれに対応する解析法が求められている。最近の自由回答調査、テキスト・マイニング等は、この類とも考えられる。行動計量学が、貢献をもとめられる今ひとつの場が開けつつあると受け止め、個客の諸特性を変数にその行動予測を導く解析法等、新しい事態に対応する解法の出現を期待したい。

[監事]

日本行動計量学会の魅力をいかに伝えるか

木村 邦博
東北大学大学院文学研究科

私がこの学会の会員となってからおよそ20年がたったのではないかと思う。この間、学会大会に毎回出席できたわけではない。(他に所属している学会の大会日程が重なったりするためでもあるけれども。)むしろ最初は、ただ学会誌を講読しているだけというタイプの消極的な関わり方しかしてこなかったのではないかと今は申し訳なく思っている次第である。しかし、1997年に仙台で開催された第25回大会の実行委員会委員をつとめてから、積極的に学会大会に参加し、一般セッションでも報告をしようという意欲が高まり、今日に至っている。

この意欲が高まったのは、上記実行委員の仕事を行う中で、日本行動計量学会が持つ、他の学会にない魅力を強く感じたからである。それは特に、幅広い分野の研究者が一堂に会し、人間の「行動」に関して、多角的な視点から真に「学際的研究」を行うことを目指しているところである。これはまさしく、「日本行動計量学会趣意書」に述べられていることにほかならない。この学会の会員であるおかげで様々な分野の方と知り合いになることができただけでなく、ふだん自分の「専門領域」の研究者の人たちと話しているときはまた異なった雰囲気での議論ができ、そこから多くのことを学ばせていただけてきた。私にとってこの恩恵は計り知れない。

他方で、私よりも若い世代の人たちには、このような日本行動計量学会の魅力が伝わっていないのではないかと心配になるときがある。実際、若い世代の会員を勧誘するのに苦労している。これは、日本ではどうも大学院時代の「専攻」がその人の「一生のディシプリン」を決定してしまうという雰囲気があるためではないかと考えている。私の講座の名称は「行動科学」であるけれども、この講座の現在の教員はみな(大学は異なるが)大学院時代に社会学専攻に所属していた。そのためか、今の大学院生も、「社会学」を担当する大学教員として就職をすることを念頭に置いて研究しているように見える。(残念ながら「行動計量学」という科目担当で大学教員の募集がなされることはあまりない。)大学院生にこのような自己規定ができあがってしまうと、社会学系の学会で評価を得ることが優先され、研究の中身や方法の上で関連が深くても他の分野の研究者と交流する機会を求める機運が高まらないことになってしまう。(社会学系の学会で数理的・計量的な方法を用いた研究が発表される機会が増えていることも、この傾向に拍車をかけているかもしれない。)これは長期的に見ると、若い世代の人たちが研究者としての「器」を自ら小さくすることになりかねないのではないかと懸念している。

このような状況の中で、私が個人としてできることは限られているかもしれない。しかし、少なくとも、日本行動計量学会のネットワークを通して私自身が学んだことを授業や研究会などの場で若い世代に伝える中で、この学会の魅力を知ってもらい、「器」の大きな研究者になる気概を抱いてもらうようにしなければならないと考えている。この活動が、ひるがえって日本行動計量学会の発展につながるようになればとも思っている次第である。

[理事]

行動計量学会への期待

安田 裕司

(株)三菱東京UFJ銀行 オペレーションサービス企画部

手抜きをしているわけではないが、2005年2月の「学術の動向」（日本学術協力財団刊）に掲載したものを敢えて再掲させて欲しい。前年2004年9月の統計関連学会連合大会シンポジウム「事例中心に見る統計科学の現代的価値」にて、「金融機関における統計科学の価値」というタイトルでお話した内容を掲載したものであるが、事例をいくつか紹介した後、結びで「データか、経験か」と述べている部分である。

『お客さまのニーズを把握するために実施した意識調査の結果に対し、その結果が全てと考える者と、調査自体に意味がないと考える者という両極が存在するケースに出会うことがよくある。標本誤差の存在や、回答者の意識による様々な歪み、調査方法による偏りといった意識調査の特性を十分に理解した上、分析に工夫を加えることで両者が歩み寄りばよいのだが、なかなか上手くいかないのである。オペレーショナルリスクの「統計的計測法」と「シナリオ分析」の相克ではないが、本件に限らず、「データ」か「経験」か、「定量」か「定性」か、「Science」か「Art」かといった議論が実務の世界ではよく繰り広げられる。

知識や経験によらないデータの分析・解釈は非常に危険である一方、データから知識や経験の誤りや、新しい発見が得られることも多い。二律背反ではなく、両者のバランスをいかにとっていかかがポイントである。実務家は担当業務に関する知識や経験は十分であるわけだから、バランス感を養成するためには、最低限の統計知識を習得したうえで、まず分析してみることが必要だと感じている。平易な統計分析ツールが普及している中、最低限の統計分析は社会人の必須スキルであるが、高校や大学での統計教育の充実や社会人の再教育の体制整備が望まれる。

最後に、研究者と実務家との一層の連携強化を強く期待し、筆者自身もその一翼を担っていければと考えている。データの前で悶々としている実務家の悩みの解消に加え、研究者にとっても新しい研究の種を得る機会が増えることになり、統計科学の発展に寄与するであろう。』

これまでいくつかの学会を見てきたが、実務家が「気軽」に参加でき、日々の悩みを相談できるような機能を果たせるのは本学会しかないと思う。また、大会などの発表を聞いていると、研究者の悩みが（データや分析の着眼点など）実務家にとっては些細な話に聞こえることもある。

自分自身、研究者と実務家との連携強化における「一翼」を担いきれていないが、本学会35周年にあたり、改めて思いを強くしたものである。

[和文誌編集委員]

データ解析について思うこと

豊田 秀樹
早稲田大学文学学術院

行動計量学におけるデータ解析は実技だから、スポーツと同じ様に体調の影響を受けるし、サボればサボっただけレベルは下がる。それは残酷な程である。

私は忙しい日々時間に時間を作っては泳いでいる。でも寒い日はプールに行くのさえ躊躇されるし、泳いでいるときに息継ぎに失敗して咽ることもある。少しサボると、体は直ぐに鈍るし、前にできていたことができなくなる。体を動かすと、体調はとても不安定であること、そして如何に自分がちっぽけな存在であるかということが嫌でも実感させられる。だから、それを忘れないように、私は時間を作っては泳ぐようにしている。

分析者の中にはいくつもの計算機言語を自在に使いこなす方もいらっしゃるけれども、自分は不器用なので主力の言語を定めないと効率が上がらない。私はIMLという言語に定めて分析をしてきたけれども、数年前に一大決心をしてRというオープンソースの言語に主力を移すことにした。オープンソースは時代の趨勢で、安いし、進歩は早いし、何よりRは言語として美しい。最近ようやく慣れてきたようで日々の使用には不自由しなくなったが、肝心の自分の技量の進歩が遅い。なかなか自家薬籠中の物とはならない。研究以外の仕事が増えてきたことも一因であるが、それだけではないだろう。残念ながら「年をとったなあ」と自覚せざるを得ない。しかし私はそれほど寂しくはないのだ。

水泳はタイムを基準変数にするとももちろん若い時分がピークになる。しかし日本泳法のような武術と捉えると年齢は必ずしも重要ではなくなる。水中で如何にリラックスできるか、水に乗れるかは年をとっても鍛錬次第で向上する。自分と水との対話である。行動計量学におけるデータ解析は、確かに実技なのであるが、スポーツというよりは武術に近い技能と捉えればよいのではないのだろうか。年を取るに連れて、データとの対話の質を変えていけば、まだまだ少しは出来ることのあるような気もしてくるのだ。データ解析は本当に楽しい。

[1995年度 (第10回) 優秀賞受賞]

行動計量学と行動科学

岡本安晴

日本女子大学人間社会学部

計量は科学の基礎に関わるものである。物理量の計量についての考察から、アインシュタインは相対性理論を構築した。計量的考察は、科学における根本法則を支えるものであると考えることができる。計量は、手法としては数式の操作等の技術的側面の研究が行われなければならないが、本質的には科学における概念・理論との関わりを伴うものである。刺激強度に関する心理学的現象を扱うために感覚という概念とその強度に関する理論（例えば、サーストン流のモデル）が構築され、それに基づいて計量的分析手法が成立する。科学における基本的なことのひとつは、観察可能な事象と観察不可能な事象との区別である。計量も、観察可能な事象の計量と直接観察することが不可能な事象の計量との区別がある。観察可能な事象の計量（分析）の例としては、観察可能なデータ値（事象）の線形結合を扱う主成分分析が挙げられる。直接観察不可能な概念（因子）を扱うものとしては、例えば因子分析がある。主成分分析の解は、特異値分解によって与えられるが、因子分析の場合も因子の線形結合とデータ値との差の2乗和を最小にするという基準のもとでは因子解が特異値分解により与えられる。いずれも特異値分解により解が与えられるという結果における数式の扱いの同一性のみ注目するのではなく、ここで重要なのは、計量という営みが当該の科学における理論構成とどのように関わっているかということである。行動科学における観察可能な事象と観察不可能な事象との区別に注意する必要がある、上記の因子分析と主成分分析との実質科学的意味の違いを混同してはならない。物理学において、長さと質量は結合という操作に関して同じ足し算という演算で表されるが、物理学的には区別される概念である。実質科学的対応と見かけの数学的対応とは区別されなければならない（cf. サイフェ/林大（訳）「宇宙を復号する」2007、早川書房、p.100）。

行動計量学は行動科学の基礎に関わるものであると考えるとき、行動科学の理論構成の中で行動計量学を考える必要がある。行動科学の理論あるいはモデルに対応した分析の可能性は、コンピュータの性能およびそのコスト・パフォーマンスの驚異的向上により、一昔前と比べると雲泥の差という現状であり、行動計量学に期待されるところは大きいと思われる。特にMCMCの実用性が高まったことにより確率モデルの分析が容易になったことの効果は大きい。社会科学あるいは行動科学においては、現象に不確かさを伴う。この不確かさは、ノイズとか観測・測定エラーによるもの、あるいは行動科学的現象に本質的なもの等いろいろ考えられるが、行動科学的現象の理論あるいはモデルは不確かさを扱えるものが望ましい。この不確かさは確率モデルによって表現できる。確率モデルに基づく分析は、MCMCなどシミュレーションを活用することにより豊かで深い分析が可能になる。行動科学から行動計量学に期待されるところは大きいであるが、また逆に、行動計量学的考察から行動科学の相対性理論のようなものが誕生すれば愉快であると思う。

[和文誌編集委員]

私がデータ分析に興味を持った最初の出来事は、学生時代にモールス信号の混同率データを見せられ、また、そのデータへの分析を通じた知見の獲得プロセスです。このようなデータに含まれる「情報」はどのようなものであるのか、また、それを測るには同様にすれば良いかを学びたいと思い、行動計量学会の会員に加えて頂いた憶えがあります。このことから行動計量学会に参加させて頂いた時からのひとつの研究目標としては、データに含まれる「情報」の評価があります。データ分析では平均値や分散が最も用いられていますが、ではデータに含まれる「情報」という観点からはどうなのであるのか、また、この「情報」とは何をどう評価しているかなどです。

行動計量学会の論文などを読みますと、さまざまな行動として現れる結果を分析するための、データ収集論からモデルの提案やモデルの性質までを論じたものが多いと思います。このように実際場面を踏まえた方法論の提案や理論の構築などで両者の橋渡しを試みている点は素晴らしいと考えます。しかし、現在および将来を考えた場合に、データの多様化・大量化に対応したモデル構成はどのようなものであるかを考える必要があるかと考えます。多種多様な大量データに対した場合に、限られた時間という制約のなかで、そのデータのみ役立つなどの短期的な目標を達成する研究や、データの収集プロセスとモデルの精緻化を別個に行う研究などになりがちで、将来の状況に適用できるモデルや方法論とか過去の事象の再解釈が可能となるようなより一般的な目標を達成しようとする研究からは離れてしまう危険があります。そのようになると「行動」という全ての研究分野に共通の場面を基盤とする学際的な学会であるとういう特徴が活用されない学会になってしまうのではないのでしょうか。多種多様な大量データに対して、ランダムネスがどのように担保されているかなどの評価方法の提案、統計学での十分統計量に対応するような、「行動」を現すデータに含まれる情報を表す「十分情報量」のようなものの提案、学際的な学会であることを活かした多種多様なデータへ適用できるモデル構成や方法論の提案などが行動計量学会から発信されればと思います。この実現は非常に大変かと思いますが、これら両立することが難しそうなことの実現を絶えず試みていくことが、他学会にはない行動計量学会の有るべき姿ではないかと思えます。

[理事、和文誌編集委員長、第30回大会実行委員長、1999年度（第14回）優秀賞受賞]

行動計量学でどんな研究ができるか？

大津起夫

大学入試センター研究開発部

行動計量学会に加入したのは、ソフトウェア会社の勤務を離れて大学の助手になってからですので、約20年になります。当初の自分の意識では、アカデミズムの研究の流れも良くわからず、周辺の会員だと思っていました。思いもかけず93年に学会賞をいただき学会活動に関わることになりました。現在、欧文誌の編集委員長を拝命しています。非才で不手際続きですが、皆さんの力をお借りして何とかこれまで4回の発行を行いました。

行動計量学としてどんな研究が面白いかを考えると、どのようなデータを対象とするかによって、問題の立て方がかなり決定されるように思えます。過去の統計的手法の発展を省みると、現実には大きな影響を与える研究は、データの数理的な扱いだけでなく、いずれもデータを集める方法（観測方法という少し自然科学に偏った意味合いになりますが）の革新と深く関わっているのが分かります。Fisherによる分散分析は、無作為化にもとづく実験計画法を前提とするものですし、L.Guttmanや林知己夫先生の仕事は、組織化された社会調査の実施と分析の必要に応えるために開発されたものです。隣接分野ですが、品質管理における田口玄一先生による一連の実験計画法についての研究は、データの効率的な取得のための方法です。赤池弘次先生の多変量時系列モデルについての研究も、プラントシステムにおける観測方法の改善と密接に関連していますし、最近のJim Ramsayらによる関数データ解析の展開もA/D変換による測定法の革新を背景にしています。

行動計量学の固有の研究分野は、やはり人間の特質についての客観的な知識の蓄積と共有であろうと思います。インターネット上には様々な情報が記述されて、日々その量が増え続けていますが、個人によって記述される情報のかなりの部分が、生活上の悩みに関連するもののようにも見えます。人間がどのような感覚や価値観に基づいてどのような判断を行い行動を起こすのか、それらが社会にどのような帰結をもたらすのかを知るためには、データの取得、それらの蓄積と組織化、データから簡潔な知見を得るための技術的方法（この部分が広義の多変量解析でしょう）、それらの知見を多くの人に利用してもらう方法（これには教育も含まれます）など多くの課題があると思います。

現在、本務では入学試験に関わるデータの分析に従事していますが、公平性の認識には客観的状況と主観的な納得の要素の両方が関わっています。かつてとは桁違いの量の情報を取り扱うことが可能であり、華々しいWebテクノロジーの発展とは少し異なる側面で、人間が置かれた状況とそれについての認識の両面について、研究方法の革新がありそうな気がします。

自分でできることは、ほんのわずかですが、いくらかでも残りの研究生活で成果を得ることができれば本望です。

[理事、欧文誌編集委員長、1993年度（第8回）優秀賞受賞]

お料理の作り方は、学問の進め方とよく似ていると思う。そして行動計量学会は、私にとってさしずめ「お料理教室」というべき存在だろうか。

ではどこが似ているか。まずおいしいお料理を作るには、良い食材を選ばなくてはならない。これは学問でも同じである。私たちシェフも学問の市場に出かけて、数ある研究対象の中から新鮮で滋味豊かな素材を選び出す。この目利きはあくまでシェフの仕事であって、下っ端の職人に任せるわけにはいかない。

だが高価な食材を仕入れたからといって、おいしい料理ができるわけではなかろう。そこで必要なのが調理法である。煮る、焼く、蒸す、揚げる、さまざまな調理法の中から最適の手法を選び出す。学問の世界にも実験、調査、観察、シミュレーション、それに各種の統計的分析技術と、調理法は山ほどある。

ここで重要なのは、調理法の選択は、あくまで素材を生かす手法でなければならないことである。そのときに必要なのがイメージーションの力。素材の特性を分析して、調理法との最適の組み合わせを想像力で作り上げる。研究者の中にはどんな素材でも実験室実験一筋、分散分析一筋という者がいるが、これはいかなる素材でも天ぷらにしたがる偏屈な料理人に似ている。

調理が済んだらそれで料理が完成ということではない。まだ盛りつけがある。タイトルの付け方、図表の作り方、論理構成の仕方など、読者においしく論文を食べていただくためには、食欲をそそる美しいプレゼンをしなければならない。

こうしてみると、研究のプロセスは、お料理の作り方とちっとも変わらないことに気がつくだろう。そして行動計量学は、その中でも特に調理法と近いところにあるように見える。だがそれは半分正しく、半分間違っている。なぜなら調理法は上に述べたように、調理法だけで独立しているのではないからである。それは素材との関係や盛りつけとの関係で、相対的にしか決まらない。林知己夫先生が行動計量学を統計学の分野ではなく、「データの科学」と呼ばれたのはそのことを意味している。

最後にもうひとつ、お料理には高級レストランのそれだけではなく、せっぱ詰まって作るジャンク料理もある。家の中にある食べ物はハムのかけらとタマネギ少々、それに冷凍したご飯だけというときどうするか。多分、贅沢は言わないでチャーハンで誤魔化すことになるだろう。研究も同じこと。時には Quick and Dirty で書かねばならない論文もあるのである。それでも味だけは平均点を取らないと、シェフとしてのプライドが廃る

私も行動計量学会というお料理学校に通い始めてからはや35年、料理の腕はどれ程上がったのだろうか。

[名誉会員、第11回大会実行委員長、2003年度（第18回）功績賞受賞]

行動計量学とオペレーションリズム—— 一対比較の数量化とPOSA

飽 戸 弘

東洋英和女学院大学・東京大学名誉教授

行動計量学会には2つの仕事があるように思う。ひとつは、既存のさまざまな調査手法、統計解析手法を、初心者に普及していくことで、実証研究の裾野を広げる仕事。もうひとつは、新しい調査手法、統計解析手法を開発し、新分野を開拓していく仕事。前者はレディメードの方法の普及の仕事、後者は新しい課題、新しい要求に合わせて、オーダーメードの新しい方法を開発していく仕事。初期の学会は、かなりオーダーメードの仕事をしてきたが、最近は、需要と要請が増えていることもあり、レディメードの普及に追われ大かわらわ、という印象だ。

やはり初期のオーダーメードの仕事は、本学会初代理事長の林知己夫先生の貢献が大ききことをいまさらのように感じる。オーダーメードの分析が可能になるためには、オーダーメードの分析をしたいという強いユーザー側の要求と、それに答えることの出来る特別な才能との、共同作業が必要であろう。安易にレディメードの方法で満足してしまっているユーザー側の責任と、やはりたいへんだが、新しいモデルを開発していくメーカーの育成が、是非、必要であろう。林知己夫先生の開発された2つのモデルをもとにこの辺の事情を考えてみよう。

「一対比較の数量化」は、従来の一対比較の方法論を大きく発展させたもので、言わば多次元での一対比較とでも言うべきものである。従来の一対比較は、対象物の総当りでの比較をした膨大なマトリックスから、好みの順位は、 $A > D > C > B > E$ であった、と言うように「唯一つの順位を導き出す」もので、手間隙をかけた割には結果が単純で、あまり実用的には使えなかった。

一対比較の数量化では、好みの順位がいくつか抽出され、それぞれの集団の大きさが算出される。例えば、Ⅰ群： $A \gg D > C > B \gg E$ の人が80%、Ⅱ群： $E \gg B > D > A > C$ が15%、Ⅲ群： $B > C > D > A > E$ が5%、というように。これはマーケティングの領域での新製品開発などでは極めて有効な結果なのである。この例の場合、80%を占めたⅠ群というのは「普通の人」たちであることが多い。そしていま、ダントツのブランドをもっている企業・商品では、それを使っている人たちも「普通の人」たちだ。従ってこのⅠ群のトップであるAブランドを発売すると、わが社のトップブランドと競合する可能性が高い。そこで、ターゲットをⅡ群の15%の層に絞って、Eを採用することにする。この層はいわば個性化志向、または「ちょっとうるさい人たち」で、しかも15%いれば十分採算が合う。現在のわが社のトップブランドと競合することなく、新しい層を獲得できる可能性がある。Ⅲ群は5%なので今回は見送る、といった具合だ。

POSAも、ガットマンの1次元性を確認するための「スキャログラム分析」を、2次元、多次元に拡張したもので、ある種の「因果のルート」とその大きさを推定することができる。紙幅がなく詳細は割愛するが、いずれも代数を解くような解析で出来るのだが、ちょっと「名人芸」を要するため、その後あまり使われなくなった。こうした画期的発想が、いま求められていると思う。

[理事長、元運営委員長]

論文を書きたい、論文を書かねばならぬという話しをよく耳にする。よい研究をしたいというなら話は解る。論文を書くために、研究するというのであれば本末転倒である。何のために研究者になったのか。自分の好きな研究をしたい、学術・文化に貢献する研究を夢に抱いて、研究者になったのではないか。よい研究をしなくて、よい論文ができるわけがない。あらためてよい研究とは何かを論ずる必要はないが、発想に洞察力があり、これから導かれる方法や結果が人の心を打つものであることは必須の条件のひとつである。

このごろの研究論文 - 学会誌に載っているもの - をみていると、一見して何か解のわからぬ表題がついており、いかにも深遠そうに見える。内味を読んでも、あたりまえのようなことが事々しく妙な言葉を使って書いたり実験したりしている。あたりまえのことは、実に複雑で、実験でわかるような浅薄なものではない。論文はあたりまえのこの一部が事々しい概念と理論で取り扱われることで出てきたことなど実につまらぬどうでもよいようなことである。つまり、何の貢献もしない紙屑のようなものである。これが論文で、こんなものが書きたいのかと不思議な気分になる。

問題の設定で、科学で取り扱うことが意味のないものと、取り扱うことで意味のあるものがある。科学は所詮平均値の議論である。母集団（厳密にはユニヴァース）の平均値や構造の問題である。個々のものにそのまま妥当するものとは限らない。しかし、平均や構造をみることで大きな知見を得ることができ、さらに個々を介して新に発展の道を進むことになる。これが科学である。特殊と一般の峻別であり、よりレベルの高い統合である。この繰り返しである。例をあげれば医学は平均値であり構造であり、そのまま個人の治療に通ずるとは限らない。治療は医学、薬学など諸科学の成果をポテンシャルとする個人のプロセス・コントロールである。これは、人により様々であるが、この個々の「様々」のなかから新たな平均値・構造が見出され、医学が発展する。個を捨象することにより見えてくるものを取り扱うことにより、医学（科学）が発展する。こういう考えに立ち、現象をいかに科学的に解明するかが研究の出発点であるべきである。これを意識し土台としない研究は無意味なものとなる。

意味の乏しい論文が多数生産されるのは、形式的な業績評価という下らぬものが横行するからでもある。論文の数、頁数などが問題になる。質は評価のしようがないからというのが評価側の言い分である。質こそ大事なので、これが評価できないのならやめたらよい。優れた研究者を育て優れた研究が出来上がることを狙って評価するのが本道ではないか。優れた研究者をだめにし、優れた研究ができないようにする業績評価に専念しているのが今日の大学や研究所の雰囲気のように思える。外部評価など正にナンセンスそのものを有り難がることこそ日本の研究阻害の近道である。外部評価は「桃李、もの言わずして、下おのずから蹊を成す」というべきものであろう。

研究論文の生産、さらに遡って研究の発想、下って評価のあり方、すべて、日本の研究が駄目になるように人々が心胆を砕いているのであるから、これを断ち切って正道にもどすのは個々の人々の心の中の問題という他はない。

論文を感動して読むことは楽しいものである。私の経験で申し訳ないが、かつて論文を読んで感激し、「数学」とはこんなに面白いものかと思ったものである。確率論を勉強していたとき、von Misesの確率論の最初の論文を読んだとき、大変な感動を味わった。こんなに面白い数学があるかと思った。von Neumannのゲゼールシャフツシュピールを読んだときも全く同様に感動した。彼のエルゴート定理の大証明を読んだときも同じだった。A. Waldのコレクティブの存在証明、von MisesのProbability, Statistics and Truthの初版を読んだときも血湧き肉躍る感じを抱いたものである。こんな面白い数学をやらぬ手はないと思い、酔ったような日々を過ごしたことを覚えている。

統計学をやれと先生に言われて統計学の本や論文を読んだとき、実にいい加減でつまらぬものだと感じた。しかし統計学の面白さは「知行合一」にあるということを知ったとき、知るのではない体験したとき、これに心をゆさぶられた。以後私の研究に空理空論はない。常に知行合一、止観という形をとっており、これ以外はやらぬという立場でいる。

論文を書くということは、オーケストラの指揮者の演奏のようなもので、優れた成果をどのように演出して見せるかというのに似ている。人々に感激を与えないような演出（演奏）はつまらぬものである。詩人は詩を書いて自らの詩にほだされて涙を流すと同様に、研究者は自らの研究結果を論文にすると感激し、涙をながし草稿に涙の「しみ」が残るといのはよいではないか。今日ならワープロのキーボードが涙に濡れて駄目になるなど楽しいことではないか。

[会報84号 (2000) 巻頭言、初代理事長・統計数理研究所、2002年逝去]

資料編

学会設立1973年9月から2008年3月までの学会諸活動、
および関連役員名を資料編にまとめた。

注) 本節の表中にある所属は、すべて当時の所属である。

1 歴代役員

1973年、林知己夫を理事長に理事会が組織され、1期3年、現在で12期目を迎える。理事長をはじめとする構成委員会の歴代の委員長は、表1の通りである。

表1 歴代役員

期 間	理事長	編集委員会			運営委員長	事務局長	組織検討 委員会 委員長	大会担当 委員会 委員長
		編集委員長	和文誌 編集委員長	欧文誌 編集委員長				
1973 - 1976	林 知己夫	林 知己夫	野元 菊雄	印東 太郎	池田 央	柳井 晴夫		
1976 - 1979	林 知己夫	山本 俊一	野元 菊雄	印東 太郎	安本 美典	柳井 晴夫 水野 欽司		
1979 - 1982	林 知己夫	肥田野 直	池田 央	松原 望	飽戸 弘	水野 欽司	柳井 晴夫 脇本 和昌	
1982 - 1985	林 知己夫	野元 菊雄 肥田野 直	池田 央	上笹 恒	飽戸 弘	岩坪 秀一		柳井 晴夫
1985 - 1988	林 知己夫	野元 菊雄	柳井 晴夫	上笹 恒	駒澤 勉	岡太 彬訓		鈴木 達三
1988 - 1991	肥田野 直	野元 菊雄	古川 俊之	宮原 英夫	水野 欽司	江川 清		池田 央
1991 - 1994	水野 欽司	柳井 晴夫	田栗 正章	村上 征勝	岩坪 秀一	繁樹 算男		
1994 - 1997	柳井 晴夫	池田 央	岡太 彬訓	繁樹 算男	田栗 正章	村上 征勝	松原 望	村上 隆 浅野長一郎 飽戸 弘
1997 - 2000	柳井 晴夫	池田 央	久保 武士	繁樹 算男	岡太 彬訓	村上 征勝	田栗 正章	村上 隆 飽戸 弘
2000 - 2003	杉山 明子	繁樹 算男	林 文	狩野 裕	山岡 和枝	村上 征勝	岡太 彬訓	岩坪 秀一
2003 - 2006	杉山 明子	繁樹 算男	吉野 諒三	繁樹 算男	山岡 和枝	馬場 康維	飽戸 弘	岡太 彬訓
2006 -	飽戸 弘	岩坪 秀一	今泉 忠	大津 起夫	菊地 賢一	吉野 諒三	林 文	繁樹 算男 植野 真臣

2 学会大会

大会は、学会設立時より、毎年秋に行われ、理論だけでなく、実践的な研究成果も数多く発表されてきた。また、毎回、特別講演や特別セッションを数多く設け、行動計量学にかかわる周辺話題も含め、そのときどきのホットな話題や最新の研究も議論されている。

表2 年次大会

回	開催期間	開催場所	大会実行委員長(所属)
第1回	1973年9月3日～6日	統計数理研究所	林 知己夫(統計数理研究所)
第2回	1974年9月2日～5日	統計数理研究所	林 知己夫(統計数理研究所)
第3回	1975年9月8日～10日	青山学院大学	瀬谷 正敏(青山学院大)
第4回	1976年9月2日～4日	東京大学	奥野 忠一(東京大)
第5回	1977年9月1日～3日	岡山大学	脇本 和昌(岡山大)
第6回	1978年9月5日～8日	立教大学	池田 央(立教大)
第7回	1979年9月6日～8日	大阪市立大学	生沢 雅夫(大阪市立大)
第8回	1980年9月4日～6日	慶応義塾大学	藤田 広一(慶応義塾大)
第9回	1981年9月3日～6日	名古屋大学	内田 良男(名古屋大)
第10回	1982年8月25日～28日	国語研究所	野元 菊雄(国語研究所)
第11回	1983年8月1日～3日	京都大学	木下 富雄(京大)
第12回	1984年10月4日～6日	東京工業大学	穂山 貞登(東京工業大)
第13回	1985年8月2日～4日	北海道大学	河口 至商(北海道大)
第14回	1986年8月25日～27日	東京大学	古川 俊之(東京大)
第15回	1987年8月20日～22日	福岡リーセントホテル	浅野長一郎(九州大)
第16回	1988年8月25日～27日	千葉大学	柏木 繁男(千葉大)
第17回	1989年8月3日～5日	岡山カルチャーホテル	脇本 和昌(岡山大)
第18回	1990年9月19日～21日	東京女子大学	杉山 明子(東京女子大)
第19回	1991年8月28日～30日	名古屋大学	吉村 功(名古屋大)
第20回	1992年9月21日～23日	東京工業大学	坂元 昂(東京工業大)
第21回	1993年9月2日～4日	大阪大学	直井 優(大阪大)
第22回	1994年8月29日～31日	筑波大学	久保 武士(筑波大)
第23回	1995年9月12日～14日	関西大学	辻岡 美延(関西大)
第24回	1996年9月7日～9日	幕張メッセ	宮埜 壽夫(千葉大)
第25回	1997年9月5日～7日	仙台市戦災復興記念館	海野 道郎(東北大)
第26回	1998年9月16日～18日	立教大学	池田 央(立教大)
第27回	1999年9月20日～22日	倉敷市民会館・芸文館	垂水 共之(岡山大)
第28回	2000年10月7日～9日	東京大学	繁樹 算男(東京大)
第29回	2001年9月14日～16日	甲子園大学	木下 富雄(甲子園大)
第30回	2002年9月19日～21日	多摩大学	今泉 忠(多摩大)
第31回	2003年9月3日～5日	名古屋大学	村上 隆(名古屋大)
第32回	2004年9月15日～18日	青山学院大学	二宮 理憲(青山学院大)
第33回	2005年8月26日～29日	長岡技術科学大学	植野 真臣(長岡技術科学大)
第34回	2006年9月11日～14日	聖学院大学	丸山久美子(聖学院大)
第35回	2007年9月2日～5日	同志社大学	村上 征勝(同志社大)

3 学会賞受賞者

本学会では、「功績賞」、「優秀賞」、「奨励賞」の3つの賞を設定し、優秀な研究を表彰している。功績賞・優秀賞は1986年より、奨励賞は1999年より授賞が開始された。また、「功績賞」と「優秀賞」が林知己夫賞となったのは、第17回（2002年度）以降である。受賞者は、表3 - 1、3 - 2の通りである。

表3 - 1 学会賞受賞者（功績賞、優秀賞）

回	年度	林知己夫賞（功績賞）	林知己夫賞（優秀賞）
第1回	1986年度	高根 芳雄（マッギル大学）	富山 慶典（筑波大学） 永岡 慶三（神戸大学）
第2回	1987年度	柳井 晴夫（大学入試センター）	宮埜 壽夫（千葉大学）
第3回	1988年度	水野 欽司（統計数理研究所）	電子総合研究所数理情報研究室
第4回	1989年度	後藤 昌司（塩野義製薬㈱）	竹谷 誠（拓殖大学）
第5回	1990年度	宮原 英夫（北里大学）	受賞者なし
第6回	1991年度	脇本 和昌（岡山大学）	小笠原春彦（JR 東日本） 村上 隆（名古屋大学）
第7回	1992年度	池田 央（立教大学）	吉野 諒三（統計数理研究所）
第8回	1993年度	岩坪 秀一（大学入試センター）	大津 起夫（北海道大学）
第9回	1994年度	繁榎 算男（東京工業大学）	岩崎 学（成蹊大学）
第10回	1995年度	松原 望（東京大学）	豊田 秀樹（立教大学）
第11回	1996年度	受賞者なし	岸野 洋久（東京大学） 前川 眞一（大学入試センター）
第12回	1997年度	村上 征勝（統計数理研究所）	足立 浩平（甲子園大学） 狩野 裕（大阪大学）
第13回	1998年度	肥田野 直（東京大学名誉教授・ 大学入試センター名誉教授）	市川 雅教（東京外国語大学）
第14回	1999年度	岡太 彬訓（立教大学）	今泉 忠（多摩大学）
第15回	2000年度	印東 太郎（U. C. アーバイン校名誉 教授・慶應義塾大学名誉教授）	江島 伸興（大分医科大学）
第16回	2001年度	西里 静彦（トロント大学名誉教授）	佐井 至道（岡山商科大学）
第17回	2002年度	江川 清（広島国際大学）	竹村 和久（早稲田大学）
第18回	2003年度	木下 富雄（甲子園大学）	鈴木 督久（株式会社日経リサーチ） 山岡 和枝（国立保健医療科学院）
第19回	2004年度	野元 菊雄（国立国語研究所名誉所員）	植野 真臣（長岡技術科学大学）
第20回	2005年度	久保 武士（龍ヶ崎済生会病院）	藤井 聡（東京工業大学）
第21回	2006年度	古川 俊之（国立病院機構大阪医療 センター）	北條 弘 鄭 躍暉（総合地球環境学研究所）
第22回	2007年度	鮫島 史子（テネシー大学）	倉元 直樹（東北大学）

表3 - 2 学会賞受賞者 (奨励賞)

回	年 度	肥田野直・水野欽司賞 (奨励賞)
第1回	1999年度	土屋 隆裕 (統計数理研究所)
第2回	2000年度	菊地 賢一 (大学入試センター) 前田 忠彦 (統計数理研究所)
第3回	2001年度	星野 崇宏 (東京大学)
第4回	2002年度	竹内 光悦 (立教大学)
第5回	2003年度	芳賀麻誉美 (女子栄養大学) 濱崎 俊光 (ファイザー株式会社)
第6回	2004年度	荘島宏二郎 (大学入試センター)
第7回	2005年度	森本 栄一 (株式会社ビデオリサーチ)
第8回	2006年度	城川 美佳 (東邦大学) 中山 厚穂 (立教大学)
第9回	2007年度	松田 映二 (朝日新聞社) 張 一平 (東京大学)

4 学会誌の特集

学会誌については、和文誌「行動計量学」と欧文誌“Behaviormetrika”をそれぞれ年間に2号、計4冊のジャーナルを発行している。それぞれの学会誌では、「特集」、「原著」、「研究ノート」、「総合報告」、「資料」、「その他」のカテゴリーで、欧文誌では、“Special Issue”、“Invited Paper”、“Articles”のカテゴリーで、研究成果等を公表している。以下、和文誌における「特集」のテーマ（表4-1）と欧文誌における“Special Issue”のテーマ（表4-2）をあげておく。

表4-1 学会誌の特集（和文誌「行動計量学」特集）

特 集 名	巻 (号)	発行年月
行動計量学の課題	1 (1)	1974年3月
分布	3 (1)	1975年9月
地域分布	4 (1)	1976年9月
質を測る	5 (1)	1977年9月
成長と変容	6 (1)	1978年9月
誤り	7 (1)	1979年9月
選択行動	9 (1)	1982年3月
国際比較	10 (1)	1982年12月
ラボトリー・コンピュータ	11 (1)	1983年9月
グラフィカル接近法	12 (1)	1984年9月
調査法の現状と問題	13 (1)	1985年9月
因果関係の推定	14 (1)	1986年9月
選抜試験をめぐる	15 (1)	1987年9月
あいまいさの計量化と意志決定	16 (1)	1988年9月
因子分析の最近の動向	18 (1)	1990年9月
多変量解析の理論と応用に関する最近の発展	19 (1)	1992年3月
交通行動研究の理論と応用	20 (1)	1993年3月
大学における「一般情報処理教育」 - 各大学の現状と今後の構想 -	21 (1)	1994年3月
音声のモデル	22 (1)	1995年3月
社会調査の精度	23 (1)	1996年3月
社会階層の計量分析	24 (1)	1997年6月
生と死の行動計量 - QOL を考える -	25 (2)	1998年9月
POS データの解析	26 (2)	1999年9月
EBM (Evidence Based Medicine)	28 (2)	2001年12月
電話調査の精度 (その1)	29 (1)	2002年3月
討論: 共分散構造分析	29 (2)	2002年12月
日本語観国際センサス電話調査の精度 (その2)	30 (1)	2003年3月
林知己夫先生追悼特集号 21世紀の行動計量学のために	30 (2)	2004年1月
東アジア価値観国際比較調査 (その1)	32 (2)	2005年9月
東アジア価値観国際比較調査 (その2)	33 (1)	2006年3月
地理学における多次元尺度構成法の応用	33 (2)	2006年9月

表 4 - 2 学会誌の特集 (欧文誌「Behaviormetrika」 Special Issue)

Special Issue テーマ	Vol (No)	発行年月
Categorical Data Analysis with Latent Variables	23 (1)	January, 1996
Covariance Structure Analysis	24 (1)	January, 1997
Covariance Structure Analysis (continued)	24 (2)	July, 1997
Analysis of Knowledge Representations by Neural Network Models	26 (1)	January, 1999
Comparative Study of National Character	29 (2)	July, 2002
Comparative Study of National Character (continued)	30 (1)	January, 2003
Multivariate Analysis of Investigative Psychology in Britain and Japan	31 (2)	July, 2004
Recent Development in Latent Variables Modeling	33 (1)	January, 2006

5 学会活動

5 - 1 月例シンポジウム・行動計量シンポジウム・講習会

行動計量シンポジウムは、学会創立時から行われており、第1回～第4回は「月例会」、第5回～第50回は「月例シンポジウム」とよばれた。実際は、毎月行われたわけではないが、毎月のように行おうと「月例」の冠がつけられていた。第51回からは、「行動計量シンポジウム」となり、現在にいたっている。表5 - 1に第1回から第91回までのテーマ、開催年月日、開催場所、オーガナイザーなどをまとめて示した。

表5 - 1 行動計量シンポジウム

回	テ - マ	開催年月日	開催場所	オーガナイザーなど
1	行動計量学の課題	1974年1月26日	統計数理研究所	山本 俊一 安田 三郎
2	因子分析法	1974年4月20日	統計数理研究所	青山博次郎
3	パターン認識	1974年7月13日	統計数理研究所	飯島 泰蔵
4	健康の計量化	1974年10月26日	統計数理研究所	山本 幹夫
5	非数理系における行動計量学の教育	1974年12月14日	統計数理研究所	池田 央
6	予測	1975年2月22日	大阪大学付属病院	古川 俊之
7	システム	1975年4月26日	統計数理研究所	近藤 暹
8	芸術とコンピュータ	1975年6月21日	統計数理研究所	豊川 裕之 安本 美典
9	分類	1975年10月18日	名古屋大学	水野 欽司
10	地域分析における諸問題	1975年12月13日	東京大学	安田 三郎
11	データ解析とモデル	1976年2月28日	統計数理研究所	奥野 忠一
12	システムシミュレーションと人間	1976年4月24日	東京大学	渡辺 茂
13	分布	1976年7月3日	慶応大学	印東 太郎
14	あいまいさ	1976年11月13日	東京工業大学	寺野 寿郎
15	集合行動の解析	1976年12月18日	京都大学 楽友会館	木下 富雄
16	マーケットセグメンテーションと経営戦略	1977年5月28日	統計数理研究所	井関 利明
17	学習のメカニズムと理論	1977年7月2日	専修大学 神田校舎	大泉 充郎
18	医学と統計	1977年12月17日	東京大学医学部	豊川 裕之 開原 成允
19	教育データの計量	1978年5月13日	岡山大学	脇本 和昌
20	システムと情報	1978年5月13日	専修大学 神田校舎	大泉 充郎
21	正気と異常	1978年7月1日	統計数理研究所	加藤 正明 林 峻一郎 奥野 忠一
22	行動計量学の方法論をめぐって	1978年11月25日	統計数理研究所	林 知己夫
23	臨床と疫学における意思決定とその数理モデル	1979年1月20日	大阪大学	山本 俊一 浅井 晃
24	計量政治学	1979年5月26日	統計数理研究所	関 寛治

回	テ ー マ	開催年月日	開 催 場 所	オーガナイザーなど
25	環境問題と計量化	1979年10月20日	統計数理研究所	山本 俊一 浅井 晃
26	教育工学における計量モデル	1980年 2月14日	神戸大学 教育工学 センター	永岡 慶三 脇本 和昌
27	フランスにおける “ Analyse des Doness ”	1980年 5月17日	統計数理研究所	林 知己夫
28	災害	1980年11月 8日	統計数理研究所	広瀬 弘忠
29	薬と行動計量	1981年11月28日	阪大医学部病院	梶谷 文彦 井上 通敏
30	調査データの信頼性	1982年 4月 3日	統計数理研究所	柳原 良造
31	ディスプレイによる統計的解析	1982年 8月30日	統計数理研究所 附属養成所	駒澤 勉
32	日本の女性の生き方 - 世論調査データの分析から -	1983年 6月13日	NHK 放送博物館	杉山 明子
33	ファジイ集合とその応用	1983年 6月25日	大阪市立大学	浅居喜代治
34	言語行動の計量的研究	1983年11月 1日	国立国語研究所	江川 清
35	多次元定性データの解析	1983年12月10日	大阪市立大学	田中 豊
36	多次元尺度法 (MDS) の最近の 動向	1984年 6月 2日	統計数理研究所	高根 芳雄
37	政治の計量モデル	1984年 6月16日	京都会館	三宅 一郎
38	現代人の宗教意識と行動	1984年12月 1日	大阪市立大学 田中記念館	金児 暁嗣
39	都市と人間生活	1984年12月 6日	統計数理研究所	柳原 良造
40	地理学における分析手法と行動論	1985年11月 2日	大阪市立大学 田中記念館	石川 義孝
41	日本人研究のあり方	1986年 2月 1日	統計数理研究所	林 知己夫
42	三相データの解析方法	1986年 2月 7日	統計数理研究所	宮埜 寿夫
43	社会調査とプライバシー	1986年 9月26日	統計数理研究所	柳原 良造
44	認識と意思決定の行動計量学	1986年12月 3日	大阪科学技術センター	木下 富雄
45	教育におけるコンピュータ利用	1987年 2月 6日	国立国語研究所	池田 央
46	街づくりのシェフ (市長) が語る 私のヌーヴェルキュイジン (新しい街づくり)	1987年10月 2日	東京工業大学	熊田 禎宣
47	人は形をどのように見ているか 人のパターン認識	1987年11月28日	京都大学 楽友会館パーラー	井上 通敏 木下 富雄 江島 義道
48	新しい MULTIWAY データ解析法 を目指して	1988年11月26日	統計数理研究所	岩坪 秀一 村上 隆
49	共分散構造分析と LISREL	1989年 3月17日	統計数理研究所	柳原 良造 石塚 智一
50	行動計量学の歩み	1989年11月18日	統計数理研究所	水野 鉄司
51	データ解析の理解とコンピュータ 利用	1989年12月 2日	名古屋大学 計算機センター	村上 隆
52	ハイ・テク利用の調査方法	1990年12月 8日	統計数理研究所	柳原 良造

回	テ - マ	開催年月日	開 催 場 所	オーガナイザーなど
53	ストレスの概念について	1992年 6 月20日	統計数理研究所	林 峻一郎
54	「生と死」の行動計量 (1)	1992年12月19日	統計数理研究所	丸山久美子
55	MDL 原理とその応用	1993年 2 月27日	統計数理研究所	星 守
56	「生と死」の行動計量 (2)	1993年11月13日	統計数理研究所	丸山久美子
57	言語生活の行動計量	1993年11月20日	国立国語研究所	米田 正人
58	「生と死」の行動計量 (3)	1994年12月 3 日	国立国語研究所	丸山久美子
59	多変量解析の理論と応用の融合をめぐって	1995年 3 月25日	統計数理研究所	柳井 晴夫
60	スポーツの行動計量	1996年 1 月27日	早稲田大学 小野梓記念講堂	前田 忠彦 椎名 乾平
61	生と死の行動計量 (4)	1997年 1 月11日	統計数理研究所	丸山久美子
62	心理・数理・生理的アプローチの競合と協調	1997年 3 月18日	東京大学 教養学部	繁榎 算男 市川 伸一
63	生と死の行動計量 (5)	1997年 3 月22日	統計数理研究所	丸山久美子
64	社会ネットワーク研究の今日的課題	1998年 3 月13日	甲南大学	井上 寛
65	感性研究の新動向	1998年 6 月 6 日	東京工業大学	岡太 彬訓 往住 彰文
66	社会科学におけるゲーム理論の応用と可能性	1998年11月 7 日	統計数理研究所	佐藤 嘉倫
67	現代の高校生像	1999年 5 月22日	東北大学 理学部付属 植物園講義室	木谷 忍
68	テキスト型データ等の取得から活用まで	2000年12月 8 日	統計数理研究所	前田 忠彦 吉村 宰
69	実践的ベイジアンアプローチ	2001年 7 月13日	東京大学 教養学部	繁榎 算男
70	電話世論調査：RDD 法の検証	2001年10月20日	統計数理研究所	松本 正生 前田 忠彦
71	「緊急事態の調査・分析」 - 阪神・淡路大震災の事例 -	2001年11月15日	統計数理研究所	柳原 良造
72	行動計量学からの政策提言	2002年 3 月20日	東洋英和女学院大学 六本木校舎	林 理
73	データの科学と調査法	2002年 5 月11日	統計数理研究所	岩坪 秀一 山岡 和枝
74	データの科学と調査法 (その 2)	2002年 6 月 1 日	統計数理研究所	山岡 和枝 前田 忠彦
75	テキスト型データの解析を巡って	2002年 9 月11日	多摩大学 ルネッサンスセンター	大隅 昇 岡太 彬訓 今泉 忠
76	世論調査のゆくえ	2002年11月23日	多摩大学 ルネッサンスセンター	松本 正生
77	マーケティングと行動計量	2002年11月30日	立教大学	朝野 熙彦 岡太 彬訓
78	因果をめぐる統計的アプローチ	2003年 1 月25日	東京大学 教養学部 アドヴァンストラボ	繁榎 算男

回	テ - マ	開催年月日	開催場所	オーガナイザーなど
79	地域・地理・図形情報とデータ解析	2003年10月4日	岡山大学 創立五十周年記念館	垂水 共之 森 裕一
80	今こそ、調査の哲学を	2004年5月22日	多摩大学 ルネッサンスセンター	松本 正生
81	「評価グリッド法」その理論と測定・分析法の現状と進化	2004年8月21日	女子栄養大学 駒込校舎	芳賀麻誉美
82	潜在変数モデルにおける最近の発展 Recent Developments in Latent Variables Modeling	2004年8月25日 ～26日	東京大学 駒場キャンパス	和合 肇 繁樹 算男
83	Factor Analysis Centennial Symposium at Osaka	2004年10月2日 ～4日	大阪大学 中之島センター	狩野 裕
84	21世紀における行動計量学を展望する	2004年11月27日	青山学院大学 総研ビル	丸山久美子
85	社会調査と社会調査士	2005年10月8日	岡山理科大学 理大ホール	垂水 共之 田中 潔 森 裕一
86	Management of Social Problems and Justice in Group Contexts	2006年3月4日	東北大学 川内南 キャンパス教育学研究棟	木村 邦博
87	いま求められる調査とは - 各調査モードの比較検証 -	2006年11月11日	東京大学 駒場校舎	松本 正生
88	Justice and Forgiveness in Social Relations	2007年3月24日	仙台国際センター	木村 邦博
89	複雑系データの解析	2007年12月1日	統計数理研究所	丸山久美子
90	計量心理モデルの数理統計学的吟味	2008年3月8日	東京大学 教養学部	繁樹 算男
91	マイニング - 調査・システム・解析手法 -	2008年3月15日	岡山理科大学	垂水 共之 森 裕一 飯塚 誠也

なお、この他に次のような講習会が開催された（記録が現存するもののみ記載）

第2回：「人工知能と行動計量」、「多変量解析」（1974年11月）

第4回：「調査法 - 具体例を中心に -」（1976年5月）

第5回：「多変量解析の理論と応用」（1976年6月）

第6回：「医学生のための行動計量学」（1978年12月）

第12回：「多変量解析の応用」（1981年5月）

5 - 2 春の合宿セミナー

春の合宿セミナーは、合宿形式でさまざまな行動計量学的手法を学ぶもので、最新の計量的手法やその応用に関わる第一線の講師陣による講義を聞くと共に、セミナー形式での質疑応答も活発に行われきました。1997年度より、毎年3月に開催され、2007年度で、11回を数えます。

表5 - 2 春の合宿セミナー

回 (年度)	期 間	場 所	運営委員・実行委員等
1 (1997年度)	1998年3月28日(土) ～3月30日(月)	東京大学 検見川セミナー ハウス	岡太 彬訓 (立教大) 繁榎 算男 (東京大) 大森 拓哉 (東京大)
2 (1998年度)	1999年3月29日(月) ～3月31日(水)	大阪大学 吹田キャンパス	狩野 裕 (大阪大) 原田 章 (大阪大) 菅 志穂子 (大阪大) 三浦 麻子 (大阪大)
3 (1999年度)	2000年3月30日(木) ～4月1日(土)	愛知学院大学	千野 直仁 (愛知学院大) 村上 隆 (名古屋大) 野口 裕之 (名古屋大) 仁科 健 (名古屋工業大) 竹内 一夫 (愛知学院大)
4 (2000年度)	2001年3月9日(金) ～3月10日(土)	国立オリンピック記念 青少年総合センター	西川 浩昭 (筑波大) 廣瀬 英子 (東京女子大)
5 (2001年度)	2002年3月21日(木) ～3月22日(金)	安田生命アカデミア	岩崎 学 (成蹊大)
6 (2002年度)	2003年3月26日(水) ～3月28日(金)	東富士リサーチパーク内 TOTO 東富士研修所	岡太 彬訓 (立教大) 山口 和範 (立教大)
7 (2003年度)	2004年3月25日(木) ～3月26日(金)	長岡技術科学大学	植野 真臣・安藤 雅洋・ 永森 正仁 (長岡技術科学大) 前田 忠彦 (統計数理研究所) 大森 拓哉・星野 崇宏 (東京大) 荘島宏二郎・吉村 宰 (大学入試センター)
8 (2004年度)	2005年3月22日(火) ～3月24日(木)	東邦大学習志野キャンパス	菊地 賢一 (東邦大)
9 (2005年度)	2006年3月16日(木) ～3月18日(土)	同志社大学 京田辺キャンパス	宿久 洋 (同志社大)
10 (2006年度)	2007年3月30日(金) ～3月31日(土)	八王子セミナーハウス	大津 起夫 (大学入試センター)
11 (2007年度)	2008年3月29日(土) ～3月31日(月)	多摩大学多摩キャンパス	今泉 忠 (多摩大)

5 - 3 研究部会

研究活動の活性化をはかるため、毎年「小グループ研究会」に対して活動経費の助成を行ってきた（1975年度までは「サブグループ研究会」とよばれていた）。2002年度からは、小グループ研究会を発展させた「研究部会」を設け、より一層の研究活動の活性化をはかることにした。この研究部会には、一定地域（ただし、都心部から東京近郊までを除く）での研究推進活動や研究普及活動を主な目的とする「地域部会」と、オリジナリティーに富んだ研究成果をあげることが目的とする「研究グループ」の2つがあり、それぞれ助成を受けて活動している。

表5 - 3 研究グループ（サブグループ研究会・小グループ研究会）

研究会名	年度	世話人
計量分析談話会	1973	水野 欽司（名古屋大）・高橋 丈司（愛知教育大）
社会調査によるデータ開発研究会	1974	鈴木 達三（統計数理研究所）
評価問題研究会	1974	梶田 叡一（国立教育研究所）
計量社会分析研究会	1974	高森 寛・森平夾一郎（青山学院大）
データ解析と統計数理研究会	1975	生沢 雅夫（大阪市立大）・三宅 一郎（同志社大）
社会調査技法研究会	1983 - 1984	鈴木 達三（統計数理研究所）
マルチウェイ・データ解析研究会	1992	吉澤 正（筑波大）
調査法に関する研究会	1992 - 1995	杉山 明子（東京女子大）
視覚数理モデル小グループ研究会	1992	小山 隆正（情報通信東京研究所） 山ノ井高洋（北海道学園大）
行動科学研究会	1997 - 1999	海野 道郎（東北大）
食行動調査研究会	1998	小林 敬子（日本女子体育大）
計量社会学研究会	1998 - 2001	村瀬 洋一（立教大）
進化ゲーム理論研究会	1999	大浦 宏邦（帝京大）
選手特性調査	2000	小林 敬子（日本女子体育大）
好みの計量研究会	2001 - 2003	芳賀麻誉美（女子栄養大）
糖尿病栄養教育評価に関する研究会	2001	渡辺満利子（昭和女子大・短大）
地理学における多次元尺度構成法の応用	2003 - 2004	今泉 忠（多摩大）
社会調査研究会	2005 - 2006	城川 美佳（東邦大）
認知的統計的意思決定論研究会	2006 - 2007	繁樹 算男（東京大）
サーベイ・メソドロジー研究会	2006 - 2007	松本 正生（埼玉大）
栄養アセスメントプロセス研究会	2007 -	安達 美佐（国立保健医療科学院）

表5 - 4 研究部会「地域部会」

研究会名	年度	世話人
岡山地域部会（第1期）	2002 - 2005	森 裕一（岡山理科大）
東北行動計量学研究会	2002 - 2007	海野 道郎（東北大）
岡山地域部会（第2期）	2006 - 2007	飯塚 誠也（岡山大）

6 出版活動（行動計量学シリーズ、朝倉書店刊、全13巻）

1993年、朝倉書店から「行動計量学シリーズ」として出版し、1993年から1996年にかけて全巻がそろった。

表6 行動計量学シリーズ

巻	タイトル	著者	発行年月
1	行動計量学序説	林 知己夫	1993年11月
2	数量化のグラフィックス	穰山 貞登	1993年11月
3	健康の計量学	山本 俊一	1993年11月
4	医療と社会の計量学	山岡 和枝・小林 廉毅	1994年 5月
5	リーダーシップの行動科学	三隅二不二	1994年 9月
6	真贋の科学	村上 征勝	1994年 9月
7	現代テスト理論	池田 央	1994年10月
8	多変量データ解析法	柳井 晴夫	1994年12月
9	制約付き主成分分析法	高根 芳雄	1995年 2月
10	言語の科学	安本 美典	1995年 4月
11	意思決定の認知統計学	繁榭 算男	1995年11月
12	パターン認識	大津 展之・関田 巖・栗田多喜夫	1996年 7月
13	寿命の数理	古川 俊之	1996年 7月

なお、2009年から『シリーズ（行動計量の科学）』（朝倉書店）全10巻の刊行が決定している。

7 会報巻頭言

学会創立時から、会報が発行されている。1993年度までは、少しばらつきはあるものの毎年3号発行されており、1994年度からは、年間4号（3ヶ月ごとに）発行されてきている。2007年度末で116号を数える。

この会報の毎号の冒頭を飾るのが巻頭言。以下、そのタイトルをまとめる。

表7 会報の「巻頭言」

号	発行年月日	巻頭言タイトル	著者
第1号	1973年12月25日	日本行動計量学会の発足に当たって	林 知己夫
第2号	1974年4月10日	真の学際研究をめざすために	山本 俊一
第3号	1974年6月25日	和文誌編集幹事となって	野元 菊雄
第4号	1974年10月5日	欧文誌第一号刊行に当たって	印東 太郎
第5号	1975年2月1日	“ QUOVADIS ”	池田 央
第6号	1975年8月10日	行動計量学の社会的意義	竹内 啓
第7号	1975年10月6日	行動計量学シリーズ刊行をめざして	青山博次郎
第8号	1976年1月25日	学際研究と学際偏見	安田 三郎
第9号	1976年6月1日	学問と流行	野崎 昭弘
第10号	1976年10月15日	行動計量ヨーロッパ版雑感	戸田 正直
第11号	1977年2月15日	行動計量学これから	生沢 雅夫
第12号	1977年6月13日	インドにおける行動計量学	柳井 晴夫
第13号	1977年10月30日	「計量」と「なれ」	安本 美典
第14号	1978年3月8日	これからの行動計量学会	林 知己夫
第15号	1978年7月31日	現象解明と方法について	岩坪 秀一
第16号	1978年11月8日	人間の評価の利用	茅 陽一
第17号	1979年1月10日	喫煙論争をめぐる	古川 俊之
第18号	1979年5月20日	隣り付き合いの記	丘本 正
第19号	1979年10月10日	いよいよ80年代の活躍へ	松原 望
第20号	1980年1月20日	行動科学におけるティコ・ブラーエを待望する	印東 太郎
第21号	1980年4月15日	計量医学の要	駒澤 勉
第22号	1980年10月10日	悪貨は良貨を駆逐する	井関 利明
第23号	1981年4月2日	1980年代の役割と期待	河口 至商
第24号	1981年10月19日	行動計量学と多変量時系列解析	脇本 和昌
第25号	1982年1月20日	行動計量学での課題	浅野長一郎
第26号	1982年3月10日	客観的測定によるアプローチと主観的アプローチ	開原 成允
第27号	1982年7月7日	凡才にはつらい行動計量の話	水野 欽司
第28号	1982年10月25日	パソコン雑感	藤田 広一
第29号	1983年3月19日	実証的国際比較研究に参加して	飽戸 弘
第30号	1983年5月14日	消費者運動のすすめ - メーカーとユーザーの対話のために -	木下 富雄
第31号	1983年8月8日	行動計量学の行方	大島 正光
第32号	1983年11月7日	多様性、調和、統一、共存	上笹 恒
第33号	1984年4月9日	ヴェルサイユの空は晴れていたか	林 知己夫

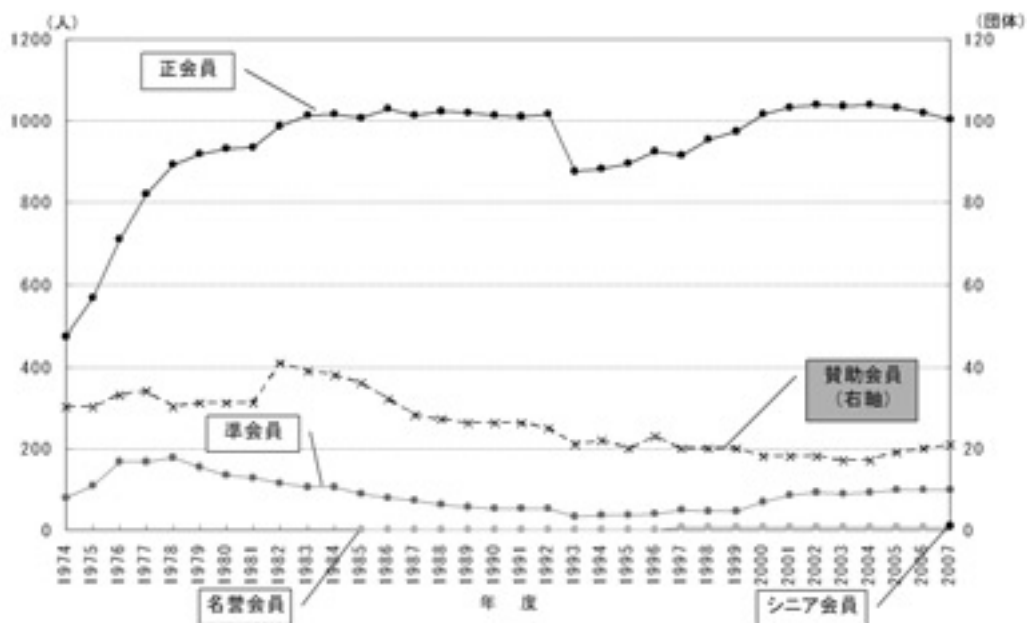
号	発行年月日	巻頭言タイトル	著者
第34号	1984年9月17日	「データ解析」随想	奥野 忠一
第35号	1984年11月8日	様々の課題と変容	丸山久美子
第36号	1985年4月8日	統計的データ解析の術的側面 - SDA は誰にでもできるか -	後藤 昌司
第37号	1985年9月30日	期待と戸惑い	岡太 彬訓
第38号	1986年1月27日	情報化先進国に在って思うこと	池田 央
第39号	1986年7月30日	文化の行動計量	三隅二不二
第40号	1986年10月8日	モデル診断と計算機統計学	田中 豊
第41号	1987年3月26日	村落研究と計量的アプローチ	西田 春彦
第42号	1987年11月18日	医学と行動計量学	井上 通敏
第43号	1988年2月26日	学会活動と行動計量学シリーズ刊行	肥田野 直
第44号	1988年6月15日	情報技術革新と人間行動	江川 清
第45号	1988年8月15日	今、“行動計量”に欲しいもの	水野 欽司
第46号	1989年1月31日	計量化の価値をどこに見いだすか	吉村 功
第47号	1989年4月12日	社会システムのリストラクチュアリング	熊田 禎宣
第48号	1989年9月30日	法律学と行動計量学	松村 良之
第49号	1990年3月27日	研究評価	野元 菊雄
第50号	1990年4月30日	行動計量の資産を作ろう	池田 央
第51号	1991年3月15日	調査データベースの必要性	中西 尚道
第52号	1991年5月1日	生活習慣の計量	高木 廣文
第53号	1991年8月25日	理事長就任についてのご挨拶	水野 欽司
第54号	1991年10月5日	気になる言葉	海野 道郎
第55号	1992年1月7日	文献の顔と学会の顔	村上 征勝
第56号	1992年6月15日	教養改組と行動計量学	田栗 正章
第57号	1992年10月15日	これからの時代と行動計量学	林 知己夫
第58号	1993年3月15日	行動計量学と現場主義	岩坪 秀一
第59号	1993年10月15日	計算機環境と行動計量学	馬場 康維
第60号	1994年3月15日	意思決定の行動計量学	繁樹 算男
第61号	1994年6月1日	理事長に就任して	柳井 晴夫
第62号	1994年9月1日	行動計量学は虚学か	齋藤 堯幸
第63号	1994年12月1日	臨床医学研究と行動計量学	久保 武士
第64号	1995年3月1日	数理モデルと日常言語	村上 隆
第65号	1995年6月1日	統計手法の選択	岩崎 学
第66号	1995年9月1日	梅干しと塩づけオリーブ	高根 芳雄
第67号	1995年12月1日	止めよう!! 見ぬフリ、知らぬフリ	柳原 良造
第68号	1996年2月15日	統計を恐れず、行動計量という海へ出よう	宮原 英夫
第69号	1996年5月25日	見るもの、見えないもの、量れること、量れないこと	飽戸 弘
第70号	1996年10月1日	第24回大会を終えて	宮埜 壽夫
第71号	1996年12月1日	大学教育の一環としての「住民調査」	吉野 諒三
第72号	1997年2月25日	調査はむづかしい	林 文
第73号	1997年6月1日	理事長に再選されて	柳井 晴夫
第74号	1997年9月1日	急がれる調査データライブラリーの構築	杉山 明子
第75号	1997年12月1日	第25回大会を終えて	海野 道郎
第76号	1998年3月1日	社会調査データの活用	佐々木正直

号	発行年月日	巻頭言タイトル	著者
第77号	1998年6月1日	年寄りの昔話	京極 純一
第78号	1998年9月1日	小学校からの行動計量学会	市川 伸一
第79号	1998年12月1日	第26回大会を終えて	池田 央
第80号	1999年3月1日	組織の構造と発展、ひとつのケース	西里 静彦
第81号	1999年6月1日	21世紀は行動計量学の時代である	狩野 裕
第82号	1999年9月1日	春の合宿セミナーについて	岡太 彬訓
第83号	1999年12月1日	第27回大会を終えて	垂水 共之
第84号	2000年3月1日	論文 - その世俗的な話し -	林 知己夫
第85号	2000年6月1日	新理事長に選ばれて	杉山 明子
第86号	2000年9月1日	道具は原理を知ってこそ使うべきか	足立 浩平
第87号	2000年12月1日	第28回大会を終えて	繁榎 算男
第88号	2001年3月1日	データマイニングと認知科学	豊田 秀樹
第89号	2001年6月1日	統計解析の原理の教育	南風原朝和
第90号	2001年9月1日	コンピュータがひらくあたらしい統計学、 そして時代が求めるデータ解析術	山口 和範
第91号	2001年12月1日	大会を終えて	木下 富雄
第92号	2002年3月1日	実践としての行動計量学	吉村 宰
第93号	2002年6月1日	行動計量学会の国際化 - 心理測定学会国際大会 (IMPS2001) の体験を通して -	柳井 晴夫
第94号	2002年9月1日	母集団力学に基づく日本行動計量学会の現状分析	江島 伸興
第95号	2002年12月1日	林知己夫先生を偲んで	杉山 明子
第96号	2003年3月1日	第30回行動計量学会大会報告	今泉 忠
第97号	2003年6月1日	理事長に再選されて	杉山 明子
第98号	2003年9月1日	「行動計量学」とは何か	竹村 和久
第99号	2003年12月1日	第31回大会を終えて	村上 隆
第100号	2004年3月1日	学会への提言	芳賀麻誉美
第101号	2004年6月1日	「データの科学」と林知己夫著作集	村上 征勝
第102号	2004年9月1日	個人情報の保護とデータ収集の重要性	西川 浩昭
第103号	2004年12月1日	日本行動計量学会第32回大会を終えて	二宮 理熹
第104号	2005年3月1日	医学統計学の実践	濱崎 俊光
第105号	2005年6月1日	産業界と学会の交流の場	朝野 熙彦
第106号	2005年9月1日	実務における行動計量	横田賀英子
第107号	2005年12月1日	日本行動計量学会第33回大会を終えて	植野 真臣
第108号	2006年3月1日	理事長の任期を終えて	杉山 明子
第109・110号 (合併)	2006年9月1日	理事長に選出されて	飽戸 弘
第111号	2006年12月1日	行動計量学会の更なる発展を願いつつ - 名誉会員に推薦いただきまして -	池田 央
第112号	2007年3月1日	日本行動計量学会第34回大会始末記	丸山久美子
第113号	2007年6月1日	調査の終焉	鈴木 督久
第114号	2007年9月1日	「林知己夫賞(功績賞)に！」	古川 俊之
第115号	2007年12月1日	日本行動計量学会第35回大会報告	村上 征勝
第116号	2008年3月1日	日本の統計教育の現状と期待	竹内 光悦

8 会員数の変遷

会員の種別には、正会員、準会員（学生会員）、名誉会員、シニア会員、賛助会員の5つがある（シニア会員は2005年度から新設）。学会設立後の1974年6月7日の在籍数は、正会員473名、準会員80名、賛助会員30団体であったのが、2007年11月14日の時点で、正会員1003名、準会員98名、名誉会員8名、シニア会員1名、賛助会員21団体となっている。なお、会報27号（1982年7月7日発行）には、学会設立から10年間の会員数の動向が載っているのので、参考にされたい。

図1 会員数の推移（概要）



注) 会員データベースの古い記録からは正確な会員数の変化を追い切れなかったため、会報に記載されていた会員数のうち、その年度の最も新しい人数を用いながら、会員数の変化を大まかに示したものである。1993年度に正会員が大きく減っているのは、それまでの会費長期未納者などを整理したためである。

編 集 後 記

日本行動計量学会35年記念誌を皆様のお手元にお届けできることを嬉しく思います。例えば、2年前2006年7月の理事会で、学会創設35周年を記念する事業の一つとして形に残るものを作成するという事で35年記念誌編集委員会が発足し、本来ならば今年の学会大会までに発行する予定が遅れ、その後メンバーの変更などして、1年遅れではありますが、なんとか発行にたどりつくことができました。

資料編として、本学会の35年間の歩みを掲載いたしました。昔のことを思い出して懐かしいと思われる方もいらっしゃるでしょうが、初めて学会の創設の経緯をお知りになった方も少なくないのではないかと思います。当時の資料が存在していないものもあり、不十分な部分もあるかと思えます。もし、詳細な情報をお持ちのかたがおられましたら、学会事務局までご連絡いただければ幸いです。

資料編と並び、本誌の中心となるのは、会員の皆様からのご寄稿ですが、今回は名誉会員、現役員、元大会実行委員長、元理事、学会賞受賞者の方々に寄稿を依頼し、61名の先生方から原稿を掲載いたしました。厚くお礼申し上げます。こちらについても、寄稿すると表明されたにもかかわらず、届かない原稿があり、さらにそういう人に限って催促しにくいなど、何かを出版するにはごく当然のことなのでしょうが、苦労させられました。また、発行に際し8社から協賛を賜りました。ご協力を頂いた各社およびその担当者の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

最後になりましたが、学会のさらなる発展のために、会員の皆様方には今後ともかわらぬご支援とご協力を賜りたくお願い申し上げます。また、本誌の発行に際しご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。

(西川浩昭 記)

2008年9月

日本行動計量学会35年記念誌編集委員会

委員長 柳井 晴夫

副委員長 杉山 明子

委員 岩坪 秀一・西川 浩昭

馬場 康維・丸山久美子

松原 望・森本 栄一

森 裕一・吉野 諒三

協賛企業一覧

日本行動計量学会35年記念誌刊行にあたり、以下の各企業からご支援を賜りました。
ここにご芳名を記して、厚く御礼申し上げます。

株式会社 朝倉書店
株式会社 教育測定研究所
株式会社 現代数学社
株式会社 数理システム
株式会社 ビデオリサーチ
株式会社 マーケティングセンター
社団法人 輿論科学協会
シミック 株式会社

(50音順)